

324  
408

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4

始



324-408



境野黃洋  
新井石禪 共著

# 禪宗小史

東京 鴻盟社發行

大正  
3. 8. 27  
内交

禪宗小史正誤表

頁	行	誤	正
五〇	二	戸部侍郎	戸部侍郎
七〇	十一	食す	食とす
七八	十一	懷敵	懷敵(以下準)
八三	系統表		
九一	六	東林常總	東林常總
一〇五	六	圓通道旻	圓通道旻
一一五	七	勝因成靜	勝因成靜
一二一	一	雪峯有需	雪峯有需
一二四	四	根帶	根帶
一九三	四	參隨	參隨
一九九	十二	天龍寺	相國寺
		四行「知らず」の下「律師の禪」より九行「系せり」まで約五行、百三十九字を削除す	四行「知らず」の下「律師の禪」より九行「系せり」まで約五行、百三十九字を削除す
		定なるべし	是なるべし
		北問	北問
		東林常總	東林常總
		圓通道旻	圓通道旻
		勝因成靜	勝因成靜
		雪峯有需	雪峯有需
		泐潭應乾	泐潭應乾
		開先行瑛	開先行瑛
		褒親有端	褒親有端

序

古來禪宗に機縁の語を録するもの頗る多く、僧傳また決して乏しからず。唯禪宗變遷の要を記して簡明初學に便すべきものに至りては未だ其の書を見ず。本書の如き、固より其の需に應ずるに於て甚だ缺くることあるべしと雖、希ふ所は、此の種好述作のために、其の緒を開くにあり。

大正三年六月

著者識

禪宗小史目次  
第一篇 印度支那

第一章	總論	一
第二章	印度傳燈	八
第三章	達磨以前の支那禪教	十二
第四章	四師傳持	二十
第五章	分派の起源	二十六
第六章	六祖下の二大系	三十四
第七章	南頓北進と教禪一致	四十一
第七章	五家の分出(上)	四十九
第八章	五家の分出(下)	五十六

目次

第九章 宋以後の五家(上)……………六十四

第十章 宋以後の五家(中ノ一)……………七十四

第十一章 宋以後の五家(中ノ二)……………八十四

第十二章 宋以後の五家(下)……………九十五

### 第二篇 日本

第一章 鎌倉以前の禪……………百三

第二章 榮西禪師及び其の系統……………百十三

第三章 曹洞禪の傳來……………百二十一

第四章 聖一大覺佛光三師の系統……………百三十一

第五章 大燈夢窓二師の系統……………百四十二

第六章 寒巖瑩山二禪師の系統……………百五十二

### 目次終

第七章 黃檗宗の起源及び心越禪師……………百六十三

第八章 臨濟宗の中興……………百七十四

第九章 曹洞宗の隆盛……………百八十六

第十章 明治以後の禪宗……………百九十五

### 例言 三則

禪に教理の説くべきなし説けば則ち第二義に墮す史を説く多く僧傳と法統とを列ぬるに似たりこれ禪史の性質自ら已むを得ざるものあるなり

法統繼嗣について古來異説の存するもの少からず支那に於て天皇道悟の如き日本に於て寒巖義尹の如き著しき類例なり斯くの如きは必ずしも一己の見を以て其の是非を定めず一々異説を列擧して其の判断を讀者に委すこれ本書の目的固より之を評判せんとするにあらず之を記述せんとするにあればなり

禪と一般文明史思想史との交渉殊に文藝發達との關係の如き或は頗る讀者の感興を惹くに足るものあらん今特に之を叙するを避けたりこれ紙數の限られたる小冊子に於て企圖せらるべきにあらず恐るゝところは禪に直接なる重要事項の能く網羅せられ得たるや否やにありて間接なる他の交渉關係を顧慮するに違あらざればなり

# 禪宗小史

境野黃洋  
新井石禪 共著

## 第壹篇 印度支那

### 第壹章 總論

禪那(Dhyana)は獨り佛教のみならず、釋迦佛出世以前に於ける婆羅門教諸派に於ても、既に一般に修せられたるところにして、これ蓋し印度宗教の一特色なりといふべし。然れども其の所謂禪の内容に於ては、婆羅門教と、佛教と素より決して同じきこと能はず、婆羅門教中にもありても、諸派の修するところ、また各異なるところあり、



總じて之を外道禪と呼ぶ。

婆羅門教中にありて、佛教と發達上の關係最も密接なるものは僧  
法(Sāṅkhya)即ち數論派なれば、數論派の禪と佛教の禪とに、また發達  
上關係あるは論を俟たず、而して數論派より分派開展したりと稱  
せらるゝ、瑜伽派(Yoga)に至りては、所謂外道中にありて最も禪定を  
重んずるものにして、冥想と修定とを以て、出世入道の第一の要樞  
となすものなり。

佛教は其の所說廣博なりといへども、戒定惠の三學を以て之を總  
ぶることを得、中に於て戒は外を護る、なほ甲冑の如し、惠は煩惱を  
斷ず、なほ弓箭に似たり、而して定は弓箭を執るの手に比すべし。斷  
惑のことを説く、常に定を以て、修道の中心とするは、實に之による。  
故に佛教、其の門戸、八萬四千の多きを構ふといへども、一として、定

によりて斷惑の手段となさざるはなし。此に於て小乘には小乘禪  
あり、大乘には大乘禪あり、大乘派を別つに隨ひて、其の禪を説く、又  
各異なるを致し、修定の道、互に其の方法を同じくせざるものある  
に至れり。

小乘教にありては、四禪四定を説く、四禪は色界の禪定にして、四定  
は無色界の禪定なり。



色界禪は、苦樂を感受する精神作用、即ち受の心所に憂喜苦樂捨の五種の區別あるにより、憂苦の二受を欲界に配し、喜樂捨の三受を漸次に捨離する次第に基き、其の名を立てたるものなることを知るべし。無色界禪は、外界を空じ、内界を空じ、一切を空じ、空の中に、なほ自己の存在を認むる非想非々想の有頂天の禪定に進む順序を示したるものとす。合して之を八等至といふ。

蓋し禪に種々の異名あり、禪は禪那の略にして、譯して靜慮といふ。定は、精神の動搖を離れて、平安なる状態を呼ぶものにして、禪那も素より定に外ならずと雖、色界にありては、智惠の作用なほ明了なるが故に、單に定惠均等の意を以て靜慮となし、無色界にありては、智惠、漸次に暗昧の境に入るが故に、其の特色より言ふ時は、之を色界に分ち、禪と言はずして殊に定と稱す、これ四禪四定の區別ある

所以なり。其他、等至は三摩鉢底(Samāpatti)の譯にして、なほ三摩呬多(Samāhita)即ち等引、三摩地(Samādhi)即ち等持(或は三昧と、も音譯す)、心一境性(質多翳迦竭羅多 Cittaikagrata)奢摩他(Samatha)即ち止、及び現法樂住(Dīśadharmaskhavihāra)等の異稱あり、之に禪那を加へて所謂定有七名といふもの是なり。

定に有心定、無心定の二種あり、色界天にありては、(四定合して、總べて十八天あり)第四禪(總べて九天あり)の第四に無想天あり、此の天の禪は、名けて之を無想定といひ、此の定に入る時は、一切の心作用を滅す、故に之を無心定となす。一類の婆羅門教徒は、誤りて之を以て涅槃となしたりといふ。佛教にては、凡夫の修する所の禪は、之を以て最上となし、之より以上(四禪の第五以上)は、總べて聖者の修する所と定む。又無色界の非想非非想處の禪定は、名けて之を滅盡定といひ、無想定(四禪の第五以上)の如く、純然たる

無心にあらず、しかも自覺の意識なければ、また之を無心定といふべし、これ數論派に於て涅槃と思惟せし所のものなりといふ。佛教にありては、斷惑の上より、定惠二者の力を要するものとするが故、此の二無心定を嫌ひ、無想天にては般涅槃するものなしと定め、有頂の昧劣ある等至には無漏起ることなしと説くなり。

佛教の禪はもと定と惠と雙修並行を要するものにして、惠の昧劣闇鈍なる、單純の禪は之を斥くるものとす。されば小乘にありて、七方便の禪も、定惠雙修なり、正觀に入りて、見惑を斷ずるも定惠雙修なり、修惑を斷ずる事もまた定惠雙修なり、此の方便觀と正觀とは、即ち小乘教の禪定と稱すべきものなり。

大乘教に入りても、また固より止觀雙修を要するものと説く。止は即ち奢摩他にして、觀は毗鉢舍那 (Vipassana) の譯語なり、毗鉢舍那は、

惠の内觀作用なり。法相宗の五重唯識觀、三論宗の八不中道觀、天台宗の三諦圓融觀、華嚴宗の事々無碍法界觀、眞言密教の入我我入觀等、皆これ大乘の禪に外ならず。故に廣く之を言へば、禪を離れて佛教あること能はず、禪は佛教の實際的方面を總括せる名稱なりといふべし。

大乘禪に二種の區別あり、漸修の禪と頓證の禪なり、上述の諸大乘家の禪はこれ漸修の禪にして、定により、惠を發し、惠を以て法界の理を證す、其の理を證するや、住行向地の階級を経、六即の歷程を進み、以て漸次に圓理を分證して究竟に達す。頓證の禪は之と異に、定惠先後を絶し、二者不二の端的に、八萬の門を圓成し、阿鼻の業を滅却する活手段にして、禪宗の禪は即ち之に屬するものとす。

## 第二章 印度傳燈

禪は佛陀果上の妙意に出で、其の拈華衆に示すや、迦葉尊者獨り破顏微笑す、佛乃ち法を以て迦葉に付して云はく、「吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相微妙法門、不立文字、教外別傳、付囑摩訶迦葉」と、事問佛決疑經」に出でたりといふ。決疑經の眞僞に就いては、異論尠からずと雖、今は唯傳説に隨ひて、之を述ぶるに止むべし。

迦葉尊者は之を阿難尊者に傳へ、爾後嫡々密付、以て二十四祖師子尊者に至るまでは、畧ほ他の大乘諸派の所談と大差なし。蓋し二十四祖相承のこと、もと付法藏因緣傳」に出で、此の書は、北魏の吉迦夜又三藏が、沙門曇曜と共に譯出する所なりといへり。但し付法藏傳」には婆須密尊者を除いて擧げざるが故、唯二十三祖にして、禪宗の

所傳と少しく異なる所あり。宋の明教大師は傳法正宗定祖圖」及び傳法正宗記」等を作り、達磨達羅禪經」に基きて、師子尊者以後に、更に四人を加へ、二十八祖となし、以て禪宗の定説となせり。

付法藏傳」にては、師子尊者は、其の法を罽賓國に弘むるに當り、國王彌羅掘、佛教を迫害し、塔寺を破壊し、僧侶を殺害したりしかば、終に此の法難により、國王のために命を損し、付法藏の人、こゝに其の傳を失へりとなせり。事の眞僞は知るべからずと雖、こゝに所謂彌羅掘王とは、紀元第五世紀の頃、北方より印度に侵入し來りし蒙古王ミヒラクラ(mihirakula)なるべし。然るに明教大師は、師子尊者の遭難によりて、法統斷絶せりとの説を斥け、付法藏傳」の後世を誤るもの多きを嘆じ、盛んに二十八祖傳統不斷相承の説を主張したり。今二十八祖の名を左に掲ぐべし。

摩訶迦葉<sup>(1)</sup> (Mahākāśyāpa) — 阿難陀<sup>(2)</sup> (Ananda) — 商那和修<sup>(3)</sup> (Śāṇavāsa) — 優波鞠多<sup>(4)</sup> (Upagupta) — 提多迦<sup>(5)</sup> (Dhṛitaka) — 彌遮迦<sup>(6)</sup> (Mikaka) — 末田地<sup>(7)</sup> (Madhyāntika)

婆須蜜<sup>(7)</sup> (Vasumitra) — 佛陀難提<sup>(8)</sup> (Buddhanandi) — 伏駄蜜多<sup>(9)</sup> (Buddhamitra) — 脇尊者<sup>(10)</sup> (Pāśva) — 富那夜奢<sup>(11)</sup> (Puṇyasas) — 馬鳴<sup>(12)</sup> (Aśvaghoṣa)

迦毘摩羅<sup>(13)</sup> (Kapilāśala) — 龍樹<sup>(14)</sup> (Nāgārjuna) — 迦那提婆<sup>(15)</sup> (Kānadeva) — 羅睺羅多<sup>(16)</sup> (Rāhulata) — 僧伽難提<sup>(17)</sup> (Saṅghanandi)

伽耶舍多<sup>(18)</sup> (Gayāśata) — 鳩摩羅多<sup>(19)</sup> (Kumārata) — 闍夜多<sup>(20)</sup> (Ghaya) — 婆修盤頭<sup>(21)</sup> (Vasubandhu)

摩拏羅<sup>(22)</sup> (Manura) — 鶴勒那<sup>(23)</sup> (Hakiena) — 師子<sup>(24)</sup> (Sinha) — 婆舍斯多<sup>(25)</sup> (Vasīśata) — 不如蜜多<sup>(26)</sup> (Puramitra) — 般若多羅<sup>(27)</sup> (Prajñāra)

菩提達磨<sup>(28)</sup> (Bodhidharma)

一般佛教の傳統に於ては、阿難尊者の法を承くるものを商那和修とし、末田地は商那和修に嗣ぎ、斯くの如くにして、迦葉より優波鞠多に至るまで、佛滅後百年間を五師傳持と稱し、或は末田地は、商那

和修と共に、阿難の法を嗣げる傍傳とし、特に五師の順序によらず、所謂四師傳持を説くものあり。又此の系統中に於て、最も注意すべき人は婆須蜜尊者にして、尊者は、佛教史上最も著名なる學者なり、所謂譯して世友尊者といふもの是なり。『付法藏傳』には、之を傳統中に掲げず、彌遮迦より直ちに佛陀難提に傳ふるものとなせり。なほ脅尊者は、迦膩色迦の三藏結集に當り、其上首たりしといふを以て其の名著しく知られ、馬鳴、龍樹、提婆、世親等の諸大菩薩のことの如きは、今特に之を絮説するの要なかるべし。以上の系統は、殊に必ずしも禪宗のみの傳來を示すものにあらずるが如しといへども、思ふに心印密付を以て師資相承け、餘宗また之を取りて、各其の宗の由來を明すとすべきもの、如し。殊に之によりて一宗相承の唯一の依憑となすものは即ち天台宗にして、

十二  
所謂金口相承は、専ら『付法藏傳』に基いて、二十四祖傳統斷絶の説を執り、以て常に二十八祖説に反す。之を二十四祖と數ふるは、二十三祖に、傍傳の末田地尊者を加ふるものとす。これ二十四祖、二十八祖論争の要點にして、禪宗に於ては『定祖圖』の説により、専ら達磨の正統嗣法を信ずるものとす。

### 第三章 達磨以前の支那禪教

大小二乗の教、支那に傳來すると同時に、其の禪法の之に伴ひて譯傳せられたるは素より當然にして、迦葉摩騰カシヤパモトウガ (Kāśyapa-muktānaga) 竺法蘭セツポラン (Dharmarakṣa) の時の如きは、其の事情詳ならざるもの多しと雖、後漢末、安世高、支婁迦讖の二大譯經家の支那に來るや、既に禪經の譯出せらるゝもの少からず、就中安世高は、後の學者の仰いて以て禪教

の學の祖と稱する所なり。當時の禪法、多く小乘方便の禪法に屬し、或は五門の禪といひ(即ち五停心觀にして、數息、不淨、慈悲、因緣念佛の五觀)、或は禪行三十七品といひ(三十七道品)、數字によりて之を呼びしが爲め、之を禪數の學と稱せしもの、如し。其の後、禪法を修するもの、或は其の方法を傳ふるもの、其の數尠からずと雖、要するに、多くは五停心觀、四念處觀等其の主なるものなりしが如し。

安世高以後に於て最も注目すべきものは釋道安なり。道安は、世高より畧ぼ百五十年の後、五胡亂世の初期に出で、石氏の後趙亂るゝに當り、難を避けて襄陽に赴き、苻秦の兵、東晉と交戦し、襄陽陷るに及び、苻氏のために擁せられて長安に向ふ。其の始めて釋氏を稱し、若しくは、經典の注解を著はし、或は燒香禮佛の儀式を定めたるが如き、皆道安に濫觴するは能く人の知る所なり。最も深く安世高の

跡を慕ひ、世高所譯の禪經、皆爲めに序を作りて之を流布し、或は注して之を行ふ。道安は佛圖澄(Buddhośinga)の弟子にして、廬山の惠遠は即ち道安の徒なり。

道安の長安に赴くや、惠遠は師と袂を分ちて南方に去り、廬山の東林寺に居る。幾もなくして、北方は苻秦敗れて姚秦興り、龜茲の鳩摩羅什(Kumarajīva)長安に來り、秦主姚興の保護の下に、逍遙園に於て、多く經論の翻譯をなし、名聲四方に振ふ。羅什譯出する所の經論中、特に禪に關するものに、『坐禪三昧經』あり、其の他『禪秘要法經』等なほ兩三あり。就中『坐禪三昧經』は鳩摩羅多(印度第十九祖)の述ぶる所を基とし、雜ふるに馬鳴(同第十祖)の説を以てし、其の他、古くは優波鞠多(同第四祖)、婆須蜜(同第七祖)、脇尊者(同第十祖)以下、諸祖の傳ふる所を纂めて成れる所に於て、羅什は初め、此等諸家の禪要を以て之を弟子僧叡に授けたり

しが、僧叡は之を纂集し、繁を去り、重複せるを除き、輯めて三卷となし、羅什の校閲を経て成れるところなりといふ。

羅什の門下は其の數甚だ多しと雖、僧肇、僧融、道生、惠觀の四人は其の最も傑出せるものにして、中に於て、道生、惠觀の二人は、共に南方の學者なり。僧肇、僧融二人の禪法に於ける關係は、得て之を知るこゝと能はずと雖、道生、惠觀の二人は其の禪法に淺からざる關係ありしことを想見するに足るべき事實あり。此の二人は共に羅什の死後、南地に還りて其の教を弘めしが、特に道生は盛んに頓悟成佛義なるものを唱へ、當時の學者の徒らに文字言語に拘泥するを斥け、佛教の眞意は、言語文字を離れて始めて見るべしと説けり。蓋し文字は月を指すの指なり、文字に滞りて圓意を得ざるは、指を以て月となすの類のみとは、既に『坐禪三昧經』に出てたる譬喩なるを見れ

ば、禪經の眞意を受けたるものは、必ずしも僧叡一人にあらざることを知るべし。所謂頓悟成佛義の詳細は、今日之を明にすること能はざるも、羅什所傳の禪より出でたるものなることは之を想像するに難からず。而して惠觀も亦同時に、此の説を主張し、之より久しく頓悟成佛義、南方學者の間には非せられたりといふにより、其の當時の思想に與へたる影響の少からざりしを思ふべし。

羅什の長安にあるや、少しく後れて海路支那に來りし佛<sup>ブツ</sup>陀<sup>ダ</sup>跋<sup>ハツ</sup>陀<sup>ダ</sup>羅<sup>ラ</sup> (Buddhabhadra) 即ち覺賢三藏あり。覺賢はもと北天竺の人にして、罽賓に學びしが、會ま支那の留學生智嚴の請により、禪を弘めんがために支那に來りしものなり。初め羅什の盛名を聞き、また一たび長安に入りしが、後却て什の徒の疾む所となり、退けられて長安を去る。時に廬山の惠遠、之を傳聞し、迎へて廬山に入れ、覺賢遂に廬山に於

て種々の經論を譯出す、殊に『達摩多羅禪經』は其の最も重要なものにして、罽賓に於ける達摩多羅所傳の禪法なるが故に斯く稱呼せり。古くは、羅什の禪經と之を區別して、關中の禪經、廬山の禪經を以て呼べり。

安世高始めて諸禪經を出してより、羅什、惠遠の頃に至りては、既に實際に之を修するものなかりしが如く、後の禪法なるもの、主として羅什、覺賢に其の源を發す。覺賢の業として、廣く後世に傳へらるゝ所は、建康道場寺に於ける六十卷の『華嚴經』翻譯にありといへども、しかも覺賢の目的とする所は全く此の禪法弘通にありしなり。覺賢の弟子として最も著名なるものは、北魏に聘せられ、後、魏武の法難に死したる玄高なり。覺賢を支那に伴ひたる智嚴も亦禪の達人なりしが如きも、再び罽賓に赴きて、終に彼の地に於て入寂せり



といふ。

羅什、覺賢より凡そ五十餘年を経て、北魏の孝文帝の時、佛陀禪師あり、天竺より來り、孝文帝、之がために嵩山に少林寺を建て、居らしめ、衣供を公給せしめられたり。佛陀禪師の事蹟は詳ならざれども、恐らくは彼の『十地論』の翻譯に際し、其の譯場に列せし佛つた佛陀た扇多た (Dharmasanta) と同人なるべし。其の門に出でたるものを惠光、道房等とし、惠光は『地論』四分等に最も關係深き學者なるとは、人の能く知る所なれ共、禪法は寧ろ道房の後に傳はりし者の如し。道房の弟子に僧稠あり、後親しく佛陀禪師の印可を受け、高名一代を壓し、北齊の世、文宣帝の招請再三に及び、終に之に應じて鄴都に赴きしが、帝は爲めに雲門寺を建て、居らしめ、北方禪業の盛なりしこと、前後に比なしと稱せられたり。

南方にありては、道生、惠觀以後頓悟成佛の説、久しく存在したりしことは明なるが、其の末流の詳を悉くなすこと能はず。齊梁の際に當り、有名なる寶誌(或は保誌に作る) 禪師あり。同時に傅大士等ありて、其の行跡甚だ後の禪徒に近きものあり。殊に寶誌は専ら禪法を修したる人にして、奇行一世を驚かし、梁の武帝の歸依を受け、入寂の後、其の墓地鐘山に一寺を建立して開善寺と名く。傅大士、名は翁、字を玄風といひ、自ら雙林樹下當來解脫善惠大士と號す。道佛二教を學んで、其の行ひ、全く洒落脫塵の風あり、其の著『心王銘』の如き、多く人の傳誦する所とす。普建、普成二人の子あり、共に出家す。今の一切經の輪藏は、大士に始まると傳ふ。思ふに當時、支那の南方最も老莊の學を喜ぶもの多し、其の學風の佛教に及ぼしたる影響も少からざるべしと雖、道生、惠觀以後の佛教が、力を此の時代に遺したるもの

も亦絶無といふべからず、これ寶誌、傅大士を見るに至りし所以ならん。斯の如くにして、北に佛陀出て、僧稠嗣ぎ、南に寶誌、傅大士あるの時、機の漸く熟するに當り、達磨禪師は恰も印度より梁都建康に達したり。

#### 第四章 四師傳持

支那に於ける達磨以前の禪は、或は五停心、或は四念處等、方便漸修の禪にして、羅什、覺賢所傳の如き、之を大乘禪と稱すと雖、未だ別傳教外の禪を去ること遠し。所謂禪宗なるもの、端緒は、達磨大師の西來以後始めて之を見る。これ即ち印度傳燈第二十八祖、支那禪宗の初祖、圓覺大師なり。大師號は唐の代宗皇帝の賜諡する所とす。傳によれば、菩提達磨 (Bodhidharma) は、南天竺、香至國王の第三子なり。

初めの名は菩提多羅 (Bodhiyana) 父王殂後、般若多羅尊者に隨ひて出家し、名を改めて達磨といふ。法化甚だ廣く、其の姪異見王の婆羅門教に執するを改めしめ、般若多羅滅後、其の遺命により、支那に來りて始めて法を傳ふ。こゝに所謂香至國は、今其の地理を詳にせず。達磨の支那に來りし年代に就いては、諸書傳ふる所、一二不同あり、就中『景德傳燈錄』には、梁の武帝の普通八年といふも、『正宗記』は、明に其の誤りなるを見て、正して普通元年九月二十一日に南海に着すといへり。初め般若多羅尊者、達磨に告げ、我滅後六十七載にして、汝震且に赴くべしと。されば磨の支那に着せし時は、年齢の既に頗る高かりしを知るに足るべし。磨の廣州に達するや、州の刺史蕭昂、之を以て梁の武帝に奏す、(當時蕭昂廣州の刺史たりし事實を見ず、恐らくは昂の姪蕭勵と誤りしか、姑らく疑を存すとは、『正宗記』著者の言なり)即ち詔して建康に招請す。帝自ら之を迎へ、正殿に延き、教を請

ふ。磨乃ち無功德を以て呵し、不識を以て之を開く。然れども帝の機終に契はず、此に於て達磨梁を去り、江を渡りて北方魏に赴く。梁の武帝は、姓を蕭氏といひ、名は衍、齊の明帝、暴虐を逞うし、高帝、武帝の諸子を殘害し、其の子寶卷嗣いで立ち、また暗愚、嘻戲度なく、大臣以下、刀勅と稱して誅殺せらるゝもの多く、蕭衍の兄、蕭懿、また之に死せしかば、衍終に兵を擧げ、帝を廢して東昏侯となし、一時皇弟寶融を擁立せしが、終に齊に代りて自ら帝位に即く。帝初め道教を信ぜしが、後天監三年に、道俗二萬餘人を率ひ、重雲殿に登りて、捨道奉佛の願文を讀み、之より道教の徒、多く梁を去りて北方に赴く。帝特に深く寶誌禪師に歸依し、建つるところの寺院、光宅、開善を第一とし、其の他頗る多し。帝の長子統、字は德施、其の信仰の篤き、父帝に劣らず、特に惠義殿を建て、明僧を延いて講論せしむ、世に所謂昭

明太子是なり。

達磨の梁を去りし普通元年は、恰も北方は北魏の孝明帝正光元年に當る。達磨則ち嵩岳の少室山少林寺に入り、壁に面して默然端座、魏の明帝屢詔を下して召せども終に起たず、人呼んで壁觀婆羅門といふ。後に惠可大師を得て、授くるに袈裟を以てし、以て法信となし、内には法印を傳へて以て證心に契ひ、外には袈裟を付して以て宗旨を定むと告げ、吾本來茲土、傳法救迷情、一花開五葉、結果自然成の一偈を殘し、幾くもなくして奄然長逝す、或は云く、此の時、達磨また四卷の『楞迦經』を傳ふと、實にこれ魏主釗廢せられ、孝莊帝位に即きし永安元年にして、梁の武帝大通二年十月五日に當る。遺骸は之を熊耳山に葬る。達磨の法を承くるもの總べて四人、慧可、道育、道副、及び尼總持、而して惠可獨り我が髓を得たりと許さる、之を支那傳

法の第二祖とす。

惠可大師、初めの名は神光、洛京武牢の人、少にして老莊の學を習ひ、後、寶靜禪師に就いて佛教に入る、寶靜、今其の傳を詳にせず。達磨の少林に黙坐するや、神光、磨に面して道を問ふ。所謂雪中斷臂の傳説あるは此の時の事に屬す。即ち衣法の付囑を受け、名を惠可と改め、晩に鄴に赴き、或は酈、或は野、或は屠門酒家と雖、說法毫も其の處を擇ばず。會ま僧辨和なるものあり、盛んに『涅槃經』を講ず。可、其の寺門に至りて法を説く、和の徒、多く可に歸す。此に於て和、大に之を憤り、縣令翟仲侃なるものに告げ、可、狂説、頗る人を惑はすものとなし、捕へて之を刑に處す、これ隋の開寶十三年のことにして、大師時に年一百七歳なりといふ。唐の德宗皇帝、謚して大祖禪師といへり。

三祖僧璨大師は、其の俗姓生地を詳にせず、初め處士を以て二祖に

見え、其の名を告げず、唯言ふ、我業疾に罹る、師願はくは我が爲めに罪を懺し給へ」と。二祖答へて曰く、罪を將ち來れ、汝が爲めに懺せん」と。居士曰く、罪を覓むるに不可得なり」と。曰く、我、汝が爲めに罪を懺し竟る」と。此の時居士をして出家せしめて名を僧璨と命ず。後二年衣法を付し、師の戒により、舒州の皖公山(山谷山寺)に隱る。舒人呼んで赤頭璨といふ、病癒ゆと雖、黑髮再び生ぜざりしによる。隋の大業二年を以て寂す。唐の玄宗謚して鑒智禪師といふ。其の著『信心銘』は、今に至るまで學者の廣く玩ぶ所なり。

三祖の法を嗣ぐものは、即ち四祖道信大師にして、蘄陽の人なり。俗姓は司馬氏。沙彌を以て僧璨大師に謁し、付法受衣の後、蘄の破頭山(雙峰山)に居る。唐の太宗、屢召せども就かず、山居二十年。高宗の永徽二年を以て、世壽七十二にして寂す。代宗の世、大醫禪師の謚號を賜

ふ。  
以上の四大師に至るまでは、付法嫡々、中にも二祖の如き、其の會下旁出、人少からずといへども、未だ法流を分たず、恰も佛滅後の四師、鴻瓶傳持の世に似たり。四祖の下に至りて、始めて禪に派別の端を開き、五祖下、南北二流を分てるは、麴多の末、法教分派を見るに至りしに類す。故に今彼れに準じて、初期四代を假りに名けて四師傳持の世となす。

### 第五章 分派の起原

道信大師、一日衆に告げて曰く、我嘗て廬山に昇れり、絶頂より破頭山を望見す、時に紫雲あり、形蓋の如く、下に白氣あり、横に六道を分つ、是れ果して何の瑞ぞと、衆皆默然たり、獨り弘忍あり、答へて曰く、

これ和尚滅後、横に一枝の佛法を出すの兆にあらずやと。大師之を然りとせずと。傳説の眞偽は知るべからずと雖、禪宗に分派を生ぜしは、洵に四祖下、牛頭禪の横出に始まるものとす。

牛頭禪は牛頭山の法融禪師に出づ。禪師は潤州延陵の人なり、俗姓は韋氏。初め儒教を學び、後、佛教に歸して出家し、茅山に隱れ、更に轉じて建康の牛頭山幽棲寺北巖の石室に入り、宴坐觀心す。傳によるに、四祖遙に牛頭を望み、山に異人あるを知り、自ら山中に入り、法融の石室にあるに會し、機縁契合して、終に法を之に付すと。之より道俗來りて化を受くるもの多しと雖、久しく山を下ることを欲せず、しかも邑宰蕭元善なるもの、禪師の出て、建康の建初寺に住せんことを請ひ、辭すれども免れず、終に顯慶元年(唐の高宗)を以て建初に下り、翌年正月、世壽六十四にして寂す。

法融禪師の下に智巖禪師あり、師に代りて牛頭に住し、智巖は之を惠方に傳へ、惠方は之を法持に傳へ、法持は之を智威に傳へ、智威は之を惠忠に傳ふ。法融より惠忠に至るまでを、世に牛頭の六世と呼ぶ。四祖の所謂紫雲蓋下六道の白氣とは蓋し之を指すなり。惠忠禪師、會下甚だ盛なりしも、傑出の士に乏しかりしが、法系永く傳はらず。唯天台山の惟則禪師、其の名獨り著はる、其の所居の處を佛窟巖といふ。智威禪師の傍系に潤州鶴林寺の玄素禪師あり、其の法嗣に抗州徑山の道欽禪師あり、代宗の世、召されて闕に至り、國一禪師の號を賜ふ、其の建つる所の徑山禪寺(萬壽寺)は、後世、禪の大刹として人の能く知る所なり。貞元八年を以て寂す、謚して大覺禪師といふ。四祖の下に於て、正嫡として印信の衣鉢を承受するものを五祖弘忍大師となす。大師は蕪州黃梅の人なり、姓は周氏、其の會下に出づ

るもの神秀、惠安、智旣等十餘人に及ぶと雖、六祖惠能大師獨り衣鉢を繼ぐ。上元二年(高宗)を以て寂す、代宗謚して大滿禪師といふ。壽七十四。

初め五祖の門下、其の徒七百、五祖、衆中に於て付法の人を得んと欲し、各一偈を述べて、其の所見を呈せしむ。時に上座神秀、學内外に通じ、衆の推重する所なりしかば、人皆秀上座を以て之に擬す。神秀乃ち廊壁に一偈を書す。

身是菩提樹 心如明鏡臺 時々勤拂拭 莫使惹塵埃

と。五祖見て頗る之を嘆美す。時に廬行者なるものあり、碓房にありて杵臼の間に勞す、此の偈を聞いて未だ至らずとなし、夜密に一童子を伴ひ、廊に出て、偈を書せしめて曰く、

菩提本無樹 明鏡亦非臺 本來無一物 何處惹塵埃

と五祖之を見て心密に喜び、夜人をして廬行者を碓房に召さしめ、之に達磨所傳の袈裟を與へ、且つ曰く、達磨、異域より來り、法を二祖に授く、當時師承、信とすべきなし、故に傳ふるに袈裟を以てす、しかも今やまた傳衣を要せず、これ却つて爭論の端のみ、爾今汝に止めて、また後に傳ふる莫れと。又曰く、我が衆中、汝の得法を聽かば、必ず害意を懷くものあらん、速に去りて、隱晦時の至るを俟てと。廬行者衣を受け、拜謝して即夜南に去る。廬行者は即ち惠能大師なり。惠能大師は新州の人にして、俗姓は盧氏なり。幼にして父を喪ひ、母子二人、家極めて貧し、常に薪を市に鬻ぎ、以て生業となす。一日、市に人の『金剛經』を誦するを聽き、感ずる所あり、母に告げて、出でて師を尋ね、韶州に至り、一時寶林寺に居り、更に樂昌縣に於て沙門智遠に遇ひ、其の勸めにより、終に東山に五祖に謁することを得たり、時に

年三十二。五祖告ぐるに、嶺南の人、佛性なしといふを以てす、答ふるに、人有南北、佛性豈然の語あり、五祖之を異とし、特に碓房に就かしむ。得法の後、南に還り、四年の久しき、流俗の間に混じて人の知るなし。會ま廣州の法性寺に印宗なるものあり、『涅槃經』を講ず。大師此の寺に寓し、頗る印宗の心を動かし、廬居士は是れ肉身の菩薩なりと嘆ぜしむるに至る。此に於て印宗則ち耆舊宿徳を會し、大師をして始めて出家受戒せしむ。戒壇は昔時求那跋摩 (Guhavarman) の築く所なり。大師一たび韶の寶林に還らんとし、韶陽に至る。韶の刺史韋據等、請うて衆の爲めに法を説かしむ、今の『六祖壇經』に就きては、多少の異説なきにあらざるも、一般に此の時の説法を編したるものとなす。之より道譽高く上聞に達し、中宗使を遣はして召せども應ぜず、由て特に優詔を下し、寶林寺を改めて中興寺とし、其の規模を新

にせしめ、再び法泉寺と改稱し、なほ新州の舊居を寺となし、國恩寺といふ。先天二年七月、其の徒に告げて遽に新州に還り、其の八月二日、終に國恩寺に於て入寂す、年七十六。遺骨は韶の曹侯溪の濱に塔す、後の南華寺是なり。後世の禪、其の門葉繁しと雖、皆曹溪の流を汲む、なほ佛滅後印度に龍樹あり、第二の釋迦の稱あるが如く、大師はまことにこれ第二の達磨なり、憲宗皇帝の時、謚して大鑒禪師といふ。

六祖既に五祖の衣法を受けて南に去るや、神秀、惠安等の諸禪師の禪主として、北方に弘傳せられ、共に則天武后の歸向篤く、殊に神秀禪師は召されて洛陽に入り、内道場に奉仕し、嗣法の人、頗る多し、普寂禪師、其の名最も知らる。門流、六祖の末と頗る、其の禪風を同じくせず。これ牛頭別岐を出してより、更に著しく一時二大派對立の觀

を呈せし由來とす。惠安國師は、神秀と共に北方の英なれども、古來北宗禪は獨り神秀を祖とす。しかも惠安も亦一朝の崇敬最も深く、嵩山の少林に隱れ、高宗屢召せども應ぜず、武后の世、徵されて輦下に至り、武后師禮を以て之を俟つ。後再び嵩嶽に還り、景龍三年、年一百二十八にして寂す、世に老安國師と稱す。嗣法のものまた多し。智旡禪師は、其の傳、全く明ならざれども、後の學者、神秀と相對し、南旡北秀と稱したるを以て見るに、また南方に一門風をなし居たりしことを想像するに足るべし。

或は云く、五祖の衣法を六祖に授與するや、神秀の徒、深く之を怨み、秀禪師を以て六祖となし、付法の實を滅せんと欲し、行昌なるものをして、刃を懷いて六祖を害せしめんとし、行昌却りて、六祖の教誘を受け、後出家して祖の會下に隨ふ、これ江西の志徹禪師なりと。或



は云く、六祖の遁れて南に赴くや、道明なるもの、其の同志數十人と追うて大庾嶺に至る、時に六祖、信衣を石上に放擲して曰く、此の衣は信を表するのみ、力争するの價值あらんや、君宜しく携へ去るべしと。此に於て道明、眼睛一點、大に省悟する所あり、深く祖徳に服し、廬山に居るもの三歳、更に化を袁州蒙山に布き、其の徒をして、皆六祖を禮せしむと。

### 第六章 六祖下の二大系

『傳燈錄』によりて見るに、六祖の法嗣、總べて四十三人の多きに達すと雖、其の後世に最も大なる影響を與へたるものを南嶽、青原の二大系統とす。假りに之を南嶽、青原の二家と呼ぶ。畢竟南禪の主幹となり、五家の末流を出せるもの、實に此の二家に外ならず。

南嶽とは、懷讓禪師を指す、俗姓は杜氏、金州の人なり。年十五にして、荊州玉泉寺に於て、弘景律師に隨ひて出家し、専ら律を學びしも、同學坦然の勧めにより、北行、嵩山の惠安禪師に見ゆ。しかも機縁合せざるものあり、坦然獨り安の下に止まり、讓は轉じて六祖に謁し、契悟する所あり、左右に侍するもの十五年、六祖滅後、衡嶽に入りて般若寺に居る。天寶三年八月十一日、衡嶽に寂す、年六十八、謚して大惠禪師といふ。南嶽嘗て入室弟子六人に告げて曰く、汝等六人、同じく吾身を證して各一路に契ふ、一人は吾眉を得たり、威儀を善くす(常)、一人は吾眼を得たり、顧盼を善くす(智)、一人は吾鼻を得たり、善く氣を知る(神)、一人は吾舌を得たり、善く譚説す(嚴)、而して一人は吾心を得たり、古今を善くす(道)と。故に六人の嗣法、道一最も其の眞髓を得たりと許さる。道

一禪師は、漢州の人、俗姓は馬氏、其の會下英俊甚だ多く、其の禪最も廣く世に布く、故に人呼んで馬祖といひ、また或は單に江西を以て稱す。容貌極めて奇異、牛行虎視、舌を引けば鼻を過ぐ。開元年中、衡嶽の傳法院にありて習禪するに當り、會ま懷讓禪師に面し、心印を受け、建陽、臨川、南康等に居り、終りに鐘陵の開元寺に寂す。時に貞元四年二月四日なり、遺骸を建昌に葬る。憲宗の元和中、謚して、大寂禪師といふ。入室の弟子一百卅九人、就中百丈の懷海禪師、虔州西堂の智藏、池州南泉の普願と相並んで、化門角立をなすと稱せらる。南嶽、江西と共に洪州宗の名、古く世に傳へらる。百丈山は洪州にあり、洪州宗の名、之に起因す。懷海禪師は福州の人なり、馬祖（もそ）に南康に隨ひ、得法の後、洪州、大雄山に居る。山の巖巒峻極なるを以て百丈山の名を得たり。禪師身を律すること頗る嚴、一日作さゞれば一日食はずの

語あり。會下の徒を督するに、叢林儀軌なかるべからざるを思ひ、始めて清規を立す。『百丈清規』は實に禪門清規の根源なり。元和九年正月十三日、壽九十五歳にして寂す。勅謚して大智禪師といふ。西堂の智藏禪師は、虔化の人、百丈と共に同時入室、馬祖の印可を受け、常に百丈と並稱せらる。元和九年八十歳にして寂す。憲宗の時、大宣教禪師の謚號あり、穆宗の世、重ねて大覺禪師と謚せらる。南泉の普願禪師は、鄭州の人、姓は王氏、初め教相毘尼の學を究め、後、大寂の室に入る。貞元十一年、自ら池陽に禪院を構え、山を出でざるもの卅年。大和の初、衆の請ふ所に任せ、南泉に下り、之より學徒常に數百を減ぜずといふ。南泉斬猫の話は、普く人の口にする所なり。大和八年十二月（文宗）世壽八十七にして寂す。其の法嗣に従諡禪師あり、南泉徒中の傑なり。もと曹州の人、南泉の法を嗣いで、遙に北地を化し、趙州の觀

音院(また東院といふ)に住す。早く北方に南頓の玄風を振ふもの、禪師實に其の著しきものとす。時に傳へて「趙州の門風」といひ、聞くもの悚然信伏せざるなしといふ。乾寧四年十一月、壽百二十歳にして寂す、謚して眞際大師といふ。

青原家の系統は吉州青原山靜居寺の行思禪師に出づ。禪師は同州安城の人、俗姓は劉氏なり。幼にして出家し、後曹溪の法席に列し、會下學徒の首たり、六祖心印を密付し、告ぐるに信衣は山門に留めて、後來爭端の源を絶つべきを以てす。爾後青原に退き、法を希遷禪師に授け、開元二十八年十二月十三日寂す。僖宗謚して弘濟禪師といふ。希遷禪師は端州の人、初め六祖に謁し、未だ受具せずして六祖圓寂す、乃ち青原に參ず。玄宗天寶の初め、衡山に入り、南寺に住す。寺の東に石あり、狀、臺の如し、乃ち庵を其の上に結んで居る、故に人呼ん

で石頭和尚といふ。化馬祖と相比し、後に、江西主大寂、湖南主石頭の語あり、青原付法の人、實に石頭を傑出とす。貞元六年十二月二十五日、壽九十一にして寂す。穆宗の長慶中、謚して無際大師といふ。參同契一篇は、今日に至るまで、普く學者の喧傳する所たり。石頭の法嗣多しと雖、最も其の名を知らるゝものを丹霞の天然、藥山の惟儼、二禪師となす。天然禪師は、初め儒を學び、科擧に應ぜんがため、長安に入らんとし、遂に禪客に遇ふ。禪客問うて曰く、仁者何くに往く、答へて曰く、選官のために長安に赴かんとす。禪客曰く、選官何ぞ選佛に如かんや、曰く、選佛、何の處にか索むべき、曰く、江西の馬大師あり、これ選佛の場なり、仁者須らく此處に往くべしと。禪師乃ち志を轉じて江西の下に至る、僧堂を選佛場といふもの、これ其の起原なり。江西見て以て南嶽（南岳）の石頭、これ汝が師たるべしと教ふ。此に於て石頭

により剃度し、天然の名を馬祖に得、後また徑山の國一に參じ、一時盛んに化を洛陽に唱へ、元和十五年鄧洲丹霞山に庵を結びて退く、しかも學者麇集、徒三百に盈ち、終に大院を構ふに至る。所謂丹霞木佛の談は、其の洛陽惠林寺に於ける事蹟として、久しく人口に傳へらる。北方に南禪の盛なる、殆んど之を初めとすといふも不可なることなし。長慶四年六月一日、門人に告げて曰く、湯沐を備へよ、我行かん、と欲すと。笠を戴き、杖を策し、履を穿ち、一步の足垂れて未だ地に及ばずして化す。壽八十六、勅謚智通禪師といふ。惟儼禪師は絳州の人、石頭に謁して玄旨を領し、澧洲藥山に居る。太和八年二月、壽八十四にして寂す、勅謚して弘道大師といふ。藥山の法を承受するものに潭州雲巖山の曇晟禪師あり、鐘陵建昌の人、初め百丈に參じ、左右に侍すること二十年、未だ省なし、百丈歸寂の後、藥山に謁して言

下に契會す。會昌元年十月(武宗)六十歳にして寂す。勅謚號無住大師なり。

### 第七章 南頓北進と教禪一致

六祖以後、其の禪風、主として専ら南方に行はれ、殊に廣州江西を中心とし、其の間に流布せられたることは、上述せる所によりて、畧ぼ概見するに足るべし。然れども、其の禪の多少北方に入りしは、既に六祖滅後幾もなき頃にして、六祖下の本淨、神會、惠忠等の諸禪師は、皆な長安に其の化を揚げたる人なり。本淨禪師は、司空山無相寺に居り、天寶三年、玄宗の請によりて、京に出て、白蓮寺に住し、内道場に於て、盛んに諸宗の學者と法議を論ず。勅謚大曉禪師といふ。惠忠國師は、初め南陽の白崖山、黨子谷に居り、四十餘年山門を下らず。其

の名、上聞に達し、肅宗の世、召されて京師に至り、千福寺の西禪院に居る。代宗即位の後、更に光宅寺に迎へ、十有六年間、對機法を説き、肅宗、代宗二帝の師事を受く、勅諡號大證禪師なり。以上の二人は、共に六祖の嗣法として、一時名を帝都に振ふと雖、其の後繼全く人なし。獨り、神會大師の系統は、南頓北進の端を開きたるものといふべく、其の法を承くるものに、五台山の無名禪師、磁州の法如禪師等あり。神會大師は、襄陽の人、姓は高氏、六祖の密意を受けて後、荷澤に居りしもの、如く、荷澤の神會を以て呼ぶは之に基くものなるべし。荷澤は山東の曹州にありといふ。當時長安の地、頓禪全く廢れて行はれず、嵩岳の漸門獨り勢を得。此に於て六祖滅後二十年にして、荷澤始めて長安に入り、『顯宗記』を著はし、南能頓宗、北秀漸宗の別あることを明す、南頓北漸の語、蓋しこゝに起るか。上元元年五月十三日、壽

七十三にして寂す。遺骸は洛陽の龍門に塔し、勅してこゝに寶應寺を建てしめ、大曆年間(代宗)諡して般若大師の號を賜ふ。後の學者、此の系統を呼んで荷澤宗となす。思ふに其の末流、次第に涸れ、法系後に存せずと雖、また六祖下に於て、南方衡嶽の禪と相競ふものといふべし。

荷澤の嗣法、無名、法如等の人々は、其の傳詳ならずといへども、華嚴宗の中興として、學徳一世を風靡せる、清涼澄觀大師は、禪に無名に參じたるものと傳へらる。五台山は、古くより文殊應跡の聖地と信ぜられ、『華嚴經』の研究は、最も早く五台山に興りたる事實によりて考ふるに、無名禪師も、或は華嚴宗と何等かの關係ありし人なりしやも知るべからず。清涼大師が五台に於て、無名に參じたるは由來あることを知るべし。これ實に唐の中葉に出でし、教禪一致の説の

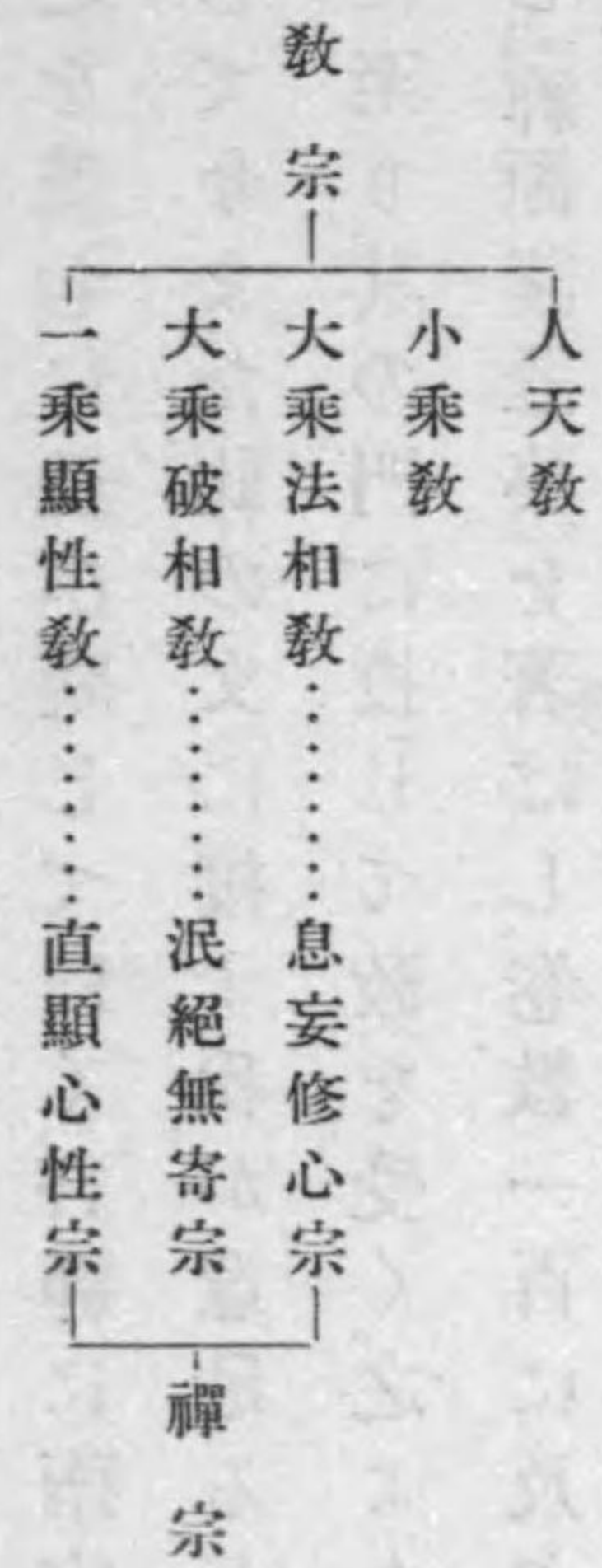
端を開けるものなり。

華嚴宗にては、其の祖、賢首大師、小始終頓圓の五教を以て、佛一代の教を判ず、而して其の中に於て所謂頓教なるものに就きては、單に理の極致、一切の差別を空じて、一心朗々の體を説く『維摩經』等の如きは是なりとなし、未だ禪宗を以て之に配したるにあらず。然るに清涼に至りて、賢首の五教を取り來りて之に諸宗を配し、頓教は即ち禪宗是なりと明言し、以て之を圓教華嚴に次ぐものと見做せり。禪宗隆盛の世となりて、教宗が次第に其の影響を受くるに至りし跡之を以て察すべし。

當時長安終南山の圭峯草堂寺に宗密禪師あり、荷澤の末流を汲む。蓋し荷澤は之を法如に傳へ、法如は之を荆南の惟忠に傳へ、惟忠は之を遂州の道圓に傳へ、宗密は則ち之を道圓に受くといふ。其の荷

澤の宗の名を立て、其の禪風を舉揚すること、禪師其の最たり。宗密禪師は、果州の人、俗姓は何氏。初め儒を學び、元和二年、貢舉に赴かんとし、遂に道圓禪師に遭ひ、其の弟子となる。後、『圓覺經』を得て、感悟流涕禁ずる能はず、また更に清涼大師著すところの『華嚴疏』を得て之を讀むに及び、嘆じて曰く、吾禪に南宗に遇ひ、教に圓覺に逢ふ、而して今また此の文に接す、我が意足ると。終に清涼の學を慕ひ、長安に至り、其の門に投じて教を受く。之より盛んに教禪一致の旨を論じ、『禪源諸詮集』を著はし、卷數一百に及ぶといふも、惜い哉、今に傳はらず、僅に『都序』四卷を存す。其の他禪師の著書、甚だ多く、『圓覺經』には『大疏』十二卷、『大疏鈔』二十六卷あり、『新華嚴合經論』四十卷を始めとし、なほ一々擧ぐべからず。然れども、學者初入の門として、最も廣く知らるゝものは、『原人論』なるべし。『原人論』には、佛教を概括して、人天教、

小乗教、大乘法相教、大乘破相教、及び一乘顯性教の五種となし、が、禪師はまた之を禪の方面より考へて、禪に息妄修心宗、泯絕無寄宗、直顯心性宗の三種ありとなし、以て大乘三種の教宗に配すべきものとなせり、即ち左の如し。



古來禪教一致を唱へしもの、禪師の如く組織整然たるもの、殆んど之を見ず。會昌元年正月六日、興福塔院に寂す、壽六十二。宣宗謚して定惠禪師といふ。禪師滅後、荷澤の宗、甚だ振はず、別に丹霞、趙州の、南禪を以て化を北地に布きしことは、前に述べしを以て今再び説か

ず。

華嚴の清涼大師と同時に、天台宗のために光燄を擧げたるものを、荆溪大師(湛然)となす。しかも荆溪は、寧ろ禪宗を排し、惠を顧みざる閻禪なりといひ、頗る清涼と其の傾きを異にせり。然れども天台の學者にして禪に歸し、所謂教禪一致の趣きあるものなきにあらず。彼の永嘉の玄覺禪師の如きは其の一人なるべし。禪師は荆溪の師左溪の玄朗の激勵により、六祖に謁したるものなりといふ。若し然らば左溪大師も多少禪の影響を受けたることを想ふべし。六祖一面直ちに之に印し、大衆愕然たらざるはなし、僅に一夜留宿せしのみなるを以て、時に一宿覺と呼べりといふ。『永嘉集』及び『證道歌』の作あり、『證道歌』最も廣く傳誦せらる。先天二年十月滅を示す。無相大師と謚す。

菩提達磨—大祖惠可—鑒智僧璨—大醫道信—

大滿弘忍—

南嶽懷讓—馬祖道一—百丈懷海

西堂智藏

南泉普願—趙州從諗

青原行思—石頭希遷—藥山惟儼—雲巖曇晟

丹霞天然

大鑒惠能—

荷澤神會—磁州法如—荆南惟忠—遂州道圓—圭峯宗密

五台無名—清涼澄觀

司空本淨

南陽惠忠

永嘉玄覺

北宗神秀—嵩山普寂

嵩山惠安

資州智儔

牛頭—世法融—同二世智巖—同三世惠方—同四世法持—同五世智威—同六世惠忠—天台惟則

鶴林玄素—欽山道欽

28.7.27

第七章 五家の分出(上)

唐の中葉以後禪宗の勢力は殆んど他宗を壓倒し、巨匠四方に輩出して各一家の門風を振ふ、こゝに於てか五家の名稱あり。今五家の由來を説かんとするに先ち、首に天皇道悟禪師に就いて一言せざるべからず。

道悟禪師の法系に就いては古來頗る異説あり、一説によれば禪師は石頭の付法なりと。また他の一説に隨へば、馬祖の心印を受くと。或は當時二人の道悟あり、名同じくして人は則ち別なりと。是非紛々として容易に決し難きものあり。古來久しく傳ふらく。唐の協律郎符載といへる人、道悟禪師の碑を撰す、其の文によれば、禪師は婺州東陽の人、俗姓は張氏、初め徑山の國一に參じ、中頃江西の馬祖に謁し、終りに石頭によりて領悟する所あり、荆州當陽の柴紫山に隱

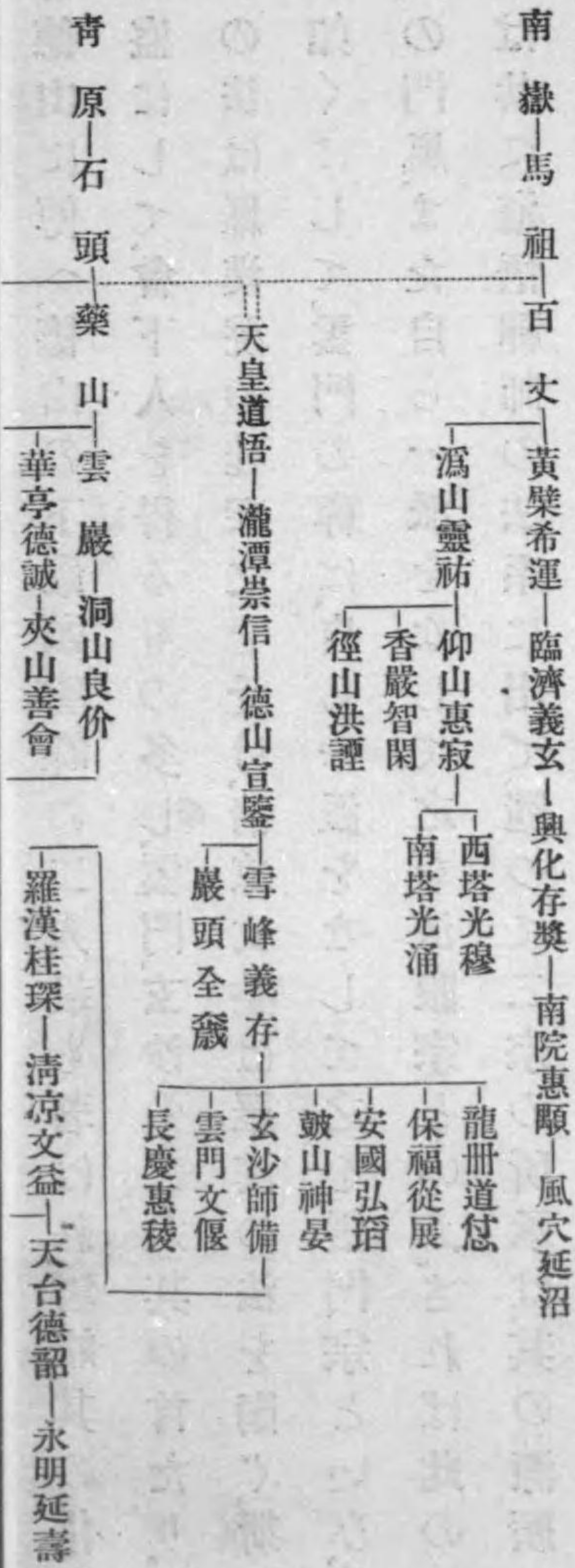


れ、晩に荆南城東の天皇寺に居る、元和二年四月、壽六十にして入寂すと。又唐の正議大夫戸部侍郎平章事にして、荆南の節度使たりし丘玄素の撰にかゝる道悟禪師の碑あり、此の文によれば禪師は渚宮(荆門)の入にして、姓は崔氏、一たび石頭に參じて所省なし、更に南陽の忠國師に參じ、終に國師の徒應眞と共に馬祖の會下に屬し、其の密付を受け、馬祖の舊處を離るゝ勿れとの言により、荆門に返り、後荆南城西に天王寺を造りて住す、元和五年壽八十二にして寂すと。此の碑を見るに、其の人全く異なるものゝ如く、しかも同時に荆州に二人の道悟あり、一は天皇にあり、一は天王にありといふ、事甚だ疑ふべし、其の眞偽は今容易に決すべからず。

道悟二人の説によれば、天皇は法嗣惠眞あり、之より二世にして其の統終に絶ゆ、天王の法嗣は、瀧潭の崇信禪師一人のみと。瀧潭は之を徳山に傳へ、徳山の下、巖頭、雪峰の二人最も著はれ、雪峰其の化甚だ盛にして、會下人を得るもの多し、雲門、玄沙の二人其の首たり。玄沙の法は羅漢院の桂琛之を受け、清凉文益は羅漢の法を嗣ぐ。斯くの如くにして、雲門の禪は、自ら一派をなして之を雲門宗といひ、清凉の門風、また自ら一派をなして之を法眼宗といふ。されば此の二宗は共に道悟禪師の法系に出で、随つて二宗の所承は、其の源頭を南嶽、青原の二家、何れに發せりとなすべきか、これ古來の論争ある所以なり。

南嶽の後にありては、百丈の下に、黃檗希運、瀧山靈祐二禪師あり。黃檗の法嗣を臨濟義玄禪師とし、これ臨濟宗の祖なり。瀧山の後繼を仰山惠寂禪師となし、此の瀧山、仰山の後を稱して瀧仰宗といふ。青原家にありては、丹霞の後に翠微無學を経て、投子大同禪師あり、一

時の英俊にして會下頗る盛なりしも、甚しく後に榮えず。藥山の後には雲巖を経て洞山良价禪師あり、洞山の法嗣に曹山本寂、雲居道膺等の俊傑を出す。洞山は即ち曹洞宗の祖なり。以上臨濟、瀉仰、曹洞の三宗に加ふるに、雲門、法眼の二宗を以てして、稱して之を五家といひ、唐末五代の間にありて、南北の地、法鼓頻りに響けり。今試みに五家の主要なる畧系を掲ぐべし。



「道吾圓智—石霜慶諸—丹霞—翠微無學—投子大同」



永明道潛—靈隱清聳—報慈文遂—高麗惠炬—清涼泰欽—雲居道齊

臨濟家の系統は、黃檗の希運禪師に起り、法嗣義玄禪師、鎮州臨濟院に居り、其の禪風を、北方に振興せしにより、臨濟宗の稱呼を得たり。希運禪師は、閩の人なり、洪州黃檗山大安寺に出家し、後、百丈に參じ、得法、黃檗に還り、參徒常に千餘人、居ること十年、州の刺史斐休、固より深く禪に歸す。一たび黃檗に詣し、終に延いて州の龍興寺に居らしめ、之に師事し、尋いて宛陵(宣州)の守となるに及び、また伴ひて州の

開元寺に寓せしめ、其の教を受くといふ。或は云く、禪師百丈下を去り、黃檗に還り、衆僧に混じ、迹を晦まして殿堂を灑掃す。斐休、一日黃檗に至り、始めて師を知りて之を州の龍興寺に請すと。大中年間(宣宗)本山に終ふ。勅諡號は斷際禪師なり。臨濟の義玄禪師は、曹州の人なり、俗姓は邢氏、心要を受けて故郷に還り、更に人の請によりて、鎮州の臨濟禪苑に住す。械鋒峻烈、一代を風靡す。『臨濟錄』は、今なほ人の最も能く知る所なり。咸通七年四月十日を以て寂す、勅諡して惠照大師といふ。臨濟の法を繼承するもの多しと雖、魏府興化(大)の存獎(勅諡)、汝州寶應院、即ち南院の惠顛禪師を経て、風穴の延沼、首山の省念(大)に傳ふるもの、これ法孫の最も盛なるを致せしものなり。風穴、首山共に汝州にあり、延沼禪師、後、南院の二世となり、宋の開寶六年(太祖)に壽八十七にして寂し、省念禪師、後を繼いで、南院の三世となる。初め

首山を開いて其の一世となり、中頃寶安山廣教院に住し、また第一世たり。淳化三年(太宗)六十八歳にして入寂す。瀉仰宗の祖、瀉山の靈祐禪師は、福州の人、俗姓は趙氏、年二十三にして百丈に謁し、一見、室に入り、參學の首に居る。百丈嘗て潭州瀉山に住せんと欲し、人をして之を相せしむ。相者曰く、和尚は是れ骨人、彼の地は是れ肉山、居るに可ならずと。百丈乃ち其の參徒の中に就いて、住するに適せるものを見せしむ。相者則ち靈祐禪師を推す。禪師、師命により、始めて此の山に入り、猿猴と伍をなし、橡栗、食に充て、遂に山下居民の知るところとなり、寺宇漸く成る。同慶寺是なり。四十餘年間、宗旨を敷揚し、入室の弟子四十一人。大中七年正月九日、八十三にして逝く。勅して大圓禪師と諡す。會下袁州仰山の惠寂、鄧州香巖の智閑及び徑山の洪誣等最も知らる。惠寂禪師は韶州の人、姓は

葉氏、瀉山に居るもの前後十五年、後仰山に止まり、衆を接し、晩に韶州東平山に遷り、年七十七にして終ふ。勅諡して智通大師といふ。後に遷して仰山に塔す。仰山嘗て智閑を評し、汝只如來禪を得たり、未だ祖師禪を得ずといへるは、如來禪、祖師禪の語の由來する所なりといふ。洪諲禪師は、もと徑山鑒宗禪師(鹽官齊安の嗣にして、鹽官は馬祖に嗣ぐ鑒宗勅諡して無上大師といふ)により落髮し、瀉山に嗣ぎ、鑒宗示寂の後、徑山の第三世を承く。徑山は大覺道欽禪師を第一世とすること、前に述べたるところの如し。

### 第八章 五家の分出(下)

青原家、石頭下に於て、藥山、丹霞二俊を出したることは既に言へり。丹霞、洛陽、長安に其の禪を唱へ、法嗣翠微山の無學禪師は、長安終南山の翠微に居り、投子の大同禪師、其の法を受く。投子山は舒州にあ

り、禪師、翠微の心印を得、生地舒州に還り、投子山に茆を結んで隱居す、接化三十餘歳、壽九十六にして坐亡す。勅諡して廣濟大師といふ。之を投子山の第一世とす。

雲巖禪師と共に、藥山の輔轡に出づるものに、華亭德誠、潭州道吾山の圓智禪師(勅諡修一大師)あり、道吾の法を嗣ぐものに、石霜(崇勝寺)の慶諸禪師あり、華亭の法を嗣ぐものに、夾山の善會禪師あり。潭州の石霜山、一澧州の夾山は、後共に禪の大刹となれるものなり。石霜、始め道吾の下を去り、一時長沙瀏陽の陶家坊に隱れ、俗に混じて韜晦せしが、洞山禪師、僧を遣して之を尋訪するや、其の名大に著はれ、石霜に入りて後、道吾自ら石霜に至り、嫡嗣となし、遂に石霜山に歸寂せり。石霜化門を開く二十年、嗣法のもの四十一人、參徒徃々長座不臥、世に之を枯木衆と呼べりといふ。光啓四年(僖宗)世壽八十二にして寂す。勅諡

號を普會大師といふ。夾山は、廣州の人なり。始め華亭、常に吳江に小舟を浮べて居る、人呼んで船子和尚といふ。夾山之と船中に謁し、師資道契ひ、密に心印を付し終る。之より學者雲集、終に地を夾山に卜し、寺を建て、請ず、これ咸通十一年のことなり。禪師、中和元年、壽七十七にして寂せり。勅謚號を傳明大師といふ。

曹洞宗の祖、筠州洞山の良价禪師は會稽の人なり。俗姓は俞氏、初め五洩山の靈默禪師(馬祖の法嗣、五洩山は婺州にあり)によりて剃髮し、南泉、潯山等の諸師に參ず。潯山禪師に告げて曰く、此の山に接して、雲巖道人の住所あり、以て道を問ふべしと。之に由て始めて雲巖に謁して面授を稟く。大中の末、新豊山に居りて學徒を誘接せしが、後、洞山普利院に轉じて、盛んに參玄の徒を導く。咸通十三年三月、剃髮被衣、鐘を撃たしめ、儼然として坐化す。衆大に悲慟して夜を徹す。禪師忽然眼を開い

て起ちて其の徒らに哀戀するを誡め、壽を延ぶること八日、浴訖りて端坐して長逝す。世壽六十三。勅して悟本大師と謚す。初め泐潭山にあり、藏經を閲して、『大乘經要』一卷を纂出し、また其の『五位頌』は洵に本宗至要の法門を示すものとす。其の他、『寶鏡三昧』も、或は洞山の作と稱するものあり、但し或は藥山の作といひ、或は雲巖の作といひ、異説なきにあらず。洞山入室の人、總べて二十六人。中に於て、特に主要なる人を、雲居山の道膺、曹山の本寂二禪師とす。其の他、道全禪師は洞山の二世となり、世に中洞山といひ、師虔禪師は、また洞山の第三世に住し、皆親しく洞山大師に嗣ぐところなり。本寂禪師は、泉州の人、既に密印を受けて、洞山を辭し、請によりて撫州の曹山崇壽院に住し、後、同州荷玉山に居り、二處の法席、學徒雲集す。天復元年六月十五日、世壽六十二にして寂す。勅して元證大師と謚す。或は曰く、

曹洞の宗名は、洞山曹山二師に起原すと、或は曰く曹溪と洞山二名に取ると、蓋し後説を正しとなす。而して此の宗の法系後に存するものは、寧ろ曹山にあらずして雲居にあり。洪州雲居山の道膺禪師は幽州の人、姓は王氏、初め翠微に參じ、後、洞山の會下に歸す。嗣法の後、雲居山を開き、四衆臻萃、化を施すこと三十年、法衆常に千五百に及ぶ。天復二年正月六日示寂す。勅諡號弘覺大師といふ。法を受くるもの二十八人、洪州棲鳳山道安の丕禪師、廬山歸宗寺の澹權、同歸宗寺の壞暉等あり。昭化禪師(道簡)は雲居の第二世たり、昌禪師、懷岳禪師また同じく道膺の法を嗣ぎ、雲居の第三世、第四世に居す。廬山の歸宗寺は、馬祖下の智常禪師に始まり、澹權、懷暉の二禪師、其の二世、三世を續ぐといふ。

雲門、法眼二宗の系統は、天皇道悟に出づ。道悟の下、澧州瀧潭の崇信

禪師あり、瀧潭の下に、朗州德山の宣鑿禪師あり、劍南の人、俗姓は周氏、初め常に『金剛般若』を講ずるを以て、人呼んで周金剛といふ。後、禪に歸し、瀧潭に嗣ぎ、澧陽にあるもの三十年、會ま唐武の破佛により、一時獨浮山の石室に避けしが、大中興教の時に當り、武陵の太守薛廷望、德山の精舎を再建し、古德禪院と號し、強えて禪師を請うて第二世となす。蓋しもと馬祖の嗣、總印禪師の開く所といふ。咸通六年八十六歳にして寂す。勅諡號を見性大師とす。德山の下に於て、雪峰の義存、巖頭の全歳、二人最も顯はる。共に泉州の人、既に法を得て、二人等しく德山を辭し、義存は、故郷閩川に遷り、象骨山雪峰に居り、化道甚だ盛んに、會下の俊英鬱然林の如し。全歳は、洞庭の臥龍山に庵し、參徒また蝟集す。常に衆に言つて曰く、老僧去る時、大吼一聲して去らんと。光啓の末、盜賊蜂起し、一日、巖頭の居に至り、刃を加へて

之を殺す。師神色自若、大叫一聲して終ふ、實に光啓三年なり、壽六十、勅諡して清嚴大師といふ。雪峰は之れより後るゝこと二十一年にして、後梁の開平二年五月、八十七歳にして寂せり。師閩川に居る四十餘年、學者常に千五百を下らず、懿宗皇帝、特に眞覺大師の號と紫袈裟とを賜ふ。巖頭の法を嗣ぐものに、台州瑞巖の師彦禪師あり、師彦の法を承くるものを鄂洲黃龍山の晦機禪師とす、之を黃龍の起原とす。雪峰の法嗣は總べて五十六人、其の禪風廣く閩越の地に盛なり。當時泉州の刺史王延彬、最も深く禪に歸し、雪峰下の福州玄沙山の師備禪師(宗一)の如き、常に其の教を受け、師禮を以て之に仕ふ。其他神晏禪師(興聖)のために鼓山を開いて寺を創し、惠稜禪師(超)のために、招慶寺を建て、次いでまた長慶寺を建て、弘瑫禪師(明眞)も、亦其の請により、安國院に住し、盛んに法化を揚ぐ。道怱禪師(順德)

も、同じく雪峰の嗣にして、初め越州鏡清寺に居りしが、此の頃、吳越の忠懿王(錢)また深く佛法を信じ、頗る玄學を起す、乃ち禪師を招請して大龍寺に居らしめ、後殊に龍冊寺を創立す。從展禪師は、また璋州刺史の請により、其の建つる所の保福禪院に住し、衆を接す。以上の外、雪峰下の法化の盛なる、今一々擧ぐべからず。

雲門宗の祖、文偃禪師は、姑蘇嘉興の人にして、俗姓は張氏なり。韶州雲門山光奉院に居る。時に廣主劉王(南漢王)頗る禪師に歸依し、屢請りて内に入らしめ、師禮を以て俟ち、號を匡眞禪師と賜ふ。宋の太祖の乾德四年(廣主の天)示寂す。廣主、靈軀を内庭に請じて供養し、寺額を改めて大覺といひ、諡號を加へて、大慈雲匡眞弘明禪師といふ。嗣法のもの二十五人あり。

玄沙の會下に、羅漢桂琛禪師あり。漳州の刺史王公、閩城の西に、地藏

院を建て、之を請じ、幾もなくして、漳州羅漢院に移り住す。後唐の天成三年(明宗)六十二歳にして寂す。謚して眞應禪師といふ。法眼の開祖、清涼文益禪師は、其の法を嗣げるものなり。禪師は餘杭の人、俗姓は魯氏なり。初め長慶の惠稜禪師に參じ、後轉じて羅漢に嗣ぐ。臨川州牧(撫州)の請により、一たび州の崇壽院(曹山)に住し、四方の學者、翕然として至る。時に南唐主徐璟、禪師の徳を重んじ、迎へて金陵の報恩禪院に住せしめ、署して淨惠禪師といひ、後遷して清涼寺に居らしむ。後周の顯徳五年閏七月五日、剃髮沐身、衆に告げ訖りて結跏して逝く。世壽七十四。謚して大法眼禪師といひ、後重ねて大智藏大導師の謚號あり、嗣子六十三人といふ。

### 第九章 宋以後の五家(上)

宋以後、其の法系の最も榮えたるものは雲門、臨濟の二宗にして、特に雲門宗の、仁宗より哲宗に至る時代の隆盛は、臨濟も遙に其の後にあるの觀ありしが、北宗末の頃に至りて、宗勢殆んど一時に衰へたるに似たり。法眼宗は、宋初既に其の後を絶ち、馮仰宗は、之に先ちて、其の宗統の早く斷絶せしを見る。曹洞宗は、宋代に入りては、雲門、臨濟の如く盛んならず、一時は、契嵩をして、繇々として、猶ほ大早の孤泉を引くが如し、然も其の盛衰は、豈法に強弱ありてならんや、蓋し後世相承に人を得ると得ざるとのみと嘆せしむるに及びしも、なほ法脈、永へに傳はり、次第に隆昌を致し、臨濟と相並びて、以て後代に至れり。

馮仰にありては、仰山以後、西塔の光穆、南塔の光涌、其の會下に傑出せしも、之より兩三傳にして、其の後を存せず。法眼は、清涼の下に天



台の徳韶國師あり、吳越王錢鏐の師なり。永明の道潛もまた吳越王の歸依により、惠日永明寺を建立し、靈隱の清聳は、同じく吳越王の命により、臨安に入り、後杭州靈隱の上寺に居る。報慈の文遂は、南唐王の國師となり、高麗の惠炬は、大に宗旨を東方に傳ふ、特に天台は衆中の首たり。師はもと泉州の人、俗姓は陳氏、密印を受けて後、天台山に登り、智者大師の遺跡を訪ひ、殆んど舊居の感あり、俗姓また大師に同じ、故に世之を智者の再誕となす。初め白沙寺に留まり、後般若寺に入る。忠懿王の命を受け、書を高麗に遣はし、天台の教藉を求めしは、人の能く知る所なり、唐末散佚の書、之によりて、再び支那に來れり。宋の太祖、開寶四年六月、壽六十五にして寂す。法子四十九人、永明の延壽、其名最も高し。禪師は餘杭の人、衣鉢を天台に傳へて、明州雪竇山(資聖寺)に住し、更に忠懿王の招請により、靈隱の新寺に遷

り、第一世となり、轉じて永明寺に入り、其の第二世となる。雪竇は南泉の二世下、長沙景岑の嗣法常通禪師、始めてこゝに禪苑を開きたるところにして、永明寺は、錢王が新に建立し、道潛禪師を迎へたる所、即ち後の淨慈なり。雪竇、靈隱、淨慈等の、屈指の大道場たることは、人の普く熟知する所なり。禪師、開寶九年一月、壽七十二して寂す。智覺禪師是なり。其の著として最も有名なるものは、『宗鏡錄』一百卷にして、禪師はまた念佛と禪とを雙修し、忠懿王は、爲めに念佛の道場として、永明に西方香嚴殿を建てたりといふ。延壽の後は一傳して法統存せず、雲居の道齊より、法眼の血脉、相承くるもの僅に四世にして、僧傳に其の後を載せず。道齊は清涼下、泰欽禪師の法嗣なり。或は云く、清涼の法、斯くの如くにして、早く本國に絶え、却りて多く高麗に傳はり、長く東國に存すと、蓋し法眼の下に高麗の惠炬あり、此

の宗東流の端を開き、永明の門、また高麗王派遣の僧卅六人の、來りて法を稟受するあり、これ此の説の由來する所とす。

雲門禪師の下、人を得ること極めて多し。就中、韶州白雲の子祥(實性、大師)、朗州德山(第九世)の緣密(圓明、大師)、隨州雙泉山の師寬(明教、大師)、同雙泉の仁郁、襄州洞山の守初(崇惠、大師)、并びに益州青城香林院の澄遠等あり、而して其の法脉の最も後に存するものを香林とす。

緣密禪師の下に文殊應眞あり、應眞の下に洞山曉聰あり、曉聰の下に雲居曉舜、佛日契嵩等あり。杭州靈隱佛日の契嵩禪師は藤州潭津の人にして、俗姓は李氏。常に儒釋一貫の説を唱へ、『原教論』を造り、『孝論』、『輔教編』等の著あり。殊に禪の法脈に關し、古來諸説の紛紜、他宗の學者多く禪の正脈を難ずるを見、禪門定祖圖『傳法正宗記』等を作りて二十八祖の心印密付の説を明にし、後の禪史を言ふもの、多く之

に據る。『潭津文集』二十卷は、禪師の文を集めたるものなり。仁宗皇帝特に勅して『定祖圖』、『正宗記』、『輔教編』等を藏中に加へしめ、號を賜ひて明教大師といふ。蓋し禪宗僧傳の最も完備せるもの、吳の僧道原編するところの『景德傳燈錄』三十卷を以て初めとなす。これ道原が宋の眞宗の景德年間に上るところにして、翰林學士楊億等に勅し、刊正して大藏に加へしむ。然るに此の書もと湖州鐵觀音院の僧拱辰の撰する所、而も道原詐りて朝に進め、賞を受けたりと傳ふ。『定祖圖』、『正宗記』の奉進は仁宗の嘉祐三年にして、『景德錄』出で、後、畧ほ五十餘年、能く前者の誤を正し、禪史の缺を補へり。建康蔣山の法泉禪師は、雲居曉舜の法嗣なり。嘗て詔により、汴の大相國智海禪寺に轉ぜしむ。未だ蔣山を出でずして逝く、勅して佛惠禪師と謚す。雙泉仁郁の法を嗣ぐものに、開先善暹あり、佛印了元其の下に出づ。

佛印禪師、嗣法の後、諸寺に轉住して法化を布き、殊に南康の雲居に居るもの四十餘年、德繼素に洽ねし。嘗て廬山の開先、歸宗に住す。當時蘇軾(東坡)滴せられて黃州にあり、黃州、廬山と江を隔て、相對す。禪師、軾と應酬交情最も深かりしといふ。高麗の僧統義天は、法を禪師に承けたり。哲宗皇帝の元符元年、世壽六十七にして寂す。法を嗣ぐもの總べて二十人。雙泉師寬の後には、五祖山の師戒あり、泐潭惠澄、其の法を嗣ぎ、會下、印記を受くるもの卅餘人、明州育王山の懷璉、禪師最も著はる。禪師、泐潭の法席に侍するもの十餘年、皇祐年間、仁宗皇帝の命により、淨因禪院に住し、召されて宮中に入り、帝の爲めに法を説き、大覺禪師の號を賜ふ。帝嘗て使を遣はし、龍腦の鉢を賜ふや、禪師、乃ち恩を謝して曰く、吾法、壞色を以て衣とし、瓦鐵を以て食す。此の鉢、非法なりと、遂に之を焚く。使者回り奏す、帝聞いて大に嘆

美す。晩に迎へられて育王に住し、嗣法のもの二十餘人あり。香林の下に智門光祚を出す。智門會下、法を繼ぐもの三十人、雪竇重顯、禪師法化最も盛なり。重顯字を隱之といひ、遂寧府の人、俗姓は李氏なり。仁宗の皇祐四年、壽七十三にして寂す。勅して明覺大師の號を賜ふ。禪師嘗て古則一百を集め、付するに頌を以てし、門徒に示す。所謂雪竇頌古これなり。延慶子榮は禪師と同參なり、圓通居訥、禪師は延慶の下に出づ。初め廬山の歸宗寺に居り、後、圓通寺に遷る。時に内侍李允寧なるもの、其の汴京の宅を施し、始めて禪寺を汴に興す。仁宗、額を賜うて十方淨因禪院といひ、天下有道のものをしてこゝに住せしむ。歐陽修等奏して、禪師を廬山に請ず、疾と稱して起たず。命により、懷璉を擧げて自ら代らしむ。老後寶積巖に退き、神宗の熙寧四年を以て世壽六十二にして寂す。

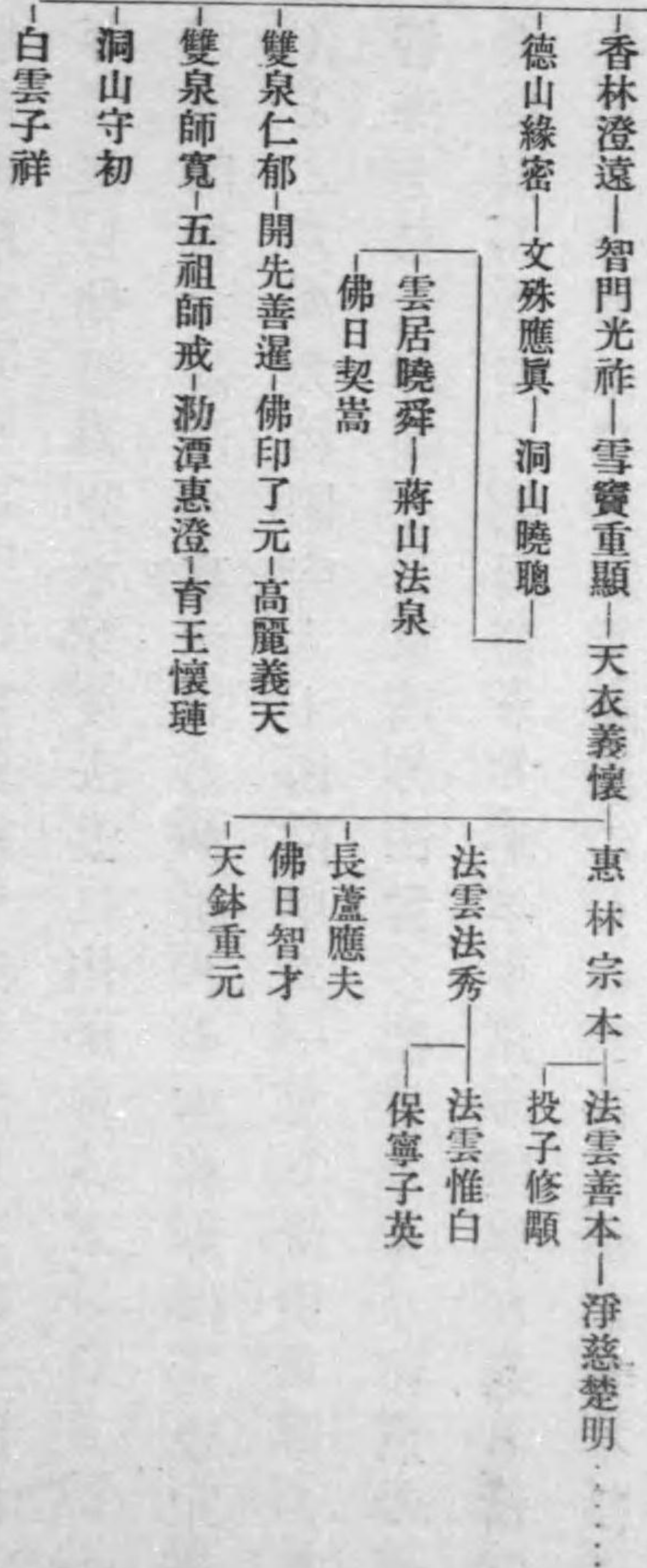
雪竇禪師、法嗣八十餘、天衣義懷を以て上首となす。天衣禪師は永嘉の人、晩に弟子智才、之を臨平の佛日に奉じ、仁宗の嘉祐五年を以て寂す。徽宗皇帝謚して振宗禪師といふ。天衣會下駿足の徒多し、惠林宗本、法雲、法秀を首とし、長蘆應夫、佛日智才、天鉢重元等皆屈指の英俊なり。法秀禪師は汴京法雲寺の第一祖なり、初め華嚴を學び、其の天衣懷に謁するや、懷容貌甚だ揚らず、涕垂れて常に衣を沾す、秀頗る之を輕易す。一たび其の推問に會ふや、秀語窮して答ふる所を知らず、之より懷の左右に侍し、其の諸寺に歷住する、秀常に之に隨ふ。法雲寺は越國大長公主と附馬都尉張敦禮の朝に請うて建つる所にして、特に詔を以て、秀を召して其の開山たらしむる所なり。時に神宗の元豐七年にして、勅して圓通禪師の號を賜ふ。哲宗の元祐五年、年六十四にして寂す。法嗣佛國惟白、保寧子英等五十九人あり。佛

國禪師は、即ち續燈錄(三十卷)の著者にして、徽宗皇帝御製の文を賜ひて卷首に序す。其の宮中に召されて法を説くもの三度に及ぶ。佛國禪師は蓋し勅賜の號なり、後法雲に住すといふ。

圓照禪師宗本は、汴の惠林寺の初祖とす。惠林寺は元豐元年神宗の開くところの大相國寺六十四院中の一なり。就中東序の惠林、西廡の智海を二大禪刹とし、京南の法雲と鼎足をなし、汴京の禪風、之より大に振ふ。圓照は勅賜號なり。晚年平江の靈巖に退き、哲宗の元符二年、年八十五にして寂す。嗣法のもの二百人、法雲善本、投子修頤等、其の名を知らる。中にも善本禪師、道風最も高く、世に宗本と相並べて、大本小本といふ。既に圓照の法を嗣ぎ、後圓照の命により、更に圓通に侍し、圓通滅後、勅を受け、淨慈より轉じて法雲に住し、大通禪師の號を賜ふ。徽宗の大觀三年、七十五歳にして寂す。大通の下、淨慈楚

明以下六十九人あり、之より法を繼承するもの二世にして其の傳を失ひ、元代に至るまで、多少其の法脈の存するものなきにあらず。りしが如きも、其の確實の歴史は全く知るべからず。

雲門文偃



第十章 宋以後の五家（中ノ一）

臨濟の禪は、宋初に入りて、首山省念禪師出で、門下一時俊傑を集め、法流之より大に瀾淪す。傳に云ふ、昔時仰山、臨濟に告げて曰く、子の道、他日大に吳越の間に行はれん、但風に遇はゞ、則ち止まらんと。風穴延沼、其の憤に當るを以て、心常に快はず、晩に省念を得て喜悅して曰く、正法眼藏、今汝が躬にあり、死すとも遺恨なしと。傳の眞否は知るべからざるも、唐末五代の世、此の一宗一時寥々の態、想ふべく、首山の臨濟禪のために氣を吐けるもの亦見るべし。汾陽太子院の善昭、及び葉縣歸省、谷隱蘊聰、神鼎洪誣等、皆首山下當時の英なり。谷隱の下には、金山曇穎あり、葉縣の門には、浮山法遠（圓鑿禪師）を出す、法遠嘗て佛祖の奥義を叙べて九帶の作あり、一時學者の傳稱する所たりしといふ。善昭禪師は太原の人、得法の後、名利を避けて、大刹の請を辭するもの八、首山寂後、道俗の勧めにより、始めて太子院に入る、

しかも燕坐一榻、足、閫を越えざるもの三十年、人皆單に汾陽と言ひて名を呼ぶものなし。汾陽の法を嗣ぐもの石霜楚圓(慈明禪師)、琅琊惠覺(廣照禪師)最も著はる。琅琊は、當時雲門派の雪竇重顯禪師と同時に唱道し、二甘露門の名ありしと云ふ。其の化導の盛なりしを想見すべし。石霜は全州の人、俗姓は李氏、年二十二にして出家し、後汾陽に參ず。汾陽一見、嘿して之を器とす、しかも二年未だ入室を許さず、見るところに罵詈し、訓ふる所は皆流俗の鄙事のみ。石霜一夕、之を訴ふること切なり、汾陽熟視し、罵倒して杖を擧げて之を逐ふ、石霜聲を放ちて救を伸べんと欲す、汾陽其の口を掩ふ、此に於て忽然大悟す。爾後諸方に歴游し、道吾、席を虚うするに及んで、迎へられてこゝに住し、後に石霜に遷り、更に南嶽の莊嚴、潭州の興化等に歴住す。仁宗の康定元年、壽五十四にして寂す。行實を興化に銘し、全身を石霜に塔す。

石霜の法を嗣ぐもの五十人、黃龍惠南、楊岐方會二禪師、其の門風獨り後代に宣揚す。故に之を臨濟下の二宗となし、五家に加へて七宗の稱あるに至れり。黃龍の一派は、其の初め、寧ろ楊岐を凌ぐの觀ありしが如きも、北宋の終り、南宋の初期に至りて、漸次其の法系の微なるを見る、盛衰の跡略ぼ雲門宗と相似たり。されば後代臨濟禪の末流は、主として楊岐の源頭に發するものとす。

黃龍惠南禪師は、信州の人、俗姓は章氏なり。石霜の衡嶽の福嚴に來り住するや、會ま福嚴によりて始めて之に謁し、其の心印を承く。初め同安に住し、後黃檗に遷りて、菴を溪上に結んで名けて積翠といふ。黃龍に轉じて後、佛手、驢脚、生緣の三語あり、天下の叢林目して黃龍の三關といふ。神宗の熙寧二年、世を閱みすること六十八にして寂す。徽宗皇帝、謚して普覺禪師といふ。黃龍の下、嗣法のもの六十餘

人ありといへども、黃龍祖心、泐潭克文、東林常總、法化最も盛んに、鑪  
 爐眞材を打出すること多し。晦堂祖心禪師(寶覺禪師)は、惠南禪師に黃檗  
 に隨ひ、惠南寂後、其の跡を繼いで黃龍に入り、寺務を監するもの十  
 三年。性眞率、雜事に關することを喜ばず、辭して諸方に優游し、元符  
 三年、壽七十六歳にして寂す、勅して寶覺禪師と謚す。黃龍山に惠南  
 禪師の塔東に葬る、號して雙塔といふ。當時黃庭堅(山谷)來りて黃龍に  
 あり、晦堂禪師に咨決し、死心新、草堂清と、方外の交をなす。晦堂の法  
 を嗣ぐもの四十七人、死心悟新、靈源惟清、草堂善清の如き、其の名殊  
 に高し。二人共に相次いで黃龍に住し、悟新の下に禾山惠方あり、惟  
 清の下に長靈守卓等あり、我が國の榮西禪師は、惟清、守卓の法系を  
 承け、惟清禪師より、五世の法孫虛菴懷徹敬禪師に印證を得たり。本邦  
 黃龍の宗を傳ふるもの、實に榮西禪師一人なりとす。

泐潭克文禪師は、陝府の鄭氏の子なり。南禪師に黃檗に謁して所契  
 あり、南滅後、洞山に住するもの十有二年、繁劇を厭ひ、事を謝して東  
 游し、金陵に至る。時に丞相王荊公(石安)官を罷めて此の地にあり、相見  
 て大に喜び、奏して其の舊第を施して寺となし、額を賜ひて報寧と  
 いひ、禪師を請じて開山祖とし、勅して眞淨禪師の號を賜ふ。後、一た  
 び、歸宗、泐潭に居りしも、遽に隆興寶峯の雲菴に退き、徽宗の崇寧元  
 年、年七十八を以て寂す。塔を泐潭、洞山の二處に建つ。法嗣三十八人、  
 都率從悅、泐潭文準、清涼德洪、特に其の名を記すべし。都率は、眞淨に  
 洞山に隨ひ、後鹿苑に出世す。時に石霜慈明の法嗣に清素和尚あり、  
 都率之に遇うて、其の提示により、更に大に發明する所あり、終に其  
 の印可を受く。清素告げて曰く、我福薄く、先師記を授けて、人の爲め  
 にするを許さず、眞淨前に子に示すところは、皆是れ正知正見なり。

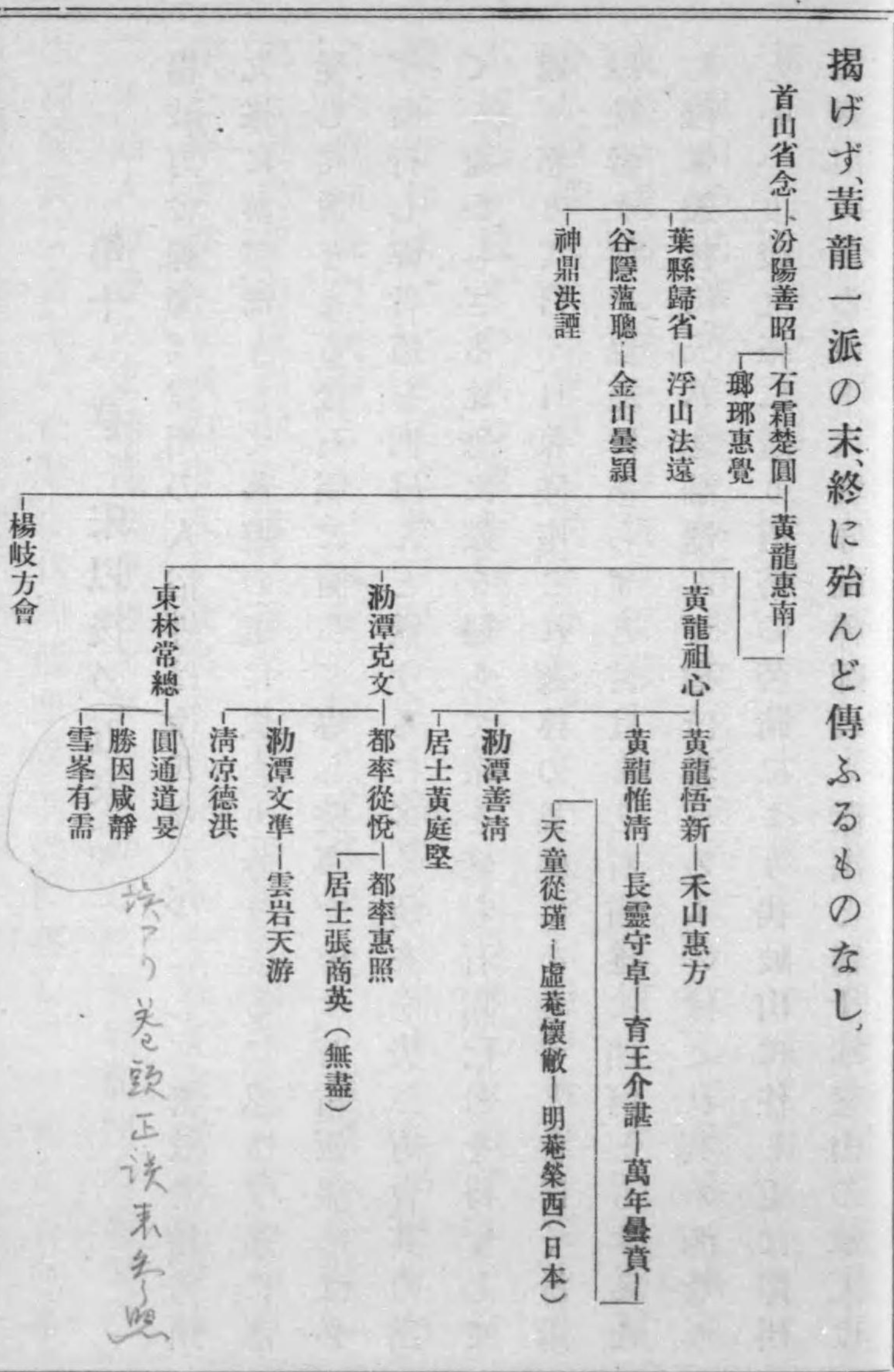
唯子、眞淨を離るゝこと早く、未だ其の妙を盡すに至らず、吾今子の爲めに點破し、受用自在あることを得せしむ、しかも他日必ず吾に嗣ぐこと勿れと。乃ち眞淨に嗣ぎ、隆興府の都率寺に住す。丞相張商英、禪師の提撕を受く、商英は即ち無盡居士なり。初め無佛論を造りて佛を排せんとし、『維摩經』を讀みて感發する所あり、元祐年間、江西に官たり、東林總禪師に謁し、其の印信を受け、都率を見るに、及び、大に契ふ所あり、後、幾もなくして都率寂す、徽宗の宣和三年、商英、奏請して眞寂大師と謚し、使を遣はして、其の塔を祭る。泐潭文準禪師は興元府梁氏の子、眞淨の法を受け、初め雲岩に開法し、後泐潭に移り、自ら湛堂と號す。政和五年、五十五歳にして寂す。石門の南源に塔し、張無盡居士其の碑文を製す。江淮の間、名徳多しと雖、死心、靈源、及び湛堂と黃龍下の佛果、佛眼を並稱して五大士の目ありといふ。筠州

清涼の徳洪禪師、字は覺範、眞淨に隨侍するもの七年にして、其の密旨を得たり。學、該博、其の文を遣るや、落筆、萬言立るに成る。しかも生涯、禍難多く、讒者の言により、獄に投ぜらるゝもの前後三回、流刑に處せらるゝもの一回、爲めに還俗を命ぜられ、中頃一たび張無盡居士の力により、僅に奏して再び得度すと雖、幾もなくしてまた罪を得、晩に思を經論に潜め、書を著はして秘奥を發揮す。欽宗の世、勅により、重ねて剃髮することを許す。時恰も國歩多艱、金軍、來りて汴京を陷る、所謂靖康の難これなり。此に於て禪師、退いて廬山に遊び、高宗の建炎二年、世壽五十八にして同安に寂す。自ら稱して寂音尊者といひ、著す所、『僧寶傳』(卷三十)、『高僧傳』(卷十二)、『智證傳』(卷十)、『石門文字禪』(卷三十)、其の他、『法華』、『楞嚴』、『圓覺』等の疏註、語錄、文集等なほ多し。江州東林寺の常總禪師は、劔州の人、施氏の子なり、歸宗に惠南禪師



に依り、隨從二十年、盡く玄奥を得たり。初め泐潭に住し、後東林に遷る。蓋し東林はもと律院、神宗の元豐三年、詔して革めて禪刹となし、南昌の守王韶、寶覺心禪師を延いて主たらしめんとす。寶覺、總を擧げて自ら代らしむ。後、命により大相國智海禪院に住せしむ。固辭して受けず、詔して之を許し、紫衣を賜ひ、號して廣惠禪師といふ。元祐三年、徐王奏して、また照覺禪師の號を賜ふ。同六年、六十七にして寂す。東林會下、衲衆常に七百と稱し、唱道最も隆盛を極めたりしが、嗣法のもの實に六十餘人、泐潭應乾、開先行瑛、褒親有瑞等、皆一時の俊なり。

都率從悅の下には、都率惠照あり、泐潭文準の下には、雲岩天游あり、泐潭應乾の下には、圓通道旻、勝因咸靜、雪峯有需等ありといへども、多く顧みるに足るものなし。之より兩三傳にして、僧傳全く其人を掲げず、黃龍一派の末、終に殆んど傳ふるものなし。



## 第十一章 宋以後の五家(中ノ二)

楊岐方會禪師は袁州の人、俗姓は冷氏なり。少にして警敏滑稽、筠州九峯に遊び、恍として舊遊の處に似たり、眷々去るに忍びず、遂に落髮して僧となる。後、石霜に隨ひて専ら院事を監す。石霜、飯罷めば必ず山行し、禪者、道を問はんと欲するに多く所在を失ふ。方會、其の出で、遠からざる比、急に鼓を搥ちて衆を聚む、石霜、已むを得ずして還り、怒りて曰く、日暮陞座、これ叢林の規繩にあらずと。會曰く、汾陽は晩參す、何ぞ規繩にあらずと言はんと、石霜遂に如何ともするなし。後世、叢林に、三八念誦罷んで猶ほ參ずるものは、これ其の源なりといへり。後九峯に還り、道俗の苦請により、楊岐山に住し、更に潭州雲蓋山に移る。會下、白雲守端禪師最も傑出と稱す。端、廬山の承天に

住し、更に圓通に轉ず、皆居訥禪師の推す所たり。後諸大刹に歴住し、至るところ、衲子雲集す。熙寧五年、四十八歳にして寂す。白雲の下に五祖山の法演禪師あり、綿州鄧氏の子、三十五歳にして始めて出家祝髮す。成都に往いて唯識の教義を學び、菩薩見道に入る時、理智冥合し、神境融會し、能證、所證を分たずといふ、若し能證、所證分別なくんば、何を以てか其の證を知らん、玄奘曰く、人の水を飲むが如し、冷暖は自知すべしと。此に於て思へらく冷暖は自知すべし、作麼生かこれ自知底の事。師こゝに大疑を懷き、成都を出で、圓照本禪師に謁し、更に浮山遠禪師に參じ、轉じて白雲に至り、契悟する所あり、諸寺を経て終に五祖山に入り、徽宗の崇寧三年を以て寂す。嗣法の徒二十餘人、照覺の克勤、佛果禪師、太平の惠勤、佛鑑禪師、龍門の清遠、佛眼禪師、共に會下の俊髦、當代の龍象なり、世に稱して三佛といひ、就

中昭覺其の化風最も盛にして、楊岐一宗の後に榮ゆるもの、一に其の力に俟つといふべし。

便宜の爲め、先づ佛鑑、佛眼二禪師について畧説すべし。佛鑑禪師、名は惠勤、舒州の人、俗姓は汪氏。『法華』に、「唯此一事實、餘二則非眞」といふに至りて省あり、諸名宿に歴參し、終に太平に五祖下に至る。五祖容易に人に許さず、禪師之を恨み、佛果と共に忿然として太平を去る。幾もなくして佛果再び祖に還りて所得あり、また努めて師を策勵し、以て五祖の鉗鎚を受けしむ。印證を得て後、太平の靈源、黃龍に赴くに當り、師を薦めて此に住せしめ、政和の初め、轉じて大相國智海に入る。五年にして辭して南に歸るや、樞密鄧子常の奏請により、勅して佛鑑の徽號並びに紫衣を賜ふ。則ち蔣山に居り、政和七年を以て寂す。法を嗣ぐものに、常德府文殊の心道、安吉州何山の守珣等あ

り。佛眼禪師名は清遠、臨邛の李氏なり。『法華』を讀みて、是法非思量分別之所能解といふに至り、自ら決すること能はず、舒州太平に五祖禪師に參ず。五祖の太平より海會に遷らんとするに當り、其徹する所なきを悲しみ、辭して蔣山に去る。會ま靈源に遇ひ、漸く親善なり。靈源、師をして勸めて再び五祖に還らしむ、乃ち復海會に詣り、寒夜孤坐、爐中一點の火を得、恍然として所發あり。之より四面の大中菴に隱居し、次いで崇寧萬壽寺に開法し、轉じて龍門の延壽寺に入る。後、和の褒禪に遷り、紫衣徽號を賜ふ。宣和の初め、病を以て蔣山の東堂に退き、翌年、合掌怡然として歸寂す。門人、塔を龍門に建つ。嗣法のもの、溫州龍翔の竹菴士珪、黃龍の牧菴法忠、衢州烏巨の雪堂道行、安吉州道場の明辯等、皆名を知らる。牧菴の席下に參じ得法せるものに慈化印肅禪師あり、袁州慈化の荒院を興し、孝宗の乾道五年、五十

五にして寂す。

佛果禪師、名は克勤、彭州の人、俗姓は駱氏、家もと儒を宗とす、偶ま寺に遊んで佛書を見、大に感發する所あり、終に祝髮し、諸尊宿に遍參し、最後に五祖を見る。五祖師の爲に容易に認許せず、忿然、五祖を罵りて去り、金山に赴く。五祖曰く、汝、他日病重からん時、再び我を思ふことあらんと。金山に於て偶ま病に罹る、平日の見處、更に用をなすなし、此に於て五祖の言を懷ひ、再び還りて五祖を見る。得法の後、成都の帥、翰林郭知章の請により、六祖寺に開法し、名を昭覺と改む。政和年間、また峽を出て、南游し、荆南に張無盡に遭ひ、華嚴の玄旨を談ず、無盡大に嘆美し、師禮を以て仕へ、留まりて碧巖に居らしむ。碧巖は澧州の夾山靈泉院なり、禪師「雪竇頌古」を提唱し、垂示、着語、評唱を加へたるもの、後世廣く世に行はれ、呼んで「碧巖集」といふは人の

知る所なり。鄧子常の奏により、紫服及び佛果禪師の徽號を賜ひ。次いで詔を受けて金陵の蔣山に轉じ、更に汴京の天寧萬壽寺に遷る。高宗建炎の初め、金山に入るや、帝、楊州に幸す、詔を受けて拜謁し、圓悟禪師の號を賜ふ。爾後一たび雲居に住し、また昭覺に還る。紹興五年八月、微恙を示し、趺坐、偈を書して逝く。昭覺寺の側に塔す、眞覺禪師と謚す。法を嗣ぐもの七十餘人、徑山宗杲、虎丘紹隆、靈隱惠遠の三人は衆中の尤、影響の後に最も大なるもなり。

徑山の大惠宗杲禪師は、宣州の人、俗姓は奚氏、初め廣く諸家の語録を閲し、其の源唯達磨にして、五家門流の別をなす所以を疑ふ。瑯琊覺の孫、明教紹理禪師に參じ、次いでまた大陽元、洞山微等について、曹洞の禪流に浴す。然るに其の傳授付囑のことに就いて、佛祖自證自悟の法に合せずとなし、去りて更に臨濟の諸德に謁し、黃龍に於

て晦堂、東林を見、また寶峯に湛堂に見ゆ。既にして圓悟に參じて省あり、其の法を嗣ぐ。圓悟蜀に歸るの後、當時天下騷然、金兵北地を擾す。亂を避けて南方に赴き、幾もなくして請により、徑山に住す。參徒雲集、後れ至るものは容るゝに室なく、爲めに別に千僧大閣を建て、居るもの二千餘、開法陞座に、問答未だ終らざるに、數僧競ひ出て、問を争ふ、法席の盛なりしこと想ひ見るべし。一日上堂、語當路重臣の怒りに觸れ、衡州に配せられ、居ること十年にして、梅州に徙さる、しかも求道の衲子、糧を裹んで之に隨ふ。また居る八年にして、赦されて僧衣を着く。四方之を招げども應ぜず、最後に朝旨を以て育王を董し、更にまた徑山に轉ず。孝宗皇帝、普安郡王たりし時、相見て大に喜び、親ら妙喜菴の大字を書して之を給ひ、即位するに及び、大慧禪師の徽號を賜ふ。晩に退いて、徑山の明月堂に居る。孝宗の隆興元

年、俗壽七十五にして寂す。師極力、曹洞の禪風を排し、寂照靜默、人をして寒灰枯木ならしむといひ、邪師寂照の禪、佛の惠命を斷ずと言へり。蓋し黙照、看話の争、著しくこゝに兆す、しかも臨濟圓悟の禪、一時に振ひしもの、禪師の力、與りて大なりしといふべし。嗣法九十餘人、育王德光(佛照禪師)の法、最も後に存し、德光の下に靈隱之善(妙法)、淨慈居簡(北間)等の人々あり。

虎丘紹隆禪師は、初め寶峯に湛堂を、黃龍に死心を叩き、次いで圓悟の室に入る。諸寺に歴住し、虎丘に徙り、道聲大に鳴る。虎丘の法嗣は、即ち天童曇華(應菴)にして、大惠と化を並べ、世に二甘露門と稱せられ、其の下に天童咸傑(密菴)あり、密菴席下、得法の人多く、靈隱崇岳(松源)、臥龍祖先(破菴)、薦福道生(曹源)等、其の他なほ多し。破菴の下に、徑山の無準師範(佛鑑禪師)、靈隱の石田法薰あり、無準の法、最も後に榮ゆ。

靈隱の瞎堂惠遠禪師は、眉山金流鎮の人、圓悟に昭覺に參じ、其の晩年の法徒なり。圓悟示寂後、扁舟、峽を下り、淮南に至り、之より化風大に震ふ。妙喜時に梅州にあり、傳聞して駭いて曰く、老師暮年子あり、是の如きかと、乃ち圓悟付する所の法衣を贈る。諸大刹を経て虎丘に入り、更に詔により、高亭山崇先寺に住し、又靈隱に遷る。孝宗皇帝、勅して佛海禪師の號を賜ふ。淳熙二年、病なくして寂す、壽七十四。元以後の禪は、主として虎丘紹隆の後、破菴、松源の末、其の流漸く廣汎、就中、無準の法は、仰山祖欽(雪巖)、淨慈妙倫(斷橋)の二派に分れ、雪巖の下に高峰原妙あり、高峰の下に中峰妙本を出せり。高峰禪師は、初め天台の學徒、後、衣を更へて淨慈に入り、雪巖に北磻に參ず。至元の初め、天目山の西峰に登り、張公洞に入り、扁して死關といひ、戸を越えざるもの十五年、學徒雲集す。成宗の元貞元年、壽五十八にして寂す。中

峰禪師は、高峰に死關に謁し、流泉を觀て省あり。常に定居なく、或は船中、或は菴室、榜して幻住といふ。仁宗皇帝、聞いて聘すれども至らず、金爛の袈裟を賜ひ、號して佛慈圓照廣惠禪師といふ。英宗また深く之を敬す。至治三年、世壽六十一にして寂す。逝後七年、文宗諡して智覺禪師といひ、順宗の元統二年には、其の錄(三十卷)を藏に入れしめ、更に普覺國師の號を贈る。

元より明末に至るまで、宗脈綿々絶えずといへども、眞風次第に地を掃ひ、明末に至りては、法統の尋ぬべきもの僅に車溪性冲、天童圓悟、馨山圓修の三派あるに過ぎざりしといふ。其の他、紫柏大師(遠觀真可)あり、神宗の時、誣によりて獄中に死す。雲棲の株宏(達池大師)あり、禪と念佛とを雙修す。雲棲は、中峯の嗣、天如惟則の法を承く。蓋し以上の二人は、彼の憨山德清と共に、明代後期の三大明星と稱すべし。

楊岐方會—白雲守端—五祖法演—

昭覺克勤—徑山宗杲—育王德光—

靈隱之善  
淨慈居簡……

薦福道生

虎丘紹隆—天童曇華—天童咸傑—

靈隱崇岳……

臥龍祖先—徑山師範—

仰山祖欽—高峰原妙—中峰妙本—伏龍元長—鄧尉時蔚—

鄧尉普持—東明惠岳—東明普慈—寶峯明瑄—天奇本瑞—

龍川明聰—笑巖德峯—龍池正傳—天童圓悟……

磬山圓修……

淨慈妙倫—瑞巖文寶—華頂先觀—福林智度—繁昌俊—

東林悟—大崗澄—夷峯寧—天目進—野翁曉—敬長如空—

車溪性冲……

靈隱惠遠

太平惠勤—文殊心道—

何山守珣

龍門清遠—龍翔士珪

牧菴法忠—慈化印肅

烏巨道行

道場明辯

### 第十二章 宋以後の五家(下)

唐代の曹洞宗は、洞山、曹山、雲居等の法流の盛なりしこと、殆んど雲門、臨濟を凌駕せりといへども、五代を経て宋に入るに及び、漸く其の傳を失はんとするの衰運に向ひ、大陽、投子の間、僅に一縷の命脈を維ぐことを得たり。蓋し雲居禪師の嗣、道安丕禪師より道安志、梁山觀等の諸師は、其の傳詳ならずと雖、思ふに唐末より五代亂離の際に於て、僅に法門を護持し得たるものなるべし。梁山の法を嗣げるものを大陽の警玄禪師(明安大師)とす(或は警延に作るは諱を避くるなり)。其の事蹟死没の年月等また明ならず、恐らくは五代より宋初にありて、洞上の化

風を宣揚せし人にして、僧傳に、嗣法のもの二十餘人の名を掲ぐるを見るに、宋の天下一統の後、禪師によりて此の宗再興の運に向へるものに似たりといへども、當時明教の「孤泉を引く」の嘆ありしに見れば、此の禪風のために氣を吐けるものゝなほ寥々たりしを推知すべし。しかも投子の一流、獨り後に盛なるに至りしは、投子、芙蓉相次いで、唱道、其の人を得たるによる。投子、義青、禪師は、もと華嚴の學者なり、人呼んで青華嚴といふ。初め法相を學び、三祇得脱の迂を厭ひ、華嚴頓教に轉じたりしも、また即心自性、文字を離るゝ事を想ひ、更に禪門の諸徳に咨ひ、終りに浮山法遠禪師に會昌巖に謁す。傳にいふ、浮山、初め葉縣歸省に得法し、後大陽明安に至る、明安、付するに法を以てせんとす、浮山、既に葉縣に嗣ぐを以て辭して曰く、和尚老齡、若し人の傳ふるなくんば、某甲請ふ、信衣を持し、和尚のため

人を得て、永く相附囑せんと。故に曹洞の傳信、假りに一時浮山に存す。今投子、法を浮山の下に得るに及び、即ち大陽の頂相と、其の所托の皮履直綴を出し、之を投子に付して曰く、我に代りて其の宗風を續ぎ、宜しく之を護持せよ、久しくこゝに留まる勿れと、乃ち圓通秀禪師に依らしむ。去りて白雲に住し、投子に遷る。但し投子、嗣法のこと古來の一疑案と稱す。投子の後に、芙蓉道楷、大洪報恩の二人最も著はる。芙蓉禪師は沂州沂水の人、俗姓は崔氏。投子の印を得て沂に還り、後、西洛の龍門、郢の大陽、隋の大洪等に歷住し、徽宗の崇寧三年詔により、汴の十方淨因禪院に入り、大觀元年更に天寧に移り住す、時に開封の府尹李孝壽、禪師の道行を奏し、紫衣並びに定照禪師の徽號を賜ふ。禪師、上書して辭して曰く、常に誓願を發して利名を受けず、堅く此の意を持すること積んで、歳年あり、庶幾はくは、此くの



如くにして道を後來に傳へ、人をして意を佛法に専らならしめん、今異恩を蒙ると雖、若し遂に忝なく冒さば、則ち臣自ら素願に違ふ、何を以てか人を教へん」と。李孝壽をして諭して之を受けしめんとせしも、終に聽かず。帝大に怒り、命じて獄に下し、還俗、緇州に配せしむ。翌年、放されて還り、芙蓉湖に菴し、參徒數百、禪師爲めに官の疑を受けんことを慮り、衆と共に日に粥一盂を食す、堪へざるものは、漸次に去り、なほ百餘人を餘すといふ。政和七年、勅して其の菴に華嚴禪寺の額を賜ふ。翌年、世壽七十六にして寂す。其の法嗣に、汝州香山の法成、成都大智の齊璉、鄧州丹霞の子淳等あり。しかも大陽の傳衣は、之を洞山の微に付す、微、瀾東に退き、雙林小寺に終へ、世に著はれざりしを以て、更に之を鹿門に取り、閣を建て、之を藏し、藏衣といへり。鹿門の法燈は、また芙蓉の附法なり。

丹霞子淳の下に、天童正覺、長蘆清了の二禪師あり、名一代に震ふ。天童正覺禪師は隰州李氏の子、法を嗣いて後、諸寺を経て天童に入り、當時天童屋廬陝隘、禪師至りて面目一新し、衲子雲集す。高宗の紹興二十七年、六十七にして寂す、謚して宏智禪師といふ。宏智の下には雪竇嗣宗、淨慈惠暉等あり、惠暉自得と號す、其の下に嘗州華藏寺の惠祚あり、傳へて靈隱、東谷の明光を經、直翁舉、天童雲岫、雪竇大證に至る。

長蘆の眞歇清了禪師は綿州の人、俗姓は雍氏なり。少にして成都に學び、後、蜀を出で、丹霞の室を叩く。眞州長蘆に居り、諸山に歴住し、詔を受けて育王に入り、更に温州龍翔、杭州徑山、慈寧等に移る。時に靖康の國難を經、丞相秦檜等和を議して、皇太后韋氏僅に金より還ることを得たり。こゝに於て紹興二十一年、杭州皇亭山に於て新寺

を建て、禪師を請じて開山住持せしめ、命じて崇先顯孝寺といふ。幾ならずして寂す、勅諡して悟空禪師と號す。悟空の嗣法十餘人、天童宗珏禪師を正系となす。珏禪師の下に雪竇智鑑禪師あり、天童如淨禪師は即ち其の下に出づ。

天童如淨禪師、長翁と號す、足菴智鑑に雪竇に參じ、出世して、屢名利に遷り、淨慈を主とり、勅により天童に陞る、寂する時、年六十六。其の法嗣に鹿門自覺あり、青州普照寺一辨、磁州大明の竇、太原府王山體、大明の雪巖滿を経て、報恩行秀禪師に至る。行秀禪師は河内の人、俗姓は葵氏、刑州淨土寺に出家し、雪巖の法を得、淨土に還り、萬松軒を構へて居る、世に萬松老人といふ。後中都(燕京は金の中都)の萬壽寺に住し、金の章宗皇帝、禪師を禁中に召し、陞座說法せしめ、金爛の袈裟を賜ふ。章安二年、詔を受け更に大都の抑山棲隱寺に住す。會下得法のもの

百二十人、壽八十一にして寂す。其の『從容錄』は、今なほ盛んに世に行はる。

宋の高宗、金のために汴京を侵され、都を南に遷してより、臨濟は多く南方に行はれ、曹洞は却て北方に盛なりし傾あり、長翁の後繼は多く北方に化を布き、萬松、金帝の歸依を受け、金滅びて蒙古(元)之に代るに至りても、北帝、大に曹洞の禪を保護せり、萬松の法嗣少室福裕は、元の世祖の世、奏して道教を排斥し、命により道教の書を焚毀し、道士を歸正せしめたるを以て最も著名なり。明の末期に至り、北京宗鏡菴の少山宗書禪師に至り、二分して西京少室の幻休常潤、建昌廩山の蘊空常忠を出し、幻休の下に北京大覺寺の慈舟方念禪師あり、慈舟の下に紹興府雲門顯聖寺の湛然圓澄禪師あり、廩山の下には建昌壽昌の無明惠經禪師あり、壽昌の下に、廣信府博山の無異

元來、建寧府東苑の惠臺元鏡、壽昌の閔然元謐、福州鼓山の永覺元賢等の諸禪師あり、蓋し惠經、圓澄の二師其の化最も盛んに、門葉殊に繁しといふ。

雲居道膺—同安丕—同安觀志—梁山緣觀—大陽警玄—投子義青—

芙蓉道楷—香山法成  
大洪報恩—大智齊璉

丹霞子淳—天童正覺—雪竇嗣宗  
洞山道微—淨慈惠暉—華藏惠祚—東谷明光—直翁舉—  
鹿門法燈

長蘆清了—天童宗莊—雪竇智鑑—天童如淨—鹿門自覺—

天童雲岫—雪竇大證

青州一辨—大明實—玉山體—雪巖滿—報恩行秀—少室福裕—

少室文恭—寶應福遇—少室文才—萬安子嚴—少室了改—少室契斌—

定國可從—少室文載—宗鏡宗書—

少室常潤—大覺方念—  
廬山常忠—壽昌惠經—

雲門圓澄  
博山元來  
東苑元鏡  
壽昌元謐  
鼓山元賢

## 第二篇 日本

### 第一章 鎌倉以前の禪

本邦の禪宗は、榮西禪師が、鎌倉の初期に於て、臨濟禪を傳へたるに始まると雖、其の以前、禪の傳來全くこれなかりしにはあらず、古く奈良朝以前に既に道昭僧都の傳あり、次いて奈良朝に入りて道璿律師の傳あり、平安初期に於て、傳教、慈覺二大師の傳あり、以上の四傳は、共に附傳にして、他宗の傳來に附隨したるものなれば、實は未だ純粹の禪と稱すること能はず。弘仁の世、義空禪師の傳ありて、始めて専ら禪を宣揚するものあり、平安末、覺阿の傳を経て、以て榮西禪師に至る。道昭僧都は本邦法相宗の初祖にして、孝德帝の世、支那

に赴き、齊明天皇の世歸朝し、元興寺に住せり、故に法相宗元興寺傳の名あり。然るに僧都の彼の地にあるや、また相州惠滿禪師より禪を受くと傳ふ。其の事實は詳かならざれども、元興寺に禪院を建て、其の徒を教養したりといひ、元興寺が奈良に移建せられし後も、禪院の存せしにより、其の修禪辨道のこと、全く虚誕ならざるを知るべし。惠滿禪師は二祖下の僧那禪師の法を繼承せるものにして、其の事蹟の詳を知ること能はざるも、甚だ脱塵超俗の風を以て知られたりしことは僧傳の記する所なり。元興寺の禪院は、其の禪の絶えたと共に、自ら廢滅に歸したるものにして、其の規模固より之を知るべからずと雖、また本邦禪堂の起原といふことを得べし。道昭僧都は、今より畧ぼ一千九百年前の人なり。道昭僧都寂後、大凡四十年を経て道躋律師唐より來る。其の目的は

専ら律を弘むるにありしも、また嵩山老安の禪を傳へ、晩に吉野の比蘇寺に退き、禪觀を樂めりといふ。比蘇寺は其の建立の次第を明にせずと雖、本邦の最古の寺院にして、敏達天皇の世、放光阿彌陀の像を安置せるを以て有名なる所なり、其の廢絶の時代を知らず。律師の禪を受けたる嵩山の惠安禪師は、五祖下の俊傑にして、神秀禪師と肩を並べ、一代の歸向隆んなりし人にして、一百二十八歳にして寂せり、故に世に之を老安禪師の一派を以て目す。當時六祖南去の後なりしが故、南北二宗の別を生じ、老安は、所謂北宗の一支をなすものとす。但し傳教大師の血脈には、嵩山を神秀下に系せり。道躋律師の來るや、大安寺の行表、其の身を屈して、新律を躋に受け、また禪をも傳へたりと稱す。叡山の傳教大師は、即ち行表大徳の弟子なり。

叡山の最澄、即ち傳教大師は、桓武天皇の延暦年間、天台の教籍を求めんがため、勅により入唐し、台州に達す。しかも大師は、彼の地に於て獨り天台の學を受けたるのみならず、大乘圓頓戒、及び禪と密教とをも傳へたり、故に世に之を傳教大師の四種相承と呼ぶ。而して其の禪は之を天台山禪林寺の脩然シュゼンに得たり。脩然の傳は全く之を明にすること能はざれども、其の牛頭禪の法脉に屬する人たることは、古來の説なり。但し大師の繼承せし禪は、其の師行表大德より來るものを正系とし、脩然より傳ふる所は之を傍傳とするものにして、これ即ち叡山の禪の起原なり。故に其の禪は北宗派に屬するものたることを知るべし。

傳教大師の弟子多しと雖、其の寂後義眞嗣いで叡山に住し、圓澄、光定、其の後を襲ぐ、皆傳教大師の徒なり。此等の人々は大師の遺意を

繼いで、叡山に大乘戒壇の建立、及び大乘菩薩僧の養成を企てたるものにして、此の大乘戒、名けて之を一心戒といふ。一心戒は、大師入唐、之を天台の道邃に受くといへども、支那に於て、印度より此の一心戒を傳へたる端緒は、實に菩提達磨にして、所謂支那菩薩僧の起原は即ち達磨なりと傳へ、道璿律師が、戒律を本邦に弘むるや、また此の禪律一致の旨を明にしたるものにして、傳教大師は乃ち之を行表大德より得たるものなりと言へり。これ叡山に於ける禪と戒律との關係に就きての相傳なり。其の次第を、傳教に親聞記述せるものは、光定にして、光定は叡山最初の別當なり、世に別當大師といふは之を以てなり。

慈覺大師、圓仁は、また傳教の親弟なり。叡山三塔の中、東西二塔は傳教大師の開くところなれ共、横川は實に慈覺大師の開くところと

百八  
す。仁明天皇の承和五年六月遣唐大使藤原常嗣に隨ひ、第一船に乗じて入唐し、在唐十年に跨り、承和十四年九月を以て歸朝す。初め大師の唐に着するや、揚州府の開元寺に居り、大使と袂を分ち、之より直ちに南天台山及び北五台山の聖跡を拜し、法門を學ばんと欲す、しかも唐の朝廷、其の請を允許せず、大師爲めに本望を空しうし、大使の船によりて歸朝せんとし、海上暴風に遭ひ、逆に海州に漂着し、更に第二船に乗じ、海州を發し、また逆風のために登州に着く。こゝに於て大師遂に歸國の志を止め、登州赤山法華院に留り、本願を達せんと欲し、赤山の山神に祈請す、若し本願を滿たすを得ば、歸朝の後、禪院を建て、禪法を弘むべしと。蓋し此の山、當時盛んに禪法を傳ふ、故に此の願ありといふ。後幸にして、其の目的を達することを得、これ専ら赤山神の擁護に成るものとなし、叡山に禪院を建立せ

んとするの志ありしも、其の意を果さざりしかば、大師入寂の時、遣命して其の志を遂げしむ、これ叡山西麓に禪院并びに禪法の守護神として、赤山明神を建立するに至りし所以なりといふ。大師また登州より青州に至る、州の副使蕭敬中なるもの、大に敬重慰問し、且つ敬中受ぐるところ、の禪門師資密付の心印を以て大師に付囑すといへり。蕭敬中の傳に就いては、其の詳なることを知らず。承和の初、釋惠萼あり、慈覺大師の前、唐に赴きて五台、天台等を巡禮す。當時嵯峨天皇の皇后橘氏（嘉智子）、萼に命じて、禪僧を聘せしむ。或は曰く、弘法大師の密教を學びて歸るや、彼の地、別に禪宗あることを説く、これ橘氏の此の舉ありし所以なりと。萼、抗州鹽官の靈池院に至り、齊安禪師に謁し、其の旨を傳ふ、齊安、乃ち其の徒の上首義空をして之に應じ、日本に來らしむ、これ本邦、純粹に禪を傳ふるものあ

檀林寺

りし起原なり。齊安は、馬祖の法嗣にして、勅諡あり、悟空禪師といふ。義空の來るや、橘氏深く之を喜び、東寺の西院に居らしめ、後檀林寺を創立して専ら禪を弘めしむ。世に檀林皇后といふは之を以てなり。惠萼は其の後再び唐に赴き、彼の舟山嶋に補陀落山寺を建立せしを以て其の名特に高し。

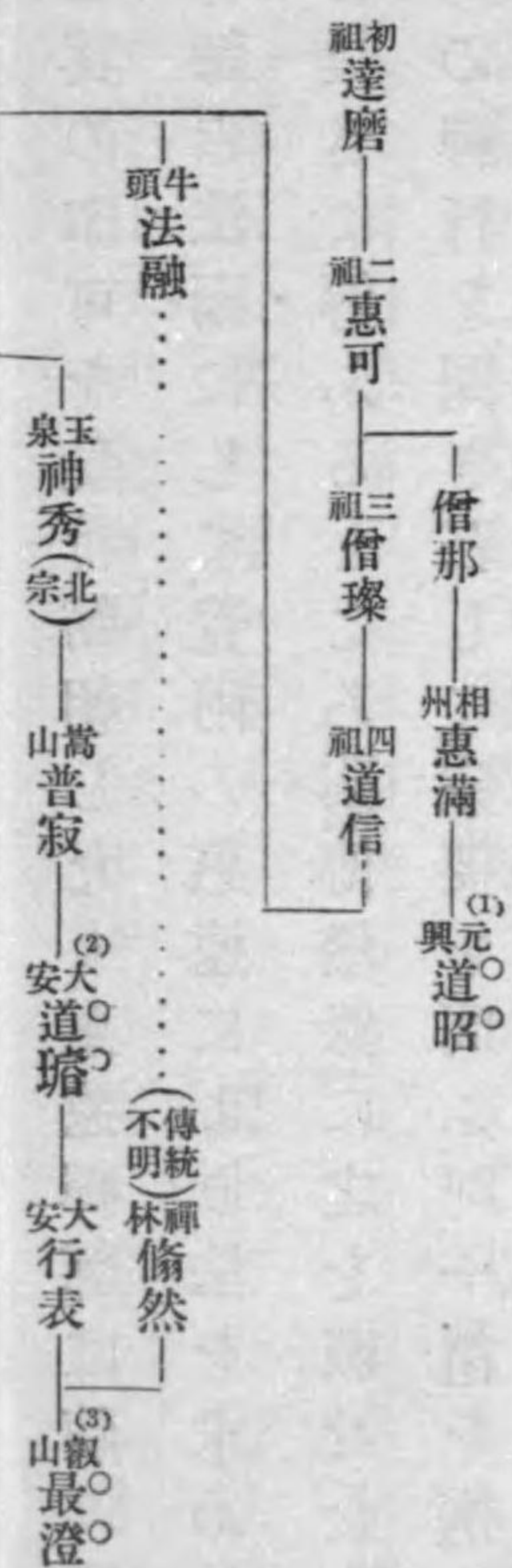
義空禪師本邦弘法の事蹟に就いては所傳甚だ詳ならず、幾もなくして、故あり故國に歸還し、隨ひて檀林寺また頽廢に歸し、之より禪法のこと跡を絶つもの三百餘年、其の間、瓦屋能光の入唐して禪を學ぶありしも、蜀地の碧溪坊に留りて化を布き、本邦に還らず。光は直ちに洞山禪師の法を嗣げるものにして、平安朝中葉のことなるべし。邦人の曹洞禪を傳へしもの、史上之を初見とす。平安朝の末に至り、叡山の僧覺阿禪師あり、唐に赴き、靈隱の瞎道惠遠禪師に謁し

三寶寺

て其の印可を受け歸朝したり。惠遠禪師は、前に述べたる如く圓悟禪師の法嗣にして、覺阿の惠遠により法を求めし事實は、彼の國人の具さに傳ふるところ、『續傳燈錄』に之を載せたり。或は曰く、高倉帝阿の禪行を聞き、召して宗要を問ふ、阿、一笛を携へ、之を吹奏して制に應ず、しかも時機未だ熟せず、君臣皆其の意を測ること能はざりしと。覺阿の法系はまた後に存續せず。

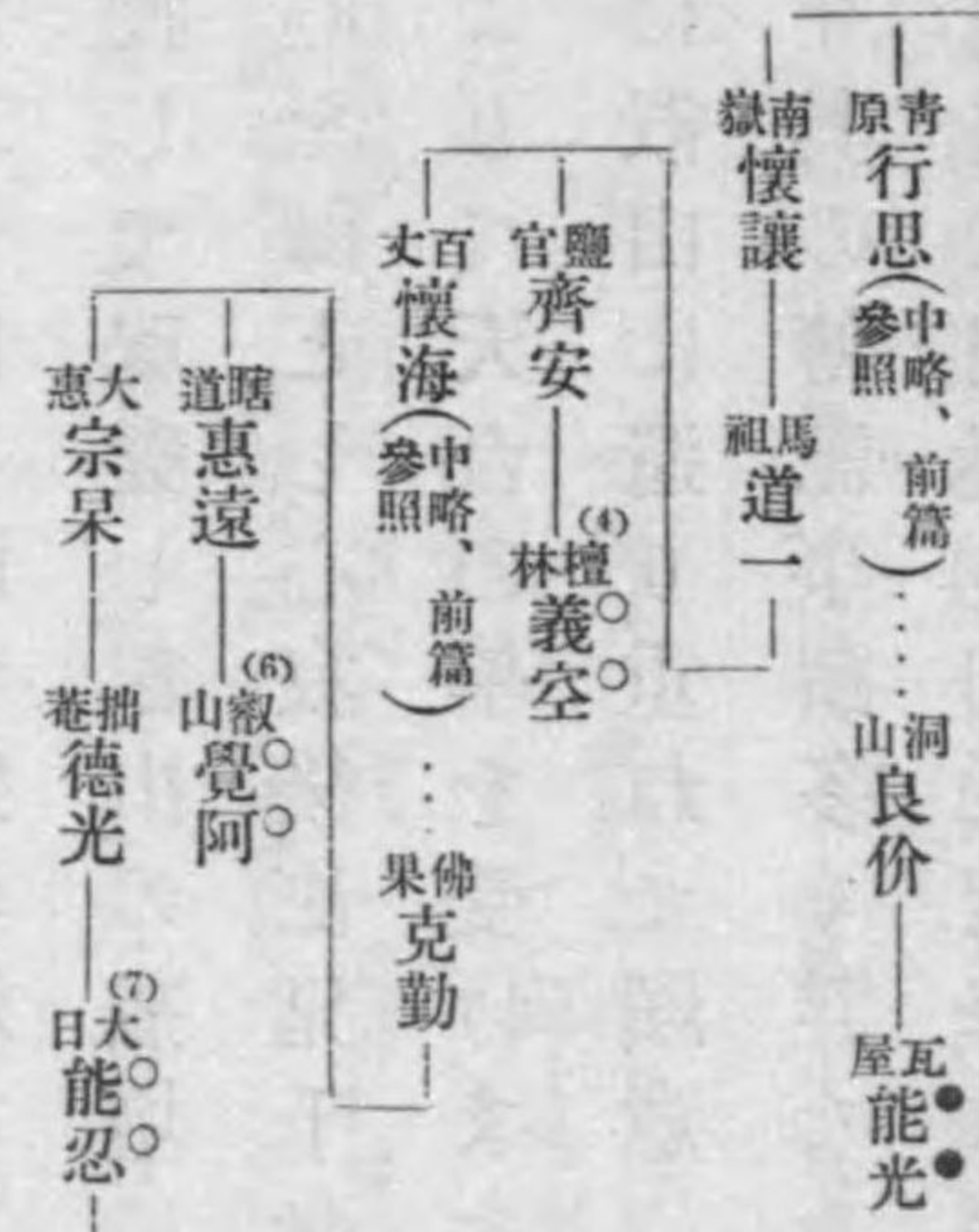
覺阿と殆んと同時の頃、大日能忍あり、攝津水田縣に三寶寺を建て盛んに禪法を唱ふ。思ふに當時支那人の九州地方に來るもの漸く多く、禪宗のこと既に多少一般に知らるゝの機運に向ひしかば、能忍の如きも、其の禪の由來詳ならずと雖、蓋し此等の支那人によりて習得せしものありしや疑なし。しかも人の、其の師承なきを誹譏するものありしかば、弟子を支那に遣はし、育王山の拙菴德光禪師

に謁し、其の所悟を呈して證明を得たり。忍はもと平氏の遺臣藤原景清の叔父にして、一夕景清の訪ひ來るや、弟子を遣はして酒を需めしむ。景清誤りて官に告ぐるとなし、終に之を刺殺すといふ。忍の會下、其の法盛にして、彼の後の道元禪師の法を嗣ぎし、洞門の二祖孤雲禪師の如きも、初めは能忍の徒覺晏に參じたるものにして、覺晏は能忍の印證を受け、多武峯に住したりしといふ。忍の本邦禪宗に與へたる影響の、上述諸師に比して大なるものありしことを知るべし。



五弘忍

六惠能(宗南)



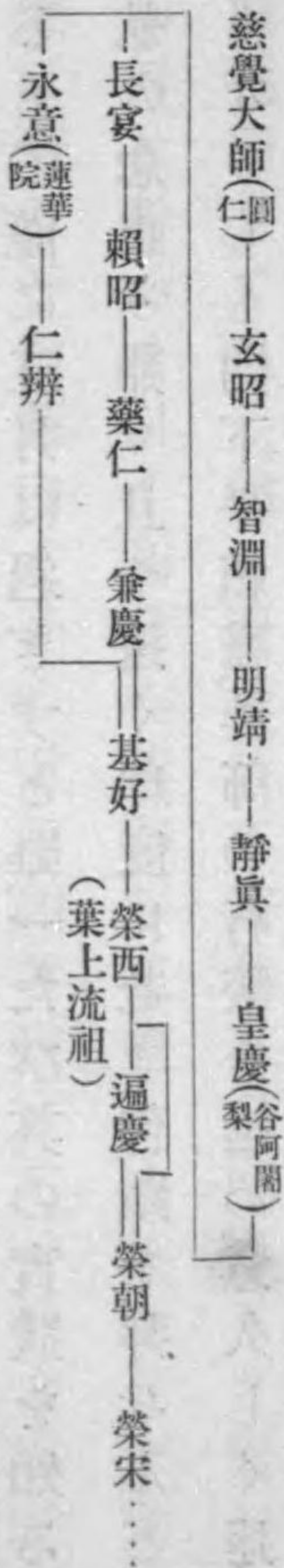
### 第二章 榮西禪師及び其の系統

道昭始めて禪を傳へてより五百餘年、傳教大師四宗相承歸朝の後、畧ぼ四百年にして榮西禪師、黃龍一派の禪を承けて、臨濟禪の法統之より日本全國に蔓延す。世に禪師を以て本邦禪宗の祖となす。蓋



し當時能忍の既に禪を一方に擧揚するあり、禪師と法門を争ふといふの傳説は、其の眞偽を判すべからざるも、禪師歸朝以後、勢望禪師に歸し、忍の後、次第に衰へたるは自然の事情なりしなるべし。榮西禪師、明菴と號す、俗姓は賀陽氏、備中吉備津の人なり。崇徳天皇の永治元年七月二十日を以て生る。幼より佛教を學び、年十一の時、郡の安養寺に投じて祝髮し、叡山の戒壇に登りて具足戒を受く。初め安養寺に靜心を師とし、心寂後、法兄千命の教を受け、十九にして叡山に有辯によりて天台の學を受け、また伯州大山に基好に隨ひ、密乘を傳へ、更に叡山に還り、重ねて顯意に密灌を受くといふ。此等禪師受教の人、今其の傳記事蹟多く詳ならず。禪師の入宋は前後二回、其の初度渡海は年二十八の時にあり。思ふに叡山にあるもの畧ぼ十年にして、顯密の奥旨、既に悉く之を傳へ、

殊に密教に於ては蓮華流の系統を受けて葉上一流を開くの端をなせり。今禪師の密教の系統を見るに大凡左の如し。



(惠心院源信僧都より明豪、明快を經、一乘房仁覺に至り、仁覺より慶朝、信朝二代の後、信朝の下に顯意あり、禪師の重ねて密灌を受くといふもの定なるべし。)

禪師の商船に托し本邦を發せしは、高倉天皇の仁安三年四月にして、翌五月明州の海岸に到達せり、これ宋の孝宗皇帝乾道四年に當り、恰も金人北侵し、前代高宗の世南渡して、首都臨安に遷り、一時小康を得たるの際なり。會ま廣惠寺知客の僧に遇ふ。僧問うて曰く、日本に禪ありや、答へて曰く、我が台宗の祖傳教大師、圓密禪の三宗を傳ふ、しかも圓密獨り盛にして、禪の滅する既に久し、故に海に航し

て來り、禪門の缺けたるを補はんと欲す、知らず、能く得んや否やと、知客曰く、子、祖師禪を究めんと欲せば、従前の知見を抛下し、大機を發得して、精勵、年を積まば、自然に契當の分あらんと、禪師深く心服したりといふ。此の月、四明より丹丘に赴き、本邦の重源に遇ひ、相伴ひて天台山に向ふ。重源は、法然上人の高弟にして、東大寺の勸進上人なり。此の年九月源と共に歸機を理め、得るところの天台の新章疏三十餘部六十卷を以て座主明雲僧正に呈す。初度の外遊、彼の地にあるもの僅に五月に過ぎずと雖、一たび其の實狀を知るに及び、後再航の念止み難く、且つ遠く印度に赴き、佛蹟を拜せんとするの情頻りなりしも、門下平頼盛、禪師の行装を遏め、意久しく達せず、頼盛死後、後鳥羽天皇の文治三年に至り、再び博多を發し、臨安に入る、時に年四十七、孝宗の末、淳熙十五年にして、北方擾亂益甚だしく、行

旅危難の恐あり、禪師の入竺、途、通ぜざるを以て果すこと能はず、由てまた天台に登る。時に虚菴懷徹禪師萬年寺にあり、行いて之に謁す。虚菴問うて曰く、傳へ聞く、日本密教甚だ盛なりと、端倪の宗趣、一句如何と、對へて曰く、初發心時、即ち正覺を成じ、生死を動せずして涅槃に至ると。虚菴曰く、子の言の如き我宗と一般なり、唯爾、未徹在と。之より心を傾けて鑽仰し、虚菴の天童山に轉ずるや、禪師また之に隨ひ、遂に印證を受け、黃龍八傳の法を得たり。或は曰く、禪師、彼の地にある時、歲大に旱す、郡、師を請うて雨を禱らしむ、修法の間、身千光を發し、天雨大に澍ぐ、因て千光と號すと。或は曰く、千光は國師號なりと。思ふに千光院に住するを以て、人呼んで千光院法師と稱せしに基くと、なすもの眞に近からんか。

在宋四年、建久二年を以て平戸嶋葦浦に歸着す。民部大輔清貫なる

もの、始めて禪師を請じ、小院を博多に營み、禪規を行ふ、後の聖福寺  
是なり、これ本邦禪宗伽藍の創始とす。建久三年、同國香椎宮の側に  
報恩寺を構へ、始めて菩薩大戒の布薩を行ふ、虛菴禪門の一大事と  
して、禪師に付するに此の菩薩戒を以てす、これ本邦禪戒の起原な  
り。禪師の入洛、禪風を煽揚するや、叡山の學徒之を誹譏するものあ  
り、就中筑前箱崎の僧良辯なるもの、山徒と相援引して禪師を陥れ  
んとす。禪師説くに台祖傳教大師の台密禪相承を以てし、禪若し非  
ならば、大師の禪を傳ふるを如何せんといふ、衆皆口を緘して争ふ  
こと能はず。建仁二年、大將軍頼家、禪師のために洛東に一大禪苑を  
開く、建仁寺是なり。禪師こゝに眞言、止觀の二院を構へ、以て三宗弘  
傳の道場となし、暗に傳教の跡を學ぶ、朝廷優遇紫衣を賜ひ、建保元  
年僧正に擢てらる。後鎌倉に赴き、同三年龜谷に壽福寺を建立す、蓋

し將軍實朝、母政子と共に、禪師のために營む所なり、これ關東に禪  
あるの發端とす。工事未だ就らざるに、歸洛建仁に入り、此の年七月  
五日世壽七十五にして寂す。著すところ『興禪護國論』三卷あり、山徒  
の禪を難ずるによりて論述する所なり。其の他『出家大綱』一卷また  
人の普く誦するところたり。禪師また宋より茶種を携へ歸りて之  
を宇治に種植す、爲めに『喫茶養生記』一卷を作る、其の他著はすとこ  
ろなほ多し。  
榮西禪師の陶冶を受くるもの、中、圓爾辨圓あれども、圓、後入宋し  
て法を彼の地に嗣ぐ、故に禪師の法統を繼承するものは、退耕行勇、  
釋圓榮朝、佛樹明全等を其の主要なるものとす。明全和尚は、榮西寂  
後八年、即ち後堀河天皇の貞應二年八月海に航して宋に入り、法を  
求めしが、不幸にして淹留三年、彼の地に寂せり。行勇和尚は相州の

人ともいひ、また京師の人ともいふ、蓋し鎌倉にありて既に一方に名をなし、ものなりしが、榮西禪師の東下に遭ひ、壽福に參じて始めて禪に入りしもの、如し。之よりさき將軍頼家の母政子、勇によりて受戒し、法名を眞如といふ。故を以て將軍母子、深く勇に歸向せり。政子高野山に金剛三昧院を開くや、榮西禪師を第一世とし、禪師滅後、勇二世となり、更に建仁に轉ぜしも、再び三昧に入りて建仁に準じ、台密禪三宗を置く。後、壽福に住し、北條泰時の淨妙、東勝の二寺を建つるや、皆勇を請じて開山初祖となせり。四條天皇の仁治二年、壽八十にして東勝寺に寂す。榮朝和尚は郷貫詳ならず、思ふに初め圓密の學徒なるべし。上州世良田の長樂寺を開き、三宗兼學の道場とす。後深草天皇の寶治元年を以て入寂すといふ。

榮西禪師にありては、未だ全く獨立の禪を唱ふるの機に達せず、且

つ其の學の淵源また深く台密に其の根帶を有したりしかば、行勇榮朝等の法子皆三宗兼修を標榜し、行勇の如きも、實に一方にありては、鎌倉幕府の祈禱僧たるの觀ありしなり。而して此の遺風は東福の圓爾國師に至りてもなほ全く擺脫するに至らざりしを見る。

### 第三章 曹洞禪の傳來

榮西禪師以後、支那に赴きて嗣法し來るもの十一人、支那人にして來りて其の法を傳へたるもの十三人、合して世に之を禪の二十四流といふ。然れども詳に之を言へば、邦人の宋地嗣法のもの實は十一人のみにあらず、此の外なほ十餘人を數ふべし。但し此等は皆臨濟禪に屬するものにして、所謂二十四流中、唯三流のみは曹洞禪に加ふべし。即ち道元禪師の傳を第一傳とし、東明惠日を第二傳とし、

東陵永興を第三傳とす。惠日和尙の來朝は、後二條天皇の延慶二年(真時)にして、道元禪師歸朝より八十年後に當り、永興和尙の來朝は後村上天皇の正平六年にして更に惠日より四十年後に當る。惠日は鎌倉に來り、圓覺(第十世)、建長(第十世)を始めとし、萬壽、東勝、壽福寺等に歷住すると三十年、北條氏の依信する所となり、永興は先づ京師に入り、天龍(第三世)、南禪(三十世)の二寺に住して足利氏の歸向を受け、晩に圓覺(第二十世)、建長(第三十世)に遷れり。蓋し其の禪を説く、濟家に混じて分たず、共に未だ、特に洞門一家の風格を張りしものといふべからず。我國曹洞宗の初傳は道元禪師にあり、稱して洞門の高祖といふ。而して其の法流また廣く全國に流れ、遂に臨濟禪を凌ぐの狀況を呈するに至れり。道元禪師、俗姓は源氏、久我家の出なり、父は内大臣通親にして母は攝政藤原基房の女なり。建曆二年、年十三にして良顯

法眼の室に入る、良顯は禪師の外叔なり。翌年叡山の座主公圓僧正により剃度受戒し、建保二年、年十五にして京都の建仁寺に赴き、榮西禪師の門に投ず。榮西滅後其の嗣明全和尙に師事し、精修九歳を経たり。或は曰ふ、禪師建仁寺に到りたるは榮西の滅後にして、専ら明全に隨ひたりと。後堀河天皇の貞應二年三月、明全和尙に伴ひ、商船に托し、宋に赴き、明州の海岸に着す、これ寧宗の嘉定十六年に當る。木下道正、加藤景正(四郎左衛門)等は、此の時、禪師に隨從奉仕せるものにして、景正は即ち尾張瀬戸窯の祖なり。禪師、明全和尙と共に、先づ天童山に登り、無際了派に參す、無際は、大惠宗杲禪師の嗣、育王徳光の法を承く。後諸方に周游し、徑山如琰、盤山思卓を始めとし、諸老の間に歴參し、皆契はず、復無際の下に還らんと欲し、途にして無際の示寂を聞き、大に望を失ひ、將さに天童に至りて明全に告別し、歸朝の

途に就かんとせり。會ま徑山に登り、老穉なるものに遇ふ、穉説くに天童の新命如淨禪師の當今第一の宗匠なるを以てし、勸めて相見せしむ。禪師乃ち天童の妙高臺に長翁如淨禪師を禮し、これより心を傾けて參隨し、遂に佛祖面授の法門を受け、洞山第十四世の正統を嗣ぎ、芙蓉道楷より所傳の信衣、嗣書、自贊の頂相、及び『寶鏡三昧』五位顯訣等を傳へ、理宗の寶慶三年、即ち我が安貞元年を以て歸朝せり、時に年二十八、之よりさき寶慶元年、明全和尚は、天童山に於て入寂せり、禪師悲泣、其の舍利を携へ歸り、之を明全の門下に分つ、舍利相傳記は、禪師自ら其の次第を録する所なり。

禪師歸朝の後、一時建仁寺に居りしが、機未だ熟せず、有縁の檀那所施の地、歴觀皆閑居の地に適せず、寛喜元年、僅に宇治深草の安養廢院閑散の地を占めてこゝに退く。次いで天福元年、極樂寺の舊趾に

移り、改めて觀音導利院といふ。參見問法の道俗四方より集まり、法堂、僧堂の建立新に成りしかば、名けて興聖寶林寺といひ、曹溪の六祖遺蹟の名に擬す。道聲四方に振ひ懷井、僧海、詮惠の三人を首とし、義介、義尹、義演、義準等俊足の雲集來投せしは多く此の間にあり。深草に退いてより興聖寺在任十一年、寛元元年、院事を義準に委し、波多野義重の請に應じ、遠く越前に赴き、志比庄に入る。義重、爲めに伽藍を傘松峯の西に建て、傘松峯大佛寺といふ。幾もなくして、改めて吉祥山永平寺と稱す。執權北條時頼之を鎌倉に招請し、菩薩戒を受け、歸山の後、六條保を以て、山の厨供に充てんとせしも、辭して受けず。また後嵯峨天皇紫方袍を賜ひ、其の徳を表はし給ひしに、再三固辭し、遂に之を受けしも生涯身に着けず、時に偈を上つて其の恩を謝せしかば、天皇益欽重を加へ給ふといふ、これ普く人口に膾炙

する所なり。永平寺に住するもの前後十年、後深草天皇の建長五年の夏、疾を示し、王侯親族之を聞き、促して京師に赴かしむ。其の八月二十八日、西洞院俗弟子覺念の家に寂す。世壽五十四。著はすところ甚だ多し。就中『正法眼藏』九十五卷は、禪師の説法示誨の草本を孤雲懷辨禪師の輯めて七十五帖となしたるを第一とし、後漸次添加せられたるものにして、實に禪師の暖皮肉、活骨髓といふべし。其の他、『永平廣錄』十卷、『永平清規』二卷、并びに『普勸坐禪儀』、『學道用心集』、『寶慶記』等各一卷あり。孝明天皇勅して、弘性傳東國師と謚し、明治天皇更に承陽大師の徽號を賜ふ。

道元禪師の法を嗣ぐもの京師永興寺の詮惠和尚あり、また僧海首座は、年少にして器重せられしも師に先ちて興聖寺に寂せり。獨り孤雲禪師永平の法席を嗣ぎ、洞宗の第二祖と稱せらる。孤雲禪師名は懷辨、九條相國爲通の曾孫、鳥養中納言爲實の孫なり。叡山に登りて剃髮受戒し、後、多武峯の覺晏上人に隨ひて始めて禪に參ず。道元禪師の歸朝して建仁に居るや、行いて法を問ひ、深く之に服し、遂に建仁に侍し、共に深草に轉ず。凡そ元禪師に従ふもの二十年、殆んと其の左右を離れずといふ。其の元禪師に長ずると三歲、元禪師、頗る之を重んじ、代りて衆を統率引導せしむ。初め元禪師に隨從せし者、滅後皆雲禪師の指誨を受け、義介、義演、義準、寂圓、佛僧、道荐等、悉く法を孤雲に承く。元禪師に次いで永平の住持位に著きしが、文永四年東堂に退き、資徹通をして法席を嗣がしむ。然るに徹通一たび其の職を退きしにより、文永九年復再住し、弘安三年八月廿四日、世壽八十三にして寂せり。徹通義介禪師は孤雲懷辨禪師の法嫡なり。俗姓は藤原氏、越前足羽郷の人。十三にして同國波着寺の懷鑒和尚を禮し

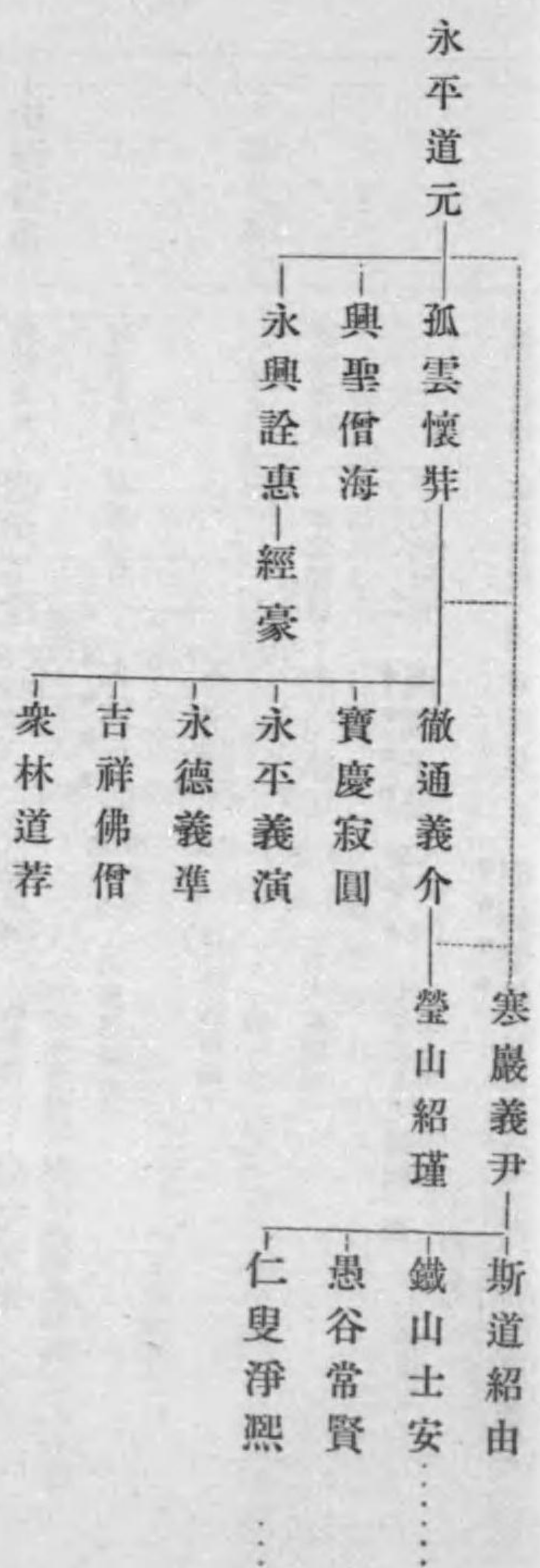
て落髮す、鑒は覺晏上人の徒たりしが如し。翌年叡山に登りて大戒を受け、諸宗の學を研き、仁治二年、始めて深草に道元禪師に參ず。禪師寂後、并禪師によりて參究し、并また推して衆に首たらしむ。正元元年、并禪師の勸めにより、親しく叢林の規模を見、永平宗旨建立の意を大成せんが爲め、宋に入りて歴遊四歲、歸りて山門、兩廊を造り、三尊を安置し、凡そ僧堂の規矩、此に至りて備はれるもの多し、緇白皆以て永平の中興と讚せりといふ。文永四年、永平の席を繼承し、一住六年、弘安三年再住し、同十年、義演に後を譲り、加賀押野に大乘寺を開いて第一世となる。蓋し大乘寺はもと密院なり、本願澄海阿闍梨なるもの參見回心し、改めて禪寺となし、禪師を招請せしものなり。既にして年衰老、弟子紹瑾をして大乘に住せしめ、隱居獨菴、凡そ十年、延慶二年九月十四日、壽九十一にして寂す。

孤雲の法嗣、始め多く道元禪師に參じ、禪師滅後、孤雲の法を繼ぐ。永平四世、義演禪師を首とし、越前寶慶寺の祖、寂圓、同永徳院の祖、義準及び首座、佛僧等皆是なり。寂圓は宋の人にして、道元禪師に隨從し、本邦に來れるものなりといふ。義準は初め懷鑑に師事し、更に天台の教觀を學し、道元禪師に興聖に參じ、寂後、孤雲の法を承け、越前永徳院を創す、後其の終る所を知らずといふ。佛僧は、孤雲寂後、三年に滿たずして寂せり。道荐は、徹通を介して、雲禪師に謁し、後、化を美濃に布く、衆林寺の祖なり。

寒巖、義尹禪師の嗣法に就いては、古來傳ふる所、四説あり、或は道元禪師に嗣承すといひ、或は孤雲の嗣子といひ、或は徹通の嗣子といひ、又は法を天童如淨に嗣ぐといふ。俗系は、後鳥羽帝の皇子と稱し、或は順徳帝の皇子とも傳ふ、何れも其の是非を定め難し。仁治二年



二十五歳にして道元禪師に興聖に參じ。翌年五月一日大事を元禪師に承け、寛元元年二十七歳にして入宋す。或は建長五年三十七歳の入宋ともいふ。翌年を以て歸朝す。超えて十年、文永元年再び入宋して瑞巖の無外遠和尚を始め、靈隱リョウインの退耕タイコウ德寧トクネイ、淨慈ジョウジの虛堂キョウドウ智愚チウ等に歴參し、四年にして歸りて、筑前の聖福寺に居り、肥後如來寺に轉じて第一世となり、次いで大梁山、大慈寺の開山祖となる。龜山法皇賜ふに紫衣、勅額を以てし給ふ。晩年大慈を上足斯道に付し、如來寺に退き、正安二年世壽八十四にして寂す。門下斯道、鐵山、愚谷、仁叟等あり、世に此の法系を呼びて寒巖派といふ。所謂越山系中の主要なるものなり。

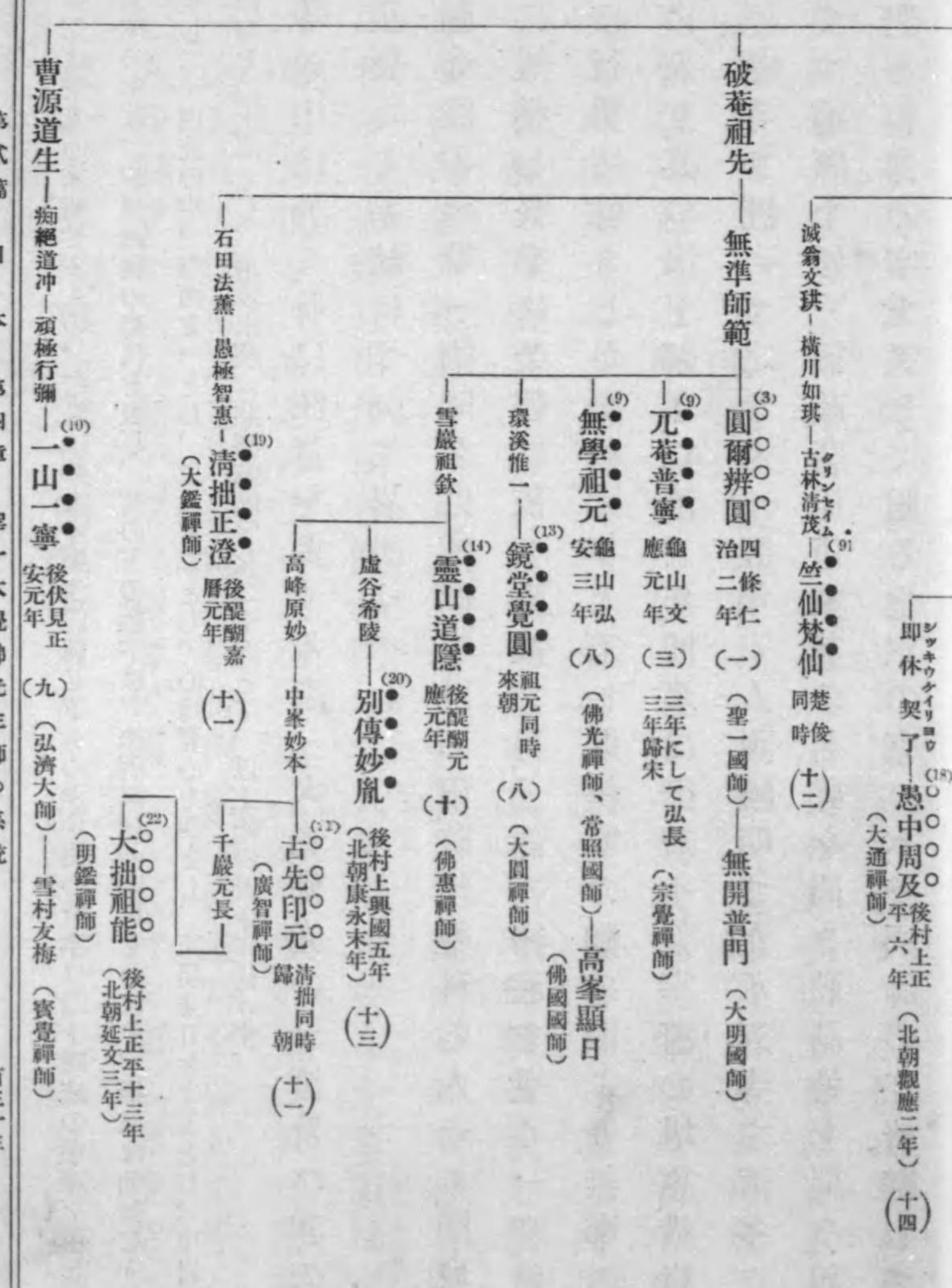
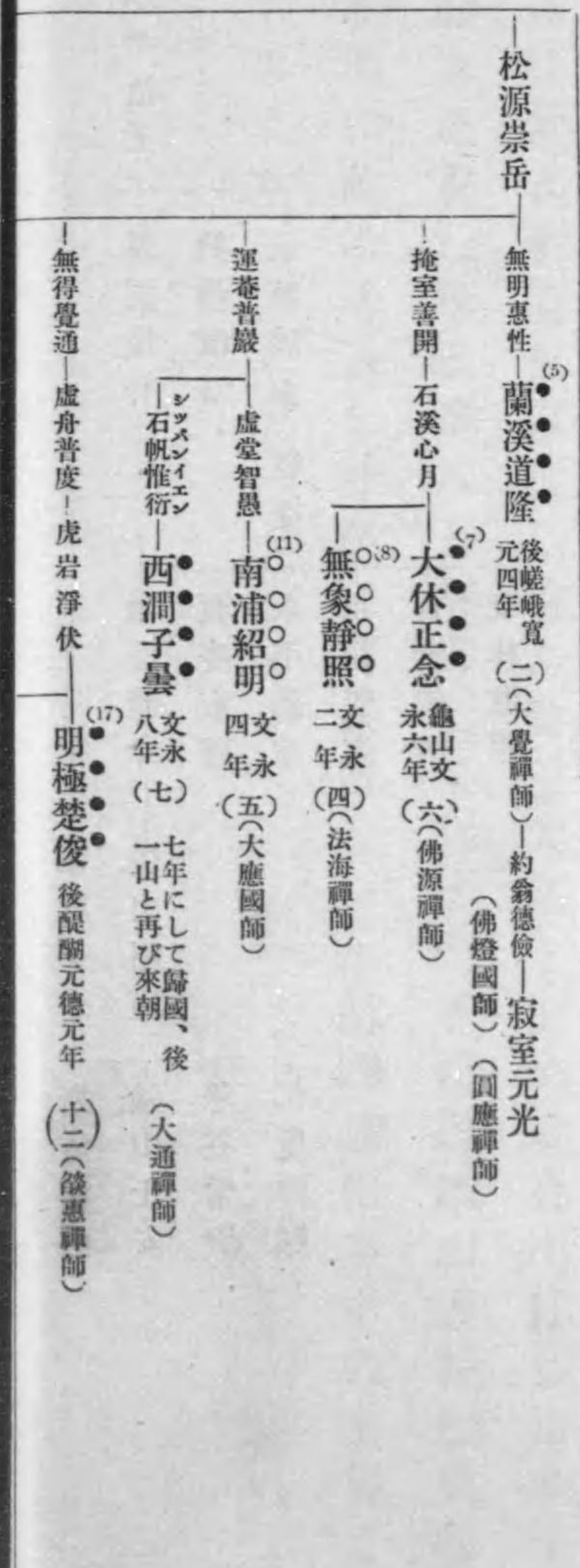


#### 第四章 聖一大覺佛光三師の系統

本邦傳來の禪、二十四流の中に於て、其の法系を探れば道元、東明、東陵の曹洞三傳を除き、臨濟二十一流中、榮西禪師、獨り黃龍派を傳へ他の二十流は悉く楊岐派に屬す。楊岐派は圓悟禪師の系統特に榮え、密菴の下に於て、曹源、松源、破菴の三哲を出す。中に於て、曹源の法流、本邦に來るもの唯一山一寧一人なり。他の八流は、遠く松源に承

け、蘭溪道隆、大休正念、無象靜照、南浦紹明、西澗子曇、明極楚俊、愚中周及、竺仙梵仙の八人即ち是にして、餘の九流は破菴ハクアンに出で、内八流は近く無準の法脉を嗣ぐ。圓爾辨圓、兀菴普寧、無學祖元、鏡堂覺圓、靈山道隱、別傳明胤、古先印元、大拙祖能及び清拙正澄の八人は以上の外にあり。唯だ心地覺心と中岩圓月の二人は以上の外にあり。

圓悟克勤 — 虎丘紹隆 — 應菴曇華 — 密菴咸傑 —



黒點は宋人の來朝せるもの、白點は邦人の嗣法歸朝せるもの、字肩の數字は二十四流の順序を示し、名下の年は、來朝歸朝の時代を表し、其の下の數字は、來朝歸朝の順序を明にす、括弧は勅號なり、但し二十四流の中、榮西を一とし、道元を二とし、心地覺心を四とし、東明惠日を十五とし、中岩圓月を二十三とし、東陵永興（慈濟禪師）を二十四とす、以上此の表中に掲げず。

此等の中に於て、特に注意を要する聖一、大覺、佛光の三流及び其の他重要な系統について畧説すべし。

東福寺派の祖、聖一國師、名は辨圓、字は圓爾、駿州藁科の人なり。園城寺に雉髮し、長樂に榮朝に依り、禪戒を得、三部の密灌を受く。一時、鎌倉に行勇に就きしが、嘉禎元年入宋し、退耕寧の勧めにより、無準の室に入り、其の法を嗣ぎ、仁治二年、博多に歸着す。太宰府の堪惠、横嶽山崇福寺を開いて之を迎へ、翌年、宋人謝國明、また承天寺を博多に建て、國師を延く。攝政藤原道家、其の名聲を聞き、聘請、道を問ひ、親ら聖一和尚の字を書して贈る。僧正の官、日本總國師の任、皆辭して

受けず。道家乃ち其の建つるところの東福寺に請うて開山祖となす。後嵯峨上皇、召して禪戒を受け給ひ、北條時頼、招いて壽福を董さしむ。壽福、禪規の備はれる實に此の時にあり。國師教相密乘に於てまた當代の冠たり、學者の疑を質す者多く、法成、天王、尊勝、東大等の諸大寺、禪師、詔により其の寺務を管せり。弘安三年十月、世齡七十九にして東福の常樂菴に寂す。花園天皇の正和元年、國師の號を贈らる、本朝國師號の起原なり。『聖一錄』『聖一法語』『十宗要記』等の著あり。嗣法の者多しと雖、東山湛照、無關普門の二人最も重要なり。東山は、東福の第二世にして、もと淨土の教徒、十地上人覺空の弟子、世に所謂慈一上人なり。堀河天皇、其の皇姉郁芳門院（子媿）の遺宮を捨して寺となし、六條御堂といふ。慈一、聖一國師に謁して玄旨を領し、師覺空と共に教より禪に轉じ、六條御堂を改めて、萬壽寺といふ。故に萬壽寺

覺空湛照二人を以て開山となす。湛照の下に虎關師練を出す。虎關は元亨釋書三十卷の著を以て、普く世に知られ、虎關派は、其系統一時最も榮えたる者とす。虎關は京師の人、東福、南禪等に住し、後村上帝の時、國師の號を賜はり、正平元年（北朝貞和二年）齡六十九にして寂す。無關禪師は、信州保科の人、初め長樂の榮朝に隨ひ、稟戒受學し、後、聖一の法を嗣ぐ。入宋歴參十二年、特に斷橋妙倫（ジャウ、メウ、リョウ）の信證を得たり。東山の東福を退くや、其の第三世となり、衆に臨む者十餘年。正應年中、龜山上皇、其の離宮を捨して寺となし、太平興國南禪禪寺といひ、延いて開山始祖となす。正應四年十二月年八十にして寂す。諡して佛心禪師といひ、後大明國師の號を加賜せらる、即ち南禪寺派の祖なり。建長寺派の祖、大覺禪師、名は道隆、蘭溪と號す。蜀の人、成都の大慈寺に雉髮稟具す。年三十三にして本邦に來り、北條時頼、延いて常樂寺

に住せしめ、建長四年、更に巨福山建長興國禪師を建て、請うて開山始祖となす。居ること十三年にして、勅により建仁寺に遷り、三年にしてまた鎌倉に還る。流言のために誤まれ、甲州に謫せられしが、弘安元年許されて建長に入り、此の年七月世壽六十六にして寂す。龜山天皇勅して大覺禪師の號を賜ふ、本朝禪師號の起原なり。大覺錄の遺著あり。門下得法のもの二十四人、約翁德儉を其の首となす。儉また入宋、當代の名衲に歴參し、歸朝の後、東勝、淨妙、建仁、建長等に住し、後宇多上皇の命により、南禪に轉じ、元應元年病に罹るや、上皇特に佛燈大光國師の號を賜ふ。生前の國師號、之を始めとなす。此の年五月七十六にして寂す。語録を佛燈錄と名づく。寂室元光、其の下に出づ。元光は作州の人、元應二年入元し、天目の中峯本禪師等に歴參し、六年にして歸朝す。閩閩を避けて久しく地方にあり、正平十五

年(北朝延文五年)佐々木氏頼(崇永)の招請を受け、其の地の閑寂を喜び、こゝに留まり、永源寺を開く。東勝、建長、天龍等の聘、皆辭して應ぜず。正平二十二年(北朝貞治六年)世壽七十八にして寂す。謚して圓應禪師といふ。即ち永源寺派の祖とす。寂室録は其の語を録するものなり。

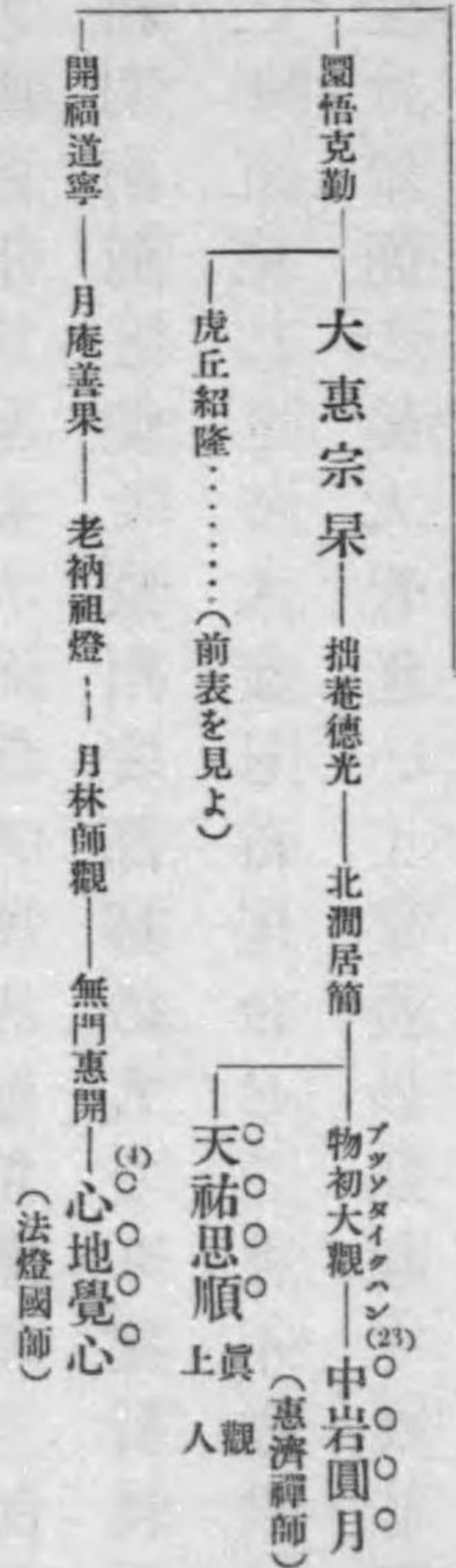
圓覺寺派の祖、佛光禪師、名は祖元、字は子元、無學と號す。明州慶元府の人なり。無準禪師に參じ、未だ印證を得ずして準順世す。後、虛堂愚に謁して所省あり、台州眞如に出世して懷香無準法乳の恩に酬ゆ。元兵の南進するや、國師の一偈、能く之を斥けしもの、世の久しく喧傳する所にかゝる。其の本邦に來りしは、齡五十五歳の時にして、建長席を虚うせしにより、北條時宗の請ひに基きしなり。弘安五年時宗、瑞鹿山圓覺寺を建て、國師を第一祖となし、乃ち建長より遷り住す。同九年九月年六十一にして寂す。勅謚號佛光禪師。光嚴院の時、重

ねて圓滿常照國師を贈る、語を録して『佛光錄』といふ。法嗣高峯顯日は後嵯峨天皇の皇子なり。聖一國師によりて、剃度し、兀菴に參じ、後下野那須山に隱る。壇越爲めに一寺を開いて雲巖寺といふ。次いで佛光に謁して省悟あり、雲巖に還りて燒香佛光に酬ゆ。當時太宰府横嶽の大應國師と東西相對し、二甘露門と稱せらる。淨妙淨智を経て建長に住せしも、晩に再び雲巖に退き、居ると二年、正和五年、齡七十六にして寂す。勅して佛國應供廣濟國師といふ。『佛國錄』あり。

紀州由良興國寺の開山、心地覺心は信州の人、初め高野山の密徒、金剛三昧院に退耕行勇を拜して弟子となり、廣く當時の禪匠を歴訪し、長樂の榮朝に參じ、深草の道元に受戒し、勝林の天祐思順に問ひ、此に於て南詢の志あり。天祐順は、其傳明ならざれども、早く入宋して北碕に嗣ぎ、世に眞觀上人といふ。覺心建長元年年四十三にして

彼の地に赴き、無門開禪師の法を承け、首尾六年にして還り、退耕を  
 高野に省し、第一座となり、後西方寺の願主、由良の地頭願性(藤原景倫)の  
 請により、其の第一世となる、後の鷲峯山興國寺是なり。龜山、後宇多  
 の二帝、歸向殊に深く、招いて勝林寺に住せしめ、次いで禪林寺を開  
 いて居らしむ、辭すれ共許されず、徒弟相議し、潜に遁れ、扶掖して鷲  
 峰に還る。永仁六年十月世壽九十二にして寂す。敕諡して圓明國師  
 といふ、『法燈法語』の遺著あり。徳川時代普化虛無僧の起源を、國師に  
 歸す、是非知るべからず。其の法嗣に孤峯覺明あり、出雲雲澗寺の祖  
 なり。其の弟子慈雲妙意、孤峰の勧めにより、法燈に參じ、法燈の命を  
 受けて、雲澗に孤峯に嗣ぎ、越中國泰寺に住す。國泰寺は、惠日聖光の  
 開く所にして、後醍醐天皇の勅願といふ。即ち今の國泰寺派の起源  
 なり。

楊岐方會—白雲守端—五祖法演—



一山一寧は宋の台州の人、年五十三にして本邦に來り、北條貞時疑  
 ひて伊豆の修禪寺に置く。後、建長、圓覺、淨智に歷住し、後宇多上皇の  
 勅により、強えて南禪に轉ぜしめ、文保元年九月、壽七十一にして寂  
 す。勅して妙慈弘濟大師といふ。法嗣雪村友梅禪師は、越後の人、少に  
 して一山國師に服事し、年十八渡海求法し、不幸にして元廷に捕へ  
 られ、囚獄の後、西蜀に流さる。十年にして長安に歸り、留ること三歲、  
 文宗命じて翠微寺を董さしめ、特に寶覺眞定禪師の號を賜ふ。元徳

元年四十歳にして歸朝し、赤松圓心(村則)の法雲寺を建つるや、其の開山祖となり、萬壽、建仁等に住し、正平元年(北朝貞和二年)壽五十七にして寂す。『語錄』及び『岷峨集』(卷四)の著あり。

### 第五章 大燈、夢窓二師の系統

二十四流中の臨濟の諸流は、正系次第に其の法脉を失ひ、後世最も繁榮せるものは、獨り南浦大應の一流のみ。大應の下に大燈國師出て、大燈の下に無相大師起る、所謂應燈關の三師是なり。大應國師名は紹明、南浦と號す、駿州安部郡の人なり。建長に大覺に參じ、正元元年二十五歳にして入寂し、首尾合せて九年、虛堂に參じて其の印可を受け、歸朝の後、大覺延いて建長の知藏となし、横嶽崇福寺は、文永九年より、三十餘年間、衆を接する所なり。伏見上皇召して萬壽を主

らしめ、また嘉元寺を興造して其の第一世となす。徳治二年、北條貞時奏して建長寺に主たらしむ。翌延慶元年臘月閏世七十四にして寂す。勅謚して圓通大應國師といふ。『語錄』大應錄あり。嗣法の者、大燈國師最も著はる。國師名は妙超、號は宗峯、播州揖西の人、幼にして書寫の圓教寺に入りて天台の僧となり、後、轉じて佛國に參じ、大應の横嶽より入洛すと聞くや、隨從參仕、其の法を嗣ぎ、大應滅後、洛東雲居寺に隱るゝもの殆んど二十年、嘉暦元年紫野に一小院を構へて居る。赤松圓心、其の子則祐、爲めに法堂を建て、天台の僧玄惠、私宅を捨て、方丈を造る。(今の雲門菴)これ即ち大徳寺なり。花園上皇、召して法を問ひ、興禪大燈國師の號を賜ひ、後醍醐天皇、また高照正燈國師と加賜し、大徳寺を以て南禪と相並べて祝聖道場となす。建武四年十月廿一日、世齡五十六にして寂す。靈元天皇の貞享三年、また大慈

雲匡眞國師の號を加謚せらる。『大燈錄』は其の語録なり。得法の弟子十五人中に於て徹翁義亨、關山惠玄を首となす。義亨後を嗣いて大徳の第二世となる。勅謚大祖正眼禪師なり。後水尾天皇の時、澤菴禪師、其の國師號を辭して二祖義亨に譲る、乃ち勅して天應大現國師といふ。『徹翁錄』あり。之を大徳寺派の系統とす。義亨より三傳して養交宗願あり。大徳寺、初め班を南禪と同うせしも、後小松帝の時、貶して十刹に列す。養交の時また奏して五山に加ふ。養交の同參に一休宗純あり。後小松帝の子と傳ふ。當時の禪風徒らに師承の虚儀を尊び、禪の眞意を去る遠きを慨し、殊に奇行世を警しめ、威儀に關せず。文明十三年、八十八にして寂す。其の語を録するもの『狂雲集』續狂雲集あり。

關山惠玄禪師は、信濃の人なり。性極めて恬淡、隱逸を喜び、得法の後、

美濃の伊深山に入り、草菴を結んで跡を没す。大燈、滅に臨み、花園上皇使を遣はして、和尚百年の後、朕、誰に隨ひ、法を聽かんと問はしむ。大燈、乃ち關山を推す。上皇此に於て關山を索めしめ、漸く之を濃の山中に得、召して正法山妙心寺を創して住せしむ、これ即ち妙心寺派の起源なり。師、衆を接する峻巖、大燈の舊參、會中に歸するもの十六人、唯授翁宗弼一人を許すのみ。正平十五年(北朝延文五年)十二月十二日享齡八十四にして寂す。勅して本有圓成佛心覺照國師と謚し、明治に至り無相大師の號を加へらる。但し妙心寺が、大徳寺と相並んで祝聖道場となりしは後柏原帝の時にあり。

授翁より四傳して雪江宗深に至り、足利氏の末期、天下亂離の際、其の下に所謂妙心四派の系統を出せり。東陽英朝の聖澤派、悟溪宗頓の東海派、景川宗隆の龍泉派、特芳禪傑の靈雲派是なり。蓋し是等の



諸師は皆明應(後土御門)永正(後柏原)の間に入寂せり。

大應國師—大燈國師—無相大師—授翁宗弼—無因宗因—日峯宗舜—

—義元玄詔—雪江宗深—

—東陽英朝—天蔭德樹(聖澤菴を開く)

—悟溪宗頌(雪江に次いで東海菴に住す)

—景川宗隆—景堂玄訥(龍泉菴を開く)

—特芳禪傑—大休宗休(靈雲院を開く)

後の臨濟末流は専ら此の四派の源頭に出づ。鎌倉の末、足利氏の初めに當り、大燈國師と相並んで、法界に一代の重きをなせるものは實に天龍寺派の祖、夢窓國師なり。國師、名は疎石、蓋し支那の疎山、石頭に名を取るといふ、夢窓は其の號なり。伊勢の人、四歳の時、學家甲州に移る。幼にして天台に入りしも、後、禪に轉じ、遍く諸老宿に參じ、

特に一山、佛國二師に就き、終に佛國に嗣ぐ。性、隱栖を願ひ、出世を喜ばず、初め甲の龍山菴に居り、濃の古溪(今の虎溪)の、煙塵に遠きを賞してこゝに隱れ、北條高時の母、覺海夫人の招請を避けて、土佐の吹江庵に遁れしも免れず、鎌倉に入り、何も無くして三浦泊船庵に退く。正中二年、後醍醐天皇、之を南禪寺に延く、辭すれども聽さず、強えて之に赴き、翌年、鎌倉に歸り、南芳庵を開いて居る。高時、また固く淨智に請ひ、半歳にして出て、錦屏山に瑞泉寺を建て、深く其の景致を喜ぶ。一たび圓覺を董せしも、また直ちに辭して瑞泉に退き、更に甲州惠林寺に入る。惠林寺は二階堂道蘊(貞藤)の建つるところにして、國師を請うて開山祖とせり。元弘三年、後醍醐天皇の船上より歸落し給ふや、師を瑞泉に召し、國師の號を賜ひ、爲めに臨川寺を開いて住せしむ。寺は龜山法皇の仙居、護良親王所邸の遺跡なり。次いで南禪を

惠林寺

瑞泉寺

管する二年、後醍醐天皇の吉野に崩じ給ふや、足利尊氏追薦のため  
 に天龍寺を建て、國師を仰いで其の始祖となす。其の他尊氏の等持  
 院、直義の眞如寺及び攝津の西芳寺等、國師を仰いで祖とするもの  
 なほ甚だ多し。花園、光嚴、光明の諸帝、深く其の徳を崇び、尊氏また厚  
 く之に師事し、光明天皇、特に夢窓正覺國師の號を賜ふ。正光六年（北朝  
 二年）九月三十日、世壽七十六にして寂す。全身を臨川寺の三會院に塔  
 す。『夢窓錄』、『夢窓法話』、『谷響集』、『夢中間答』、『西山夜話』等の遺著あり。  
 夢窓國師、風化甚だ隆んにして、嗣法のもの五十餘人、法孫一時に榮  
 えしも、今殊に最も注意すべきもの二三を擧げん。無極志玄は京都  
 の人、夢窓に圓覺に隨ひ、夢窓老後、無極をして代りて天龍を董さし  
 む。夢窓滅後再び天龍に住し、退院の後、正平十四年（北朝延文四年）享年七十八  
 にして寂す。勅謚佛慈禪師といふ。遺骨を慈濟に塔す。『語錄』、『無極錄』あ

り。春屋妙葩、不輕子と號す。甲州の人、幼より夢想國師に隨ひ、後、諸徳  
 に歴參し、夢窓の法を嗣ぎ、正平十二年（北朝延文二年）尊氏の請により、等持院  
 に住す。等持院は、また尊氏が後醍醐天皇の冥福のために建て、夢想  
 を請ひ、開山祖となせる所なり。翌年天龍寺焼け、正平十六年（北朝康安元年）臨  
 川寺また災あり、再建舊觀に復する皆妙葩の力なり。正平二十二年（北朝應永  
 六年）天龍また火災に罹る。妙葩再び之を興建す。正平二十四年（北朝應永  
 八年）南禪寺、山徒と争ふことあり、大衆多く分散す。葩退いて丹後の雲門  
 菴に居るもの十年、後圓融天皇召して南禪の席に補し、智覺普明國  
 師の號を賜ふ。足利義滿、崇信殊に深く、葩を以て天下僧録司となし、  
 爲めに寶幢寺を開いて第一世となし、別に壽塔を建て、鹿王院と  
 いふ。義滿また相國承天禪寺を建て、葩を開山祖となさんとす。葩乃  
 ち夢窓を仰いで第一祖となし、自ら第二世に居る。元中五年（北朝嘉慶二年）八

月世齡七十八にして鹿王に寂す。遺著『普明錄』『雲門一曲』あり。  
 足利尊氏の時、支那五山十刹の制に倣ひ、始めて京湘の大寺を擧げて五山の名を設け、別に十刹を全國に設く。義滿の世に至り、始めて京五山、鎌倉五山として、京には、天龍、相國、建仁、東福、萬壽、鎌倉には、建長、圓覺、壽福、淨妙、淨智とし、南禪を以て五山の上と定む。淨妙寺は退耕行勇の建つる所にして、淨智寺は大休正念の開く所とす。蓋し足利氏の世、前後戰亂相續ぎ、文教漸く衰ふ。此の間に於て、禪僧獨り詩文經學を傳へて研鑽怠らず、世に之を五山文學といふ。中に於て語錄の如きは、今一々枚擧に違なしと雖、虎關の『濟北集』、雪村の『岷峨集』、中巖の『東海一漚集』等、最も世に知らる。しかも絶海中津の『蕉堅稿』(卷三)、義堂周信の『空華集』(卷二十)は、世の推して其の魁とする所なり。絶海、義堂は、共に夢窓門下に出づ。絶海は土佐の人、蕉堅は其の號なり。正平

二十三年(應安元年)支那に赴き、居ると首尾十二年。相國寺に住し、應永十二年、齡七十にして寂す。熊野峰前の詩は人口に膾炙する所なり。義堂周信、空華道人と號す、また土佐の人なり。建仁、南禪等に住す。『空華集』の外、『義堂錄』、『空華日工集』以下著書尙ほ多し。南禪を五山の上に班すると、義堂董席の時にあり。元中五年(北朝嘉慶二年)、享年六十四にして寂す。なほ足利氏時代に於ける入元傳法のもの一二をこゝに附記すべし、一を愚中周及とす。愚中は濃州岐阜の人、少にして夢窓に臨川に謁して沙彌となり、夢窓之を春屋に附す。十九にして興國二年(北朝應永四年)、元に赴き、居ること十年にして歸り、即休了禪師の法を得たり。入洛直ちに天龍に夢窓に拜觀す。此の秋、夢窓入寂す、心喪すること三年。應永二年、安藝小早川氏(平孫)の請ひにより、佛通寺第一世となる。將軍義持、請うて京に招ぐ、幾ならずして紀州の禪頭寺に通る。應永十六

年八月壽八十七にして寂す。之を佛通寺派の祖とす。『冥明抄』、『鼎餘集』の著あり。勅謚號を佛徳大通國師といふ。二は遠州奥山方廣寺の祖無文元選禪師なり。禪師は、後醍醐天皇の子、愚中より二年の後、康國四年（北朝康永二年）に元に入り、在元七年、古梅無友の法を稟け、觀應元年に歸朝せり。時に年二十九。古梅は雪岩欽四世の法孫なり。後龜山天皇元中七年（北朝後小松康應二年）閏三月、六十八歳にして寂せり。

## 第六章 寒巖瑩山二禪師の系統

曹洞宗は、高祖道元禪師以下、四代太祖瑩山紹瑾禪師に至り、門葉鬱然として一時に繁興す。二禪師を稱して洞門の兩祖となし、其の根本道場たりし永平寺、總持寺を以て兩大本山と稱す。而して寒巖義尹の開創せる肥後の大慈寺は、實に曹洞宗勅願賜紫の濫觴なり。大

慈寺は、寒巖より鐵山を經、三傳して華藏義曇に至る。義曇、遠州引間の城主吉良氏の爲めに、普濟寺の第一祖となる。得法のもの十三人、各化を一方に唱ふ。普濟寺の十三派之より出づ。就中東海義昌は三河豊川の妙嚴寺を開き、誓海義本は尾州熱田の圓通寺を開く。これ皆足利氏季世のことに屬す。

洞門の太祖、瑩山禪師、名は紹瑾、越前多禰郡の人なり。俗姓は藤原氏、柚山爪生氏の同族といふ。文永五年十月八日を以て生る。年八歳にして永平寺に投じて沙彌となり、十三にして永平孤雲に就て受戒得度す。孤雲滅後徹通に依る。十八にして出て、諸方に歴參し、寶慶の寂圓、萬壽の東山照、由良の法燈心等に謁し、遊方五年にして還りて徹通に大乘に隨侍し、研鑽絶倫。後、平常心是道の話に參じて徹證し、終に通の印證を受く。永仁四年阿波海部の郡司の請に赴きて城

滿寺を創立し、正安元年大乘に歸省して専ら接衆の任に當る。乾元二年徹通の大乘を退くや、命により其の主席を繼ぐ。應長元年大乘寺を明峯に譲り、淨住寺に轉じて其の開祖となり、また能州の豪族滋野信直及び其の夫人平氏の請により、酒井保に洞谷山永光寺を開き、頗る其の風光を愛して、密に以て終焉の地に擬す。時に同州の律院諸嶽寺定賢禪師の德風を慕ひ、終に革めて禪刹となし、元亨元年禪師を請して開祖たらしむ。後醍醐天皇特に綸旨を下して賜紫出世の道場とす。後、席を峩山碩に付し、永光寺に還り、正中二年八月十五日、世壽五十八にして寂す。『傳光錄』坐禪用心記等あり。後醍醐天皇嘗て十種の勅問を垂れ、禪師奉答の文と稱するもの今現に傳ふ。後村上天皇勅して佛慈禪師と謚し、後桃園天皇の時、弘徳圓明國師と加謚せられ、明治天皇更に常濟大師の號を追賜し給ふ。

瑩山禪師の下、得法のもの六人中に就いて明峯、峩山の二神足、各二十餘員の俊傑を出し、門庭繁興す。明峯素哲は、加賀の人、初め叡山に出家す。瑩山に大乘に參じて後、諸方に歴遊し、既に印可を受け、大乘寺に住し、轉じて洞谷を繼ぎ、一住十餘年。元弘元年、後醍醐天皇、北條氏を滅すや、師、攘災驗ありとの故を以て、永光を擧げて官寺となし給ふといふ。後再び大乘に退き、更に越中に光禪寺を開き、正平五年(北朝觀應元年)六月、光禪に寂す、享齡七十。其の末流、徳川氏の世に至り、大に范濫し、太祖下、唯明峯派、峩山派、今に至るまで相對峙す。明峯嗣法のもの多しと雖、特に其の法系の主要なるものに就いて、十二門派の名あり。珠崑道珍の法系、最も永く榮え、祖繼大智また甚だ名を知らる。大智は肥後の人、始め大慈に寒巖に依り、南浦に參じ、瑩山に就き、入元して諸老宿に謁し、歸朝の後、明峯に嗣ぎ、加賀に祇陀寺を開き、晚

に生地肥後に還り、菊池武重の請ひにより、紫陽山廣福寺の初祖となる。遺著「大智偈頌」最も廣く愛誦せらる。大智の後は、今其の統斷絶して傳はらず。

峩山紹碩は能登國羽喰郡の人、初め天台の僧なり。後、瑩山に謁し、入室付法了りて、正中元年、總持の席を嗣ぐ。一たび永光に轉じ、復、總持に還り、正平二十年(北朝貞治四年)、亨壽九十一歳にして寂す。峩山門下最も盛にして、得法二十五哲、中に於て太源宗眞、通幻寂靈、無端祖環、大徹宗令、實峰良秀は殊に峩山下の五哲を以て稱せられ、其の末流は峩山派中の最も主要なるものとす。其の他、無底良詔、源翁心昭、月泉良印等の如き、また大に注目すべき英俊とす。蓋し瑩山の寂するや、總持寺は「嗣法門人輪流住持」の龜鑑を定め、峩山また重ねて其の旨を示せしにより、五哲、各山内に一院を構へ、五院輪次に其の職に當るの

端を開けり、即ち太源の普藏院、通幻の妙高庵、無端の洞川庵、大徹の傳法庵、實峰の如意庵是なり。

太源宗眞は加賀の人、總持に出世し、永光に移り、晩に佛陀寺を開く、佛陀、後廢滅して、其の遺蹟、今詳ならずといふ。應安三年十一月寂す。法嗣梅山聞本、了堂眞覺最も名を知らる。梅山は越前龍澤寺の祖にして、其の下に大初繼覺、傑堂能勝、如仲天閻等を出す。大初は朝倉、波多野二氏の請により、越前松隱寺の開祖となり、傑堂は、越後に耕雲寺を開いて、梅山を第一世となし、自ら二世に居る。如仲は遠州に大洞院を創建し、また梅山を仰いで第一祖となす、これ應永年間のことなり。如仲、法裔最も廣く、眞巖道空、喜山性讚等の法嗣あり。眞巖の下に川僧惠濟出で、喜山の下に茂林芝繁出づ。茂林より崇芝性岱を経て隆慶繁紹あり、伊豆の修禪寺はもと密寺にして、鎌倉時代に臨

濟の禪院となりしが、繁紹入りて其の頽廢を興し、始めて曹洞の大刹となれり。了堂眞覺の下には太容梵清、奇叟珍異等の人々出て、皆佛陀寺に住す。奇叟は南蠻の人と傳へらる。

通幻寂靈は豊後の人、或は洛陽の産ともいふ。初め明峯に隨ひ、後峩山に嗣ぐ。應安三年、細川頼之の請により、丹波に永澤寺を開く。至徳三年、請ぜられて越前龍泉寺の祖となり、明徳二年五月龍泉寺に寂す。永澤、龍泉二處に塔す。師、衆を接する最も峻嚴、峩山門徒、嗣法二十五人、遺誠に背くもの十四人、皆之を擯斥す。門下の十哲、特に了菴、惠明、石屋眞梁二人を推して首となす。了菴は相模の人、本州最乗寺の祖なり。其の下に大綱明宗、無極惠徹の二流を出す。大綱の門に吾寶宗璨、春屋宗能の二人あり。吾寶は伊豆に最勝院を開き、嗣法のもの五人あり。拈笑宗英、南極壽星、雲岫宗龍、模菴宗範、州菴宗彭是なり。春

屋の法嗣七人、在仲宗宥、安叟宗楞、即菴宗覺、實山永秀、天巽慶順、月窓明潭、靈叟宗俊是れにして、吾寶下五哲と共に、末流大に范濫す。呼びて大綱十二派といふ。殊に在仲の嗣法桂堂原佐は、下總に總寧寺を開き、松菴宗榮、結城持朝の招請により、結城乘國寺の祖となる。總持を謝して後、特に紫衣の宣旨あり、僧綱の命を受け、宗門出世、入衆戒臘の諸法則を董し、江湖の制、こゝに魯變すと稱せらる。無極惠徹は武藏龍隱寺の開祖にして、其の下に月江正文あり、法嗣泰叟妙康、華叟正尊等あり。泰叟より天菴立彭を経て雲岡舜徳に至る、之を武藏青松寺の祖とす。華叟の下、快菴妙慶は、下野に大中寺を開き、大林正通は、上野に茂林寺を建つ。

石屋眞梁、薩摩の人、島津氏の歸依により、同國福昌寺を開く。其の資智翁永宗は、大内氏の崇信篤く、長州大寧寺の祖となる。同門に覺穩





無端祖環  
大徹宗令  
實峯良秀  
無底良韶  
月泉良印  
道叟道愛  
源翁心昭

天真自性  
英仲法俊  
普濟善救

石屋真梁  
智翁永宗  
覺穩永本

無極惠徹 月江正文

春屋宗能

雲軸宗龍  
模庵宗範  
州庵宗彭

在仲宗宥  
安叟宗楞  
即菴宗覺  
實山永秀  
天巽慶順  
月窓明潭  
靈叟宗俊

秦叟妙康 天菴立彭 雲岡舜德  
華叟妙藝 快菴妙慶  
大林正通

### 第七章 黃檗宗の起原及び心越禪師

徳川氏の初期支那にありては、明末清初の交に當り、彼の國の名僧の本邦に渡來したるもの頗る多し。就中、隱元禪師の東渡は、盛んに其徒の來朝を促す端となれり。隱元禪師の來着より二十餘年を隔て、東皐心越禪師、また來りて水戸に入る。隱元禪師は、即ち臨濟禪を傳ふるものにして、心越禪師は曹洞禪を傳ふるものなり。但し隱元の後には、特に黃檗宗の宗名を公稱し、蔚然一方に其の派を樹てしも、心越に至りては、其の影響斯くの如く大ならず。

隱元禪師、名は隆琦、明の福州の人、俗姓は林氏。少にして父、旅程に上り、所在を失ひ、獨り母龔氏に仕ふ。深く再び父に遭はざるとを悲しみ、母に請ひて其の行く所を覓む。尋求し舟山の普陀山に詣し、院内

にありて、衆のために茶湯の役に當る。後久しからずして家に還り、頗る出塵の志あり、しかも母之を許さず。年二十九、母の喪終りて、普陀山に赴き、出家の志を遂げんと欲す。時に黄檗の鑑源壽に印林寺に遭ひ、其の言に隨ひ、遂に黄檗山に雉染す。出で、諸方に講經の席に列し、會ま天童の密雲禪師、金粟山に居ると聞き、行いて之に謁し、密雲の黄檗に住するや、また之に隨ひて檗山に入り、獅子岩に居る。崇禎六年、密雲の嗣、費隱通容黄檗に住す。禪師參究年あり、崇禎七年、四十三歳にして印可を受く。費隱、禪師を擧げて西堂に居らしめ、付するに拂子を以てす。後費隱に次いで黄檗に住する者再度に及ぶ。之より先、禪師の弟子也、嬾性圭、請を受けて法を日本に弘めんとす。禪師即ち嬾を召して首座となし、秉拂せしむ。然るに不幸にして海上暴風に遭ひ、嬾遂に洪波の難に死す。禪師の來朝實に遠くこゝに

因すといふ。其後、明の永明王永曆九年、本邦長崎興福寺の僧逸然、使を黄檗に遣はし、禪師を本邦に迎へんとし、懇請四度に至る。禪師其の志を感じ、遂に東渡の意を決す。逸然はもと明僧の我が國に歸化せるものなり。乃ち永曆八年六月(清の世祖の順治十一年に當る)を以て彼の地を發し、其の翌月長崎の地に着す。これ我が朝承應三年七月のことにして、禪師時に年六十三なり。蓋し當時、禪師の法を傳ふるもの既に甚だ多し、而して惠門如沛、後を承けて黄檗に住し、其の他、獨湛性瑩、大眉性善、南源性孤、獨吼性獅等皆禪師に隨從して來朝す。興福寺に入り、更に崇福寺に遷り、道聲四方に喧傳せらる。時に攝津富田の普門寺に龍溪性潛あり、遙に禪師を其の寺に迎へんとし、書を裁して東上を請ふもの兩度、禪師辭して應ぜず。しかも衆の勸むること切なるを見、明曆元年普門寺に入り、祝國開堂の儀を行ふ。萬治元年、命によ

り江戸に出て、將軍家綱に謁し、再び普門に還り、翌年將軍特に京都の附近に地を賜ひて一寺を建立することを許す。禪師大に喜び、龍溪と相議し、宇治郡大和田の地を相し、工事成りて黄檗山萬福寺と號す、これ寛文元年のことなり。住山四年、寛文四年、黄檗の席を高足木菴に譲り、自ら松隱堂に隱居す。延寶元年病を得、後水尾法皇素より禪師の法に歸す、こゝに於て勅して大光普照國師の號を賜ひ、其の四月三日壽八十二にして寂す。「普照國師廣錄」三十卷を始めとし、遺著頗る多し。

禪師門下傳法のもの總べて二十三人と稱す。中に於て法孫本邦に存するもの木庵、即非、龍溪、獨湛、大眉、獨照、南源、獨吼、獨本の九人のみ。龍溪、獨照、獨本の三人を除いて、餘は悉く明僧なり。

木菴性瑫は、明の泉州の人、十九にして出家し、鼓山の永覺禪師に謁

し、また密雲、費隱に參じ、次いで隱元の法を嗣ぐ。明曆元年、本邦の招きに應じて來朝す。之より前、明僧蘊謙、戒琬あり、早く長崎にありて福濟寺に住す。木庵の來るや、迎へて其の寺に居らしむ。寛文元年、黄檗に到り、同四年、隱元の法席を繼ぐ。蓋し一山の規模大に整ひ、檗宗の基礎確立するもの、實に庵の力多きに居る。翌年、江戸に出て、將軍家綱に謁し、此の年居士青木端山、白金に瑞聖寺を建つるや、請じて開山祖となし。延寶三年、鐵牛を擧げて瑞聖に住せしめ、次いで黄檗の席を惠林に付し、紫雲院に退く。越えて九年、貞享元年一月、世壽七十四にしてこゝに寂す。嗣法のもの五十餘人、「木庵廣錄」三十卷以下述作多し。木庵會下の高足、鐵牛、機、惠極、明、潮、音、海を世に、木庵門下の三傑といひ、別に木門十哲の稱あり、鐵眼光の如き、中に於て最も廣く其の名を知らるゝものとす。鐵牛、名は道機、自牧子と號す、石

見の人なり。十五にして出家し、諸方に教禪の席に列し、明暦元年、長崎崇福寺に隠元禪師に謁し、後木庵の法を嗣ぎ、瑞聖寺の第二世となる。老中稻葉正則最も深く牛に歸し、其の請により、小田原紹泰寺を開き、また正則と謀り、下總椿沼に於て新田八萬石開墾の業を就す。武藏向島弘福寺を始め、其の創開する所の寺院また多し。元祿十三年壽七十二にして寂す。惠極道明は、其の傳甚だ詳ならず。鉄牛に次ぎ、瑞聖寺の第三代たり。潮音道海は、肥前小城郡の人、十三にして沙彌となり、一たび長崎に隠元禪師に參じ、再び黄檗に謁し、後木庵に嗣ぐ。江戸大慈菴に住し、化道甚だ盛なり。館林侯、上州黒瀧山に廣濟寺を建て、海を請じて開山となす。音、木庵を第一世とし、自ら第二世に居る。音、其の學頗る廣く、禪教神儒に涉り、最も神道に達す。著書甚だ多し。元祿八年八月壽六十八にして寂す。鉄眼道光は、肥後益城

の人、十三にして出家し、長崎に於いて隠元禪師を拜してより、富田普門寺に隨從し、後木菴の會下に屬す。一日慨然として嘆じて曰く、佛教東渡以來、伽藍の建設、佛像の彫造、其の數洵に多く、名師碩徳の輩出また決して少からず、獨り大藏經を刊行して、法寶流通の資となすものなきは、これ至大の闕典にあらずやと。此に於いて東西至る所に講席を開き、盛んに「法華」、「楞嚴」、「起信」等の經論を講じ、以つて法財を募り、終に印刷の業を成す。今日の所謂「黄檗版大藏經」是なり。凡そ寛文八年より、延寶六年其の功を終はるに至るまで、前後十年餘を費せりといふ。天和二年畿内飢饉の際に當り、賑恤に力を致したるは、また著名の事蹟なり。同年三月大阪瑞龍寺に於て、世壽五十三歳にして寂す。瑞龍寺は、信徒の請により、眼の中興する所なり。

隱元禪師の法嗣、木庵と化を駢ぶるものを即非如一となす。即非は支那福州の人、隱元禪師によりて受具し、其の書記となる。一日、後山火發りて、林木悉く燒く、即非、衆と之を救ひ、逆風焰を返し、猛火四邊に逼り、遂に地に仆れて、頭面手足損傷すれども知らず。既にして衆漸く之を助けて出づ。非、忽然眼を開き、豁如として大悟す。隱元禪師の日本に來るや、翌年非を招ぐ。非、長崎に來り、崇福寺に住し、木庵福濟にあり、相對して法を布く。寛文三年、隱元を新黃檗に省し、木庵と共に兩堂に首たり。同四年九月、辭して支那に還らんとし、豊前を過ぎる。小倉侯、迎へて福聚寺を開き、非を第一祖となす。在任四年、長崎崇福寺に退き、同十一年五月、こゝに寂す。壽五十六。法嗣、千呆（或は千默）性、俊あり。明の福州の人、曇瑞と號す。長崎崇福寺の二世となり、また新黃檗第六代に居り、元祿十一年、賜紫の榮に預る。寶永二年、壽七十に

して寂す。

黃檗山は隱元禪師より、木庵、惠林を経て、獨湛第四代の住職となり、賜紫高泉（かうせん）、激其（げき）の後を承け、以て千呆に至る。高泉は支那黃檗惠門の法嗣、名は性激、雲外、或は曇華道人と號し、福州の人なり。寛文元年、隱元禪師の召に應じて東渡し、後加賀松雲公の聘を受け、猷珠寺に居り、又屢宮中に入りて法を説き、靈元上皇最も其の道に歸し給ふ。元祿八年十月六十三にして寂す、勅諡して大圓廣惠國師といふ。其の門に了翁道覺あり、東叡山勸學寮及び文庫を起したる等の事蹟を以て、普く其の名を知らる。今黃檗宗系統の要を示せば左の如し。

圓悟克勤——虎丘紹隆——應菴曇華——密菴成傑——破菴祖光——無準師範——雪巖祖欽——高峰原妙——中峰妙本——千巖元長——高峰時蔚——東明惠岳——海舟普慈——寶峰明瑄——天奇本瑞——絕學明聰——笑巖德寶——禹門正傳——密雲圓悟

費隱通容—隱<sup>1</sup>元隆琦—

惠門如沛—高泉性激<sup>5</sup>—了翁道覺

鐵牛道機

惠極道明

潮音道海

鐵眼道光

木庵性瑫<sup>2</sup>

即非如一—千呆性佞<sup>6</sup>

惠林性機<sup>3</sup>

龍溪性潛

獨湛性瑩<sup>4</sup>

大眉性善

獨照性圓

南派性派

獨吼性獅

獨本性源

字肩の數字は黄檗山歴代の順序を示す千呆以後は略して掲げず、なほ隱元、木庵等の會下、多しといへども、本文に擧げざるものは總べて之を省きたり。

東臯心越、名を興儔といひ、明の杭州金華府の人なり。早く覺浪道盛に謁し、後師命により、翠微大文により、參究省發あり、遂に印證を受く。延寶五年明僧澄一<sup>ちんい</sup>長崎興福寺にあり、遙に越の道譽を聞き、迎へて其の寺に入らしむ。一旦異門の言を構ふるものあるにより、長崎に幽閉せられしも、幸にして水戸義公の其の宛を釋くあり、義公乃ち請うて江戸の別邸に迎へ、天和三年水戸に入り、元祿三年命により、天徳寺に住す、尋いで改めて壽昌山祇園寺といふ。同七年春微恙を示す、九月終に起たず、壽五十七にして寂す。越書畫に長し、最も七絃琴に達す。門下其の曲を傳へて以て後世に至る。越の傳法の系統は、壽昌派なるものにして、壽昌惠經に出で、其の下に四派を出し、東苑元鏡より覺浪道盛、翠微大文を經、以て心越に至るものとす。<sup>(第一</sup>

篇第十二) 章參照

## 第八章 臨濟宗の中興

足利氏の末より、臨濟の禪は、一時大に衰へたりしが、徳川幕府の世に至り、一縷の命派僅に正法の面目を傳へ來りし、妙心派下聖澤の系統に出でたる白隱惠鶴禪師あり、始めて大に其の家風を宣揚し、今日の臨濟宗多く皆其の末流を酌む。白隱禪師以前に於ては、徳川の初期にありて、其の名を一時に擅にせしもの、唯澤庵禪師一人のみ。金地院崇傳の如きありといへども、もと幕府政治の上に大なる關係あり、或は宗教制度上に致したる力は少からざるべしといへども、所謂禪の所得に至つては知るべからず。勅諡號を圓照本光國師といふ。澤庵禪師、名は宗彭、但馬出石の人なり。十歳にして淨土宗に雉髮す。後、宗鏡寺内の勝福寺に入り、業を希先西堂に受け、先順世、

董甫忠に宗鏡に使ふ。忠、京都に出づるに及び、隨ひて大徳寺の三玄院に掛錫す。既にして明堂古鏡禪師に和泉の陽春庵に就き、其の印證を受け、澤庵の號を授けらる。同國南宗寺に住し、また京都大仙寺に居り、故郷但馬の宗鏡寺を興す。寛永六年、大徳寺出世のことに關し、幕命に違ふものとなし、將軍の命を以て、大徳寺玉室、妙心寺單傳と共に配流に處せられ、出羽上山に貶せらる。其の居春雨庵の遺跡、亦なほ存す。九年赦されて歸り、之より後、將軍家光屢法を問ひ、頗る旨に稱ふ。同十五年將軍、品川に萬松山東海寺を創立し、禪師を招いて住せしむ。正保二年二月、壽七十三にして寂す。

關山の法胤は東陽英明より後、大雅、端匡、功甫、玄勳、先照、瑞初、以安、智察の四世を経て、東漸、宗震に至る。宗震の下に庸山、景庸を出し、庸山の下に愚堂、東寔を出す。之よりさき、聖澤庵、院務漸く空しく、頗る衰

頽に歸せんとす。東漸の時庸山に命じて之に居らしめ、山大に其の廢れたるを興す、之を聖澤の中興となす。愚堂東寔は美濃の伊自良の人、庸山に聖澤に參じ、後美濃の大仙寺に居る、目して中興となす。大仙寺はもと東陽の建つる所にして、大雅以下歷代皆こゝに住す。歳久うして漸く朽廢に歸す、此に於て愚堂之を再造すといふ。後水尾上皇、召して法を問ひ給ひ、將軍家光また招いて其の教を聽く。嗣法の弟子總べて八人、聖澤の禪之より頗る興るの兆あり、自ら其の像に贊して曰く、葦原や絶えて久しき法の道を、踏み分けたるは此の翁哉」と。寛文元年、壽八十三にして寂す、勅諡して大圓寶鑑國師といふ。法嗣至道無難、一絲文守最も著はる。至道無難は美濃關原の人、寶鑑國師、大仙より京に至るの途次、常に其の家を過ぎる。至道親しく禪要を問ひ、遂に心源に透徹す。しかも家に繼嗣なきを以て久し

く出家の志を遂げず、一日國師其の家に至り、飲酒度に過ぐるを誠む、至道感佩、國師を送りて家を出て、直ちに隨從江戸に來り、遂に剃度其の弟子となる。麻布東北菴(後に東北寺と改む)に居り、自ら至道庵主と號す。寛文の末年、參學の土地を澁谷に相し、東北寺を建て、請うて開山始祖となす。避けて之に主たることを欲せず、首座惠端を擧げて代りて居らしむ、端また免れて故郷信濃に還る。此に於て愚堂最後の弟子慧水首座を擧げて第一代となすといふ。自ら別に至道庵に居り、延寶二年、庵を小石川に移し、同四年八月、病なくして逝く、世壽七十四。一絲文守は岩倉具堯の第三子、年十四にして相國寺の雪岑梵菴(雪岑梵菴)に侍し、後、泉南南宗寺に澤庵に參じ、澤庵の事によりて出羽に配せらるゝや、一絲隨つて之に赴き、侍すること年餘、還りて洛西岡村に閑夢庵を結んで居る。後、明に入りて明師を求めて法を質さんとせ



しも、國禁なるを以て果さず、次いで妙心に愚堂の法を嗣ぐ。當時後水尾上皇最も心を禪に寄せ給ひ、彼の黃檗の龍溪并びに東寔、澤庵等皆屢宮中に召され、就中一絲其の歸向特に篤し。上皇の皇女梅宮、初め關白鷹司教平に嫁し、離別の後、世の無常を感じ、年二十二にして遂に一絲の弟子となり、出家して南都山村に圓照寺を建て、こゝに居給ふ。法名文智、深如海院宮と號す。寛永十五年、一絲上皇の命により、西賀茂に靈源寺を建て、住し、同十八年には、丹波に法常寺を創し、殊に其の舊殿を賜ふ。二十年江州永源寺に移り、正保二年三月壽三十九にして寂す。一絲最も勤王の心深く、生涯常に關東の跋扈を惡み、澤庵の江戸に近けるが如きを見て、常に之に快からずとせり。其の寂するや、上皇追悼、諡して定惠明光佛頂國師といひ、靈源、法常の二寺を以て永く勅願寺となし、此の二寺を以て恰も兩翼の如

しとなし給へり、世に之を兩翼の御宸翰といふ。

至道無難禪師の下にありて、獨り其の正法眼を傳ふるものを道鏡惠端となす。惠端信州飯山侯の庶子、十三にして早く出塵の志あり、十九にして無難禪師に麻布の東北庵に師事し、其の印證を受く。無難、端をして法席を嗣がしめんと欲す、固く辭して受けず。飯山に還り、樽澤に正受庵を營みて居る、後自ら正受老人といふ。白隱禪師は、其の鉗槌の下に打出されしものなり。端、家法峻嚴、其の白隱を遇する苟くも假借せず、隱の自ら恃む所以のもの、遂に打碎して一塵を留めざるに至るは、全く此の手段に出づるなり。享保六年十月、世壽八十にして寂す。

白隱禪師、名は惠鶴、一字を鵠林といふ。駿河浮島の人、俗姓は杉山氏。十五にして單嶺傳によりて出家し、後美濃の大垣に瑞雲の馬翁に

依る、馬翁當時詩文を以て著はる、禪師の志之を學ばんと欲するなり。一日曝書に際し、『禪關策進』を得、開いて之を見るに、汾陽寒宵、錐を引いて自ら其の股を刺すの一段なり。此に於て感奮禁ぜず、瑞雲を辭し、出で、諸方に歴參し、箇事を究明す。年二十四、越後高田に至る。此の地に英岩寺あり、木庵の嫡孫にして、惠極道明の法を嗣げる。性徹和尚、こゝに『入天眼目』を提唱すと聞き、殊に其の席に列せんとするなり。しかも性徹は其の透關の眞骨頭にあらざるを知り、寺後高田先侯の墳廟あり、獨り此中に退き、一七日間斷食接心す。滿七日の夜半遂に鐘聲を聞き、身心脱落、纖塵を絶す。覺えず叫んで曰く、巖頭老人猶好在と。蓋し昔時巖頭全齋賊の爲めに害せらるゝことを知り、此の一代の龍象、なほ生きながら此の禍に遇ふかと、疑團氷結永く釋けず、之れ此の語ある所以なり。禪師これより意氣頗る高

く、一切の人を見ること土塊の如し。會ま一僧宗格なるものに遭ふ、格、説くに正受老人のことを以てす、禪師意動き、行いて之を見んと欲し、格に伴ひて飯山に至り、始めて其の所見を呈す。正受肯せず、こゝに於て留まりて參究す。正受入室ごとに一語を發せしめず、大聲常に罵りて「穴藏禪法」といひ、追うて室を出てしむ。禪師心平ならず、將さに正受庵を去らんとし、出で、分衛し、一老婆の家門に立つ。老婆竹帚を取りて之を打つ、此の時釋然として得る所あり、直ちに正受庵に還り、始めて端禪師の印可を受く、時に年二十四、之より尙ほ諸方に歴遊し、遍く禪匠を訪ひ、享保二年、歳三十三にして、請により先師單嶺の後を承けて松蔭寺に入る、屋宇朽廢、雨には堂上笠を戴き、履を著けて事を執れりといふ。禪師こゝに住するもの三十年、其の間、入りては衆を督し、出で、は法を説き、殆んど寧日なし。明和

五年十二月、法子遂翁を召し、後事を囑し、曉旦安眠、大咩一聲して寂す。世壽八十四。勅謚號神機獨妙禪師といひ、明治十七年正宗國師の號を加へらる。著す所『荆叢毒藥』九卷、『槐安國語』五卷、其の他假名法語の類頗る多し。『壁生草』は禪師の自叙傳なり。

白隱禪師の系統を世に鵠林派といふ。禪師の會下人を出すこと甚だ多し。就中主要なるものを遂翁元廬、東嶺圓爾、峩山慈棹の三人とす。遂翁は下野の人、舊名惠牧、性酒を嗜み、自ら醉翁と號す、人其の甚しきを言ふ、依つて改めて遂翁となすといふ。性卓犖不羈、鵠林の寂後、東嶺翁を推して松蔭に住せしむ。法を求むるものあれば、唯言ふ東嶺に參じ去れと、更にまた一語を出さず、斯くの如きもの七年、鵠林七年の忌を修するに當り、衆の勧めにより、已むを得ずして始めて開法す。爾來門庭市を成し、請ひに他方に赴く、法衆常に群をなせ

り。寛政元年七十三歳にして寂す。東嶺圓慈は近江の人、初め古月に參じ、後鵠林を見る。辛鍊苦修、終に病を致す。以爲へらく我既に宗趣を究むと雖、若し死せば、何ぞ法門に益あらんや。因て『宗門無盡燈論』を著はし、之を白隱に呈し、京都白河に退いて病を養ふ。一日、無心中より豁然として鵠林半生の受用底を徹見す。再び還りて鵠林に謁す、林法衣を出して之に附す。伊豆に龍澤寺を開き、鵠林を仰いて第一祖となす。林、晩年氣力漸く衰へ、嶺代りて衆を接す。凡そ鵠林門下五位十重禁等、微細の旨要、嶺に過ぎたるものなし、人呼んで微細東嶺、大器遂翁と呼べりといふ。寛政四年七十二歳にして寂す。峩山慈棹は奥州の人、初め三春の高乾寺に月仙禪惠により剃度し、出て、四方の禪徳を叩き、後月仙を武藏永田東輝庵に省し、其の許可を受く。以爲へらく歴參三十餘人、獨り未だ鵠林を見ず、他の用處若何を

知らんと欲すと。月仙之を留むれども聽かず、始めて鵠林に江戸桃林の碧巖會に謁す、林、痛罵して出でしむ。之より深く林に服し、其鉗槌を受くるもの四年。林既に老ゆ、由てまた東嶺の輔爐に入る。永田に歸り、また湯島の麟祥院に住す。麟祥院は將軍家光、春日局の爲めに建つる所にして、初め報恩山天澤寺と稱せしが、後に天澤山麟祥院と改めたり。寛政八年、病を熱海に養ひ、翌年正月、こゝに寂す、春秋七十一。凡そ鵠林の系統、今に存するもの多く、峨山に出づ、また以て其の法化の盛なるを知るべし。

東陽英朝——大雅尚匡——功甫玄勳——先照瑞初——以智安察——東漸宗震——庸山景庸——愚堂東寔——至道無難

道鏡惠端——白隱惠鶴

一絲文守

遂翁元盧

東嶺圓慈

峨山慈棹

白隱禪師と畧ぼ同時にして較、先輩なる古月禪材禪師あり、また禪風を九州の一角に振ひ、其の末鵠林の如く盛なること能はずと雖、別に古月派の一系をなせり。古月は日向那珂郡の人。十歳にして出家し、二十三の時阿波の慈光寺に湛梁巖に參じ、後豊後多福寺に悦賢巖に見え、日夜參究、寧處に違あらず。之より法を四方に説き、寶永四年島津惟久の命により、佐土原の大光寺に住し、別に一庵を結び、知又軒といひ、以て終焉の所となす。後惟久更に知又軒を重修し、改めて自得寺といひ、禪師を以て開山祖となす。寛文四年久留米侯有馬頼種の請拒むべからざるにより、久留米に赴き、地を相し、寺基を定め、福聚寺を建つ。晩に妙心寺の請ありしも辭して受けず、寶曆元年四月、福聚寺に寂す、壽八十五。勅して本明廣鑑禪師と謚す。會下蘭山正隆あり、豊前の靜泰院に住し、小笠原侯の歸依篤し、勅賜號圓機